鹿角市文化財調査資料85

特別史跡

大湯環状列石

発掘調査報告書(22)

2006. 3

鹿角市教育委員会

序

大湯環状列石は、野中堂、万座環状列石を主体とする縄文時代の遺跡であり、その特異な形態、規模から昭和26年には国史跡、さらに31年には特別史跡に指定されております。

鹿角市は、市民の誇りでもある、この貴重な文化遺産を保存するとともに、整備、活用するため、昭和59年から環状列石周辺の発掘調査を継続してまいりました。

これらの調査結果を基に、平成10～14年度には、第Ⅰ期環境整備事業として、野中堂・万座環状列石周辺107,000㎡の環境整備とガイダンス施設である大湯ストーンサークル館の建設を行っております。

環状列石の洗浄・保存処理により、野中堂環状列石と万座環状列石は今後も露出展示が継続できるようになり、さらには配石遺構、掘立柱建物の復元や地形復元、植栽により、縄文時代の雰囲気が感じられるすばらしい史跡となりました。

本年度からは、第Ⅲ期環境整備計画地の資料収集のため、史跡東側の発掘調査に移行しました。その結果、一本木後ロ配石遺構群の南側に接して新たに12基の配石遺構が発見され、このゾーンの遺構の広がりや性格を推察できる資料を得ることができました。

本報告書はその成果をまとめたものであります。本書が大湯環状列石はもとより全国で発見が続いております環状列石の研究の資料として、多くの方々にご利用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書作成にご指導、ご協力いただきました関係機関、各位に厚く感謝を申し上げます

平成18年３月

鹿角市教育委員会

教育長　織　田　育　生

例　　言

1　本報告書は、平成17年度に国庫補助金を得て実施した特別史跡大湯環状列石第22次発掘調査の成果をまとめたものである。調査の概要については現地説明会、大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」で発表してきたが、本報告書を正式なものとする。

2　本報告書の執筆と編集は、生涯学習課秋元信夫、藤井安正、三浦貴子が行った。

3　石器類の石質鑑定は秋田県立横手高等学校教頭　鎌田健一氏にお願いした。

4　土層や土器などの色調の記載には「新版　標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。

5　本報告書に使用した地形図並びに図面は次の通りである。

・国土地理院発行25,000分の１「毛馬内」

・鹿角市教育委員会作成の1,000分の１「特別史跡大湯環状列石現況地形図」

・鹿角市所蔵の「陸中国鹿角郡大湯村字一本木後　第三拾三」、「陸中国鹿角郡大湯村字万座第三拾六」、「陸中国鹿角郡大湯村字野中堂　第三拾七」の地籍図

6　遺物の実測、拓本、トレースなどの一連の整理作業は調査員、調査補助員、整理作業員が行った。

7　本報告書に使用した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。

8　本報告書の文中において用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用されているものについては簡略している場合もある。

9　図版、表などで下記のような記号、スクリーントーンを使用した。

ＳＸ（Ｓ）…配石遺構、ＳＫ…土坑、ＳＸ（ｆ）…焼土遺構、ＳＭ…道路状遺構

…遺構確認面下の層　　…焼土

10　発掘調査並びに本報告書作成にあたり、下記の方々からご指導、ご助言をいただきました。心から感謝申し上げます。（敬称略、順不同）

斎藤　忠、村越　潔、小林達雄、冨樫泰時、沢田正昭、熊谷常正、安村二郎、阿部義平、本中　眞、小野健吉、市原富士夫、岡村道雄、遠藤正夫、工藤清泰、稲野裕介、宮沢賢一

本　文　目　次

序
例言
本文目次
図版・写真図版・表目次
第Ⅰ章　遺跡の環境
1　遺跡の位置と立地…… 1
2　周辺の地形・地質…… 2
3　周辺の遺跡…… 3
4　遺跡の層序…… 6
第Ⅱ章　調査の概要
1　調査要項…… 9
2　調査の目的…… 10
3　調査の方法…… 11
4　調査の経過…… 11
第Ⅲ章　A_4区の検出遺構と出土遺物
1　縄文時代
(1)　配石遺構…… 16
(2)　土　　坑…… 26
(3)　焼土遺構…… 27
(4)　遺構外出土遺物…… 35
①　土　器…… 35
②　石　器…… 36
③　土製品…… 43
2　歴史時代
(1)　道路状遺構…… 43
第Ⅳ章　A_5区の検出遺構と出土遺物
1　縄文時代
(1)　焼土遺構…… 45
(2)　遺構外出土遺物…… 45
第Ⅴ章　分析と考察
1　配石遺構群について…… 46
2　道路状遺構について…… 63
第Ⅵ章　調査のまとめ…… 68
参考文献…… 69
写真図版…… 70
報告書抄録

図版・写真・表目次

図　版　目　次

第１図　遺跡位置図……　1
第２図　発掘調査区の地質柱状図……　2
第３図　大湯環状列石周辺の遺跡……　4
第４図　調査区基本層序(1)……　7
第５図　調査区基本層序(2)……　8
第６図　調査区位置図……　12
第７図　トレンチ配置図・遺構分布図…　13
第８図　遺構の分布詳細図……　15
第９図　配石遺構実測図(1)……　16
第10図　配石遺構実測図(2)……　18
第11図　配石遺構実測図(3)……　20
第12図　配石遺構実測図(4)……　21
第13図　配石遺構実測図(5)……　22
第14図　配石遺構実測図(6)……　24
第15図　配石遺構実測図(7)……　25
第16図　配石遺構実測図(8)……　26
第17図　土坑実測図……　26
第18図　焼土遺構実測図(1)……　28
第19図　焼土遺構実測図(2)……　30
第20図　焼土遺構実測図(3)……　32
第21図　焼土遺構実測図(4)……　34
第22図　出土土器(1)……　37
第23図　出土土器(2)……　38
第24図　出土土器(3)……　39
第25図　出土土器(4)……　40
第26図　出土土器(5)・土製品……　41
第27図　出土土器破片分布状況……　42
第28図　出土石器……　42
第29図　出土石器分布状況……　43
第30図　道路状遺構実測図(1)……　44
第31図　一本木後ロ配石遺構群……　48
第32図　配石遺構形態分類図……　49
第33図　一本木後ロ配石遺構実測図(1)…　50
第34図　一本木後ロ配石遺構実測図(2)…　51
第35図　一本木後ロ配石遺構実測図(3)…　52
第36図　一本木後ロ配石遺構実測図(4)…　53
第37図　一本木後ロ配石遺構実測図(5)…　54
第38図　一本木後ロ配石遺構実測図(6)…　55
第39図　一本木後ロ配石遺構実測図(7)…　56
第40図　一本木後ロ配石遺構実測図(8)…　57
第41図　一本木後ロ配石遺構実測図(9)…　58
第42図　一本木後ロ配石遺構実測図(10)…　59
第43図　一本木後ロ配石遺構群
　　Ａ・Ｂ分布図……　61
第44図　道路状遺構実測図(2)……　65
第45図　大湯環状列石周辺の
　　地籍切絵図……　66
第46図　大湯環状列石周辺の古道……　67

写真図版目次

ＰＬ１　大湯環状列石(1)……　70
ＰＬ２　大湯環状列石(2)……　71
ＰＬ３　調査区近景(1)……　72
ＰＬ４　調査区近景(2)……　73
ＰＬ５　調査区近景(3)……　74
ＰＬ６　調査区近景(4)……　75
ＰＬ７　配石遺構(1)……　76

ＰＬ８　配石遺構(2)…… 77
ＰＬ９　配石遺構(3)…… 78
ＰＬ10　配石遺構(4)…… 79
ＰＬ11　配石遺構(5)…… 80
ＰＬ12　配石遺構(6)…… 81
ＰＬ13　配石遺構(7)…… 82
ＰＬ14　配石遺構(8)…… 83
ＰＬ15　配石遺構(9)…… 84
ＰＬ16　配石遺構(10)…… 85
ＰＬ17　配石遺構(11)…… 86
ＰＬ18　配石遺構(12)…… 87
ＰＬ19　土坑・焼土遺構(1)…… 88
ＰＬ20　焼土遺構(2)…… 89
ＰＬ21　焼土遺構(3)…… 90
ＰＬ22　焼土遺構(4)…… 91
ＰＬ23　焼土遺構(5)・道路状遺構(1)…… 92
ＰＬ24　出土土器(1)…… 93
ＰＬ25　出土土器(2)…… 94
ＰＬ26　出土土器(3)…… 95
ＰＬ27　出土土器(4)…… 96
ＰＬ28　出土土器(5)・土製品…… 97
ＰＬ29　出土石器…… 98
ＰＬ30　昭和59年度調査区（Ａ１区）…… 99
ＰＬ31　昭和60年度調査区（Ａ２区）…… 100
ＰＬ32　昭和60年度・61年度調査区
（Ａ２・３区）…… 101
ＰＬ33　一本木後ロ配石遺構群(1)…… 102
ＰＬ34　一本木後ロ配石遺構群(2)…… 103
ＰＬ35　一本木後ロ配石遺構群(3)…… 104
ＰＬ36　一本木後ロ配石遺構群(4)…… 105
ＰＬ37　一本木後ロ配石遺構群(5)…… 106
ＰＬ38　一本木後ロ配石遺構群(6)…… 107
ＰＬ39　一本木後ロ配石遺構群(7)…… 108
ＰＬ40　一本木後ロ配石遺構群(8)…… 109
ＰＬ41　一本木後ロ配石遺構群(9)…… 110
ＰＬ42　道路状遺構(2)…… 111

表　目　次

第１表　大湯環状列石周辺の遺跡…… 5
第２表　一本木後ロ配石遺構観察表(1)… 60
第３表　一本木後ロ配石遺構観察表(2)… 62

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地

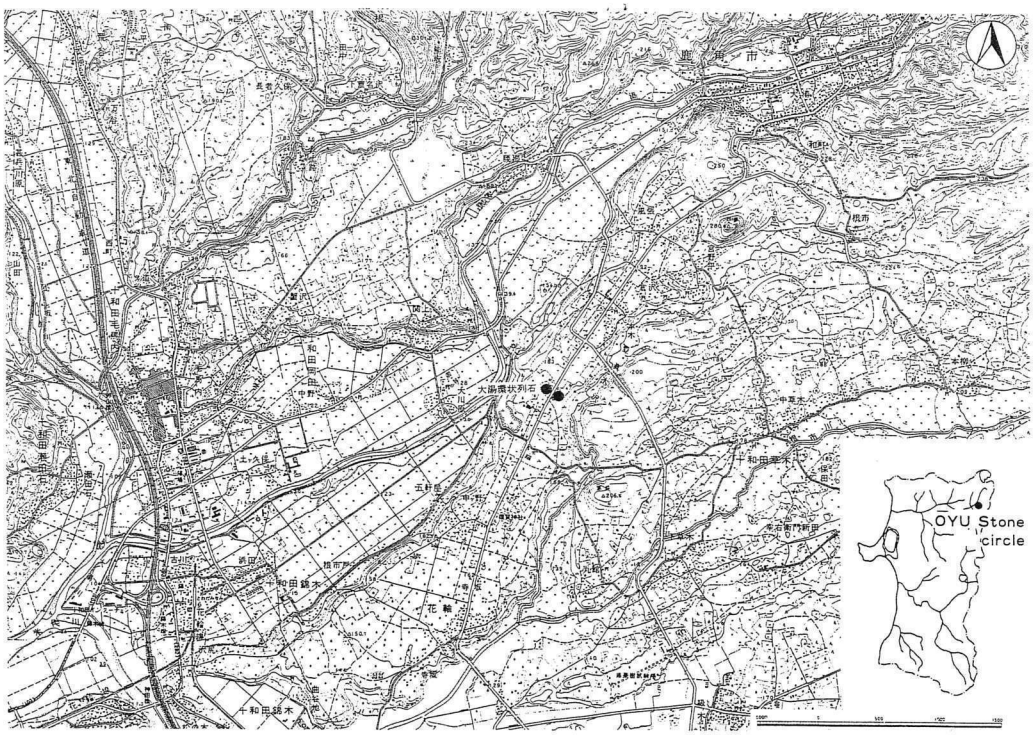
遺跡の位置する鹿角市は、秋田県の北東部に位置し、北は小坂町、南は仙北市、西は大館市、東は岩手県八幡平市と接している。

米代川の上流域にあたり、東西の山々と盆地内の段丘地形及び沖積低地よりなる。この盆地を北上する米代川は、十和田錦木地区で南流する小坂川、西流する大湯川と合流し、川幅を広げ、その流れを変え、大館盆地へと西流する。

米代川やその支流の両岸に発達した段丘上には縄文時代から近世に至る数多くの遺跡がある。特別史跡大湯環状列石もその一つであり、大湯川と豊真木沢川によってつくられた南西方向に延びた長さ5.6km、幅0.5～1.0km、標高150～190mの通称「中通台地」と呼ばれる舌状台地のほぼ中央部に位置している。遺跡周辺の標高は172～182m、北側水田との比高は約60mである。

本遺跡の南西3.5kmには国立公園十和田湖への南玄関口であるＪＲ花輪線十和田南駅が、同3.6kmには東北縦貫自動車十和田インターがある。

本年度の調査区の一つであるＡ４区は、史跡の東部で、昭和59～61年に調査したＡ１～Ａ３区の南西側隣接地であり、野中堂環状列石の北東100～215mの距離にある。同区南側にある小



第１図　遺跡位置図

沢が北側に延び、浅い沢状となっている。以前は普通畑であったが、公有化後は草地となっている。また、Ａ５区はＡ４区の南側の台地縁辺部と斜面部で、台地縁辺部はほぼ平坦、現況は原野である。

２．周辺の地形・地質

鹿角市内の地形は、東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積低地よりなる。

東側の山地は800～1,100mの標高で、四角岳(1,003m)、川投岳(1,122m)、五ノ宮嶽(1,115m)などを中心とする急峻な壮年期の山地である。主として新第三紀中新生の火山破屑類からなるが、それらを貫いて石英安山岩や安山岩も分布している。

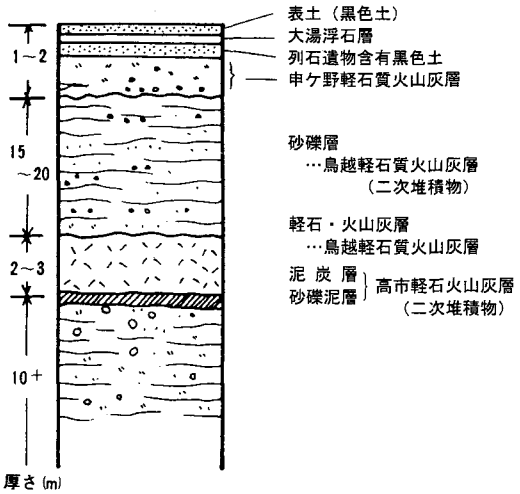
一方、西側の山地は、標高400～600mの丘陵性の山地で、東側同様新第三紀中新世の火山破屑岩を主とするが、大葛層、大滝層などで砂岩や泥岩が発達している。

鹿角盆地はこれらの山地に囲まれ、台地、段丘、低地が至る所にみられる。特に北部には十和田火山由来のシラス台地が分布し、東部や南部は脊梁山脈を源とする河川によって形成された扇状地地形が特徴である。

盆地内の段丘は、大きく４段に分けられる。最高位の面は浦志内川や歌内川などが盆地に注ぐ付近に扇状地状にみられる面で、柏木森面と呼ばれている。標高270～330m、傾斜がやや険しく、かなり解析されている。次の２段目は、標高180～250mで、南部で扇状地状の地形を残すものの、大里以北では厚い火砕流堆積物に覆われ、火砕流台地としての形状を示している。関上面や鳥越面と呼ばれ、盆地内ほぼ全域に分布している。本遺跡もこの段丘上にある。３段目は、標高180～250mで、主として米代川左岸に沿い、尾去沢から松館にかけて分布している。松館面と呼ばれ、夜明島川や黒沢川などによる扇状地の解析された面と考えられている。４段目は米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で、大里面と呼ばれている。標高は150～155mと低く、上部は砂礫層を主としている。

沖積低地は、大湯川、米代川及びその支流である草木川、根市川、豊真木沢川などの現河床沿いの低地で、標高は100～120m、主として砂礫層からなる。

発掘調査地周辺の地質は、大きく分けて４枚の火山灰層よりなる。最下部は高市軽



第２図　発掘調査区の地質柱状図

石質火山灰の二次堆積物で、軽石や砂礫からなり、地層中に平行ラミナやクロスラミナが発達している。この上に薄い泥炭層をはさみ、厚さ２～３ｍの鳥越軽石質火山灰層が、その上に水の作用によって堆積した鳥越火山灰層の二次堆積物である軽石質段丘砂礫層が15～20ｍ重なる。さらに、この上に風化の進んだ大型の軽石礫を含む申ヶ野軽石質火山灰層が１～２ｍ重なる。最上部は黒褐色土や黒色土で、その間に大湯浮石層がみられる。大湯浮石層については、青森県一帯に分布する十和田降下火山灰と一連のものであり、約1,000年前の降下火山灰（十和田ａ降下火山灰）と考えられている。

３．周辺の遺跡

鹿角市内には416の遺跡がある。大湯環状列石周辺の分布密度も高く、特に縄文時代の遺跡の多さが目につく。第３図は大湯環状列石周辺の縄文時代中期後葉から後期の遺跡の分布図である。これまでに発掘調査された遺跡や列石との関連が考えられる遺跡について、その概要を記述する。

黒森山麓竪穴群遺跡(1)は、昭和45年に十和田町教育委員会によって調査が行われている。縄文時代中期末の竪穴住居跡５軒他が確認され、遺構外からは後期の土器も出土している。

下内野Ⅱ遺跡(2)は、平成11年に携帯電話の電波塔建設に伴い、約100㎡が調査された。その結果、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡６軒、フラスコ状土坑７基が確認され、大規模な集落跡と考えられている。遺構外から後期の土器も多量出土しており、後期の遺構の存在も予想される。

下内野Ⅲ遺跡(3)は昭和60年頃に発見された遺跡で、遺跡の種別は配石遺構となっている。平成元年の遺跡詳細分布調査時には畑境に抜き取られたと考えられる川原石が山積みとなっていた。小清水遺跡(4)からも抜き取られたと考えられる川原石が畑境に積まれていたのを確認している。いずれの遺跡にも、環状列石や配石遺構の存在が考えられる。

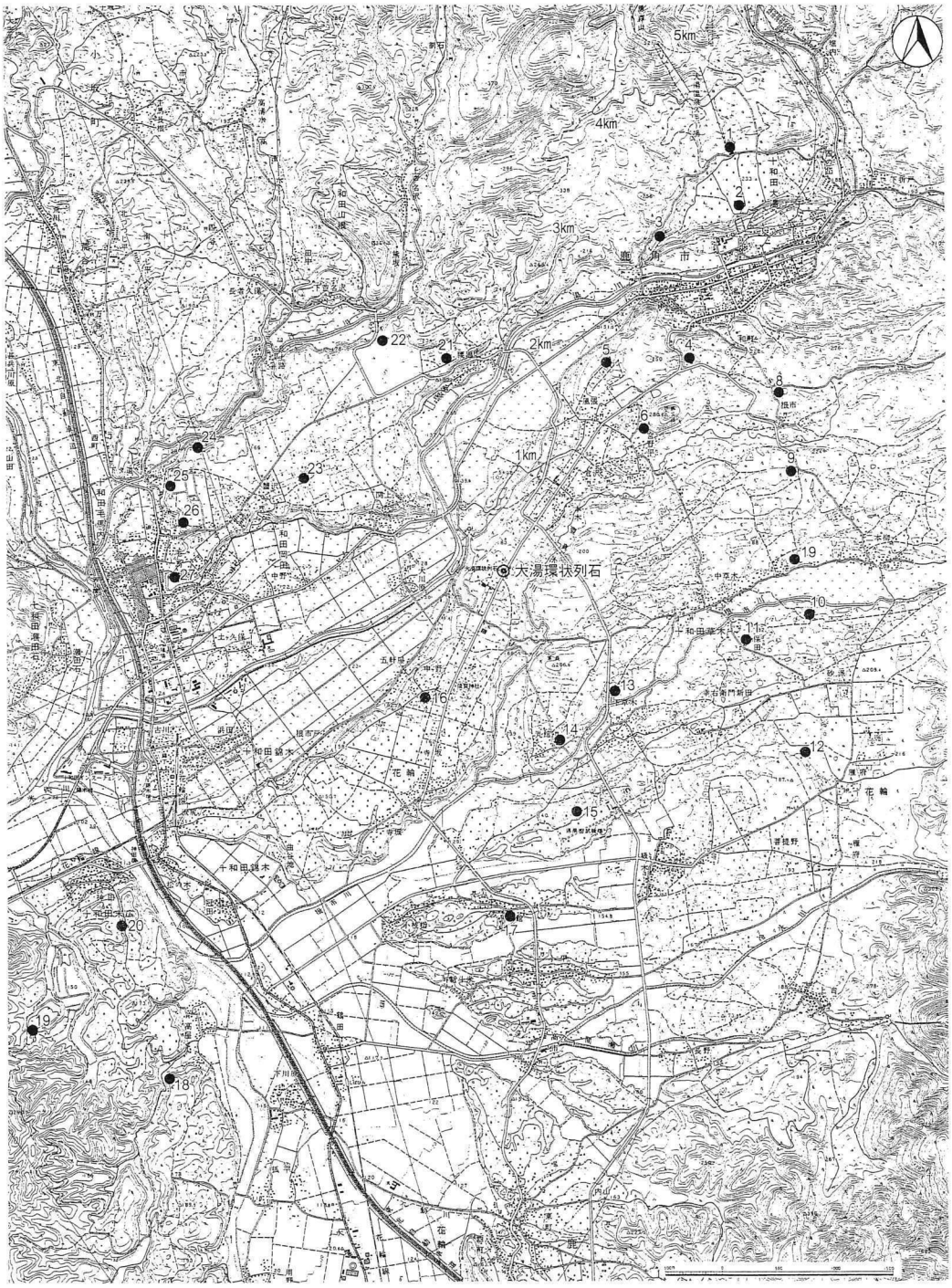
上屋布Ⅱ遺跡(5)、堤尻Ⅰ・Ⅱ遺跡(6)、申ヶ野Ⅴ遺跡(16)は大湯環状列石と同じ台地上にあり、同時期の遺跡であることから、関連が考えられる。

草木Ａ(13)遺跡は、昭和49年に広域農道建設に先立って調査されている。この調査では遺構は検出されていないが、後期後半の土器が出土している。調査地点の後背には平坦な畑地が広がっており、集落の存在も予想される。

高屋館跡(18)は、昭和63～平成元年に農免農道建設に伴い、秋田県教育委員会が発掘調査を行っている。環状列石と掘立柱建物群が発見されており、大湯環状列石との関連が注目されている。

下砂沢遺跡(22)は、平成元年に工業団地造成に伴って発掘調査を行い、配石遺構２基他が検出されている。

（秋元信夫）



第３図　大湯環状列石周辺の遺跡

第１表　大湯環状列石周辺の遺跡

No.	遺　跡　名	所　　在　　地	種　別	時　　期
1	黒森山麓竪穴群	鹿角市十和田大湯字上内野 100-1	集落跡	縄文時代中期末葉
2	下内野Ⅱ	〃　大湯字下内野 43	集落跡	縄文時代中期末葉
3	下内野Ⅲ	〃　大湯字室ノ沢口、下内野	配石遺構	縄文時代後期
4	小清水	〃　大湯字小清水 7	配石遺構	縄文時代後期
5	上屋布Ⅱ	〃　大湯字上屋布 25、26 他	遺物包含地	縄文時代後期
6	堤尻Ⅰ・Ⅱ	〃　大湯字堤尻 3-1	遺物包含地	縄文時代後期
7	和町Ⅰ	〃　大湯字和町 117-2 他	遺物包含地	縄文時代後期
8	根　市	〃　大湯字根市 20-25	遺物包含地	縄文時代後期
9	松　舟	〃　草木字松舟 19. 20 他	遺物包含地	縄文時代後期
10	崩　原	〃　草木字崩原 24-1	遺物包含地	縄文時代後期
11	保田Ⅱ	〃　草木字保田 49-2	遺物包含地	縄文時代後期
12	高間館	鹿角市花輪字菩提野 96.97 他	遺物包含地	縄文時代後期
13	草木Ａ	鹿角市十和田草木字小坂 12 他	遺物包含地	縄文時代後期～晩期
14	丸館Ⅳ	〃　草木字丸館 44-2 他	遺物包含地	縄文時代後期
15	土　木	鹿角市花輪字土木 7-2 他	遺物包含地	縄文時代中期～後期
16	申ヶ野Ⅴ	鹿角市十和田錦木字申ヶ野 2-1	遺物包含地	縄文時代後期
17	平元館	鹿角市花輪字源田平 6-1	遺物包含地	縄文時代後期、平安時代
18	高屋館跡	〃　字館ノ沢、字大田谷地	環状列石	縄文時代後期、中世
19	板橋Ⅱ	鹿角市十和田末広字板橋 32 他	遺物包含地	縄文時代後期
20	上ノ野Ⅳ	〃　末広字上野 70-1	遺物包含地	縄文時代中期～後期
21	吹越Ⅱ	〃　山根字吹越 12	遺物包含地	縄文時代後期
22	下砂沢	〃　山根字上ノ平 1-6	配石遺構	縄文時代前期～後期
23	竹　林	〃　岡田字竹林 11-1	遺物包含地	縄文時代後期
24	湯坂Ⅱ	〃　毛馬内字湯坂 37-1	遺物包含地	縄文時代後期
25	寺ノ上Ⅲ	〃　毛馬内字寺ノ上 30	遺物包含地	縄文時代後期
26	寺ノ上Ⅰ	〃　毛馬内字寺ノ上 6	遺物包含地	縄文時代後期
27	柏崎館跡	〃　毛馬内字柏崎、字二ノ丸	遺物包含地	縄文時代後期～晩期、中世

４．遺跡の層序

ここでは、表土から申ヶ野軽石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記載する。それ以下の地層については、先に述べたとおりである。

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、暗褐色土である。そのほとんどが耕作土で植物根の混入がみられる。

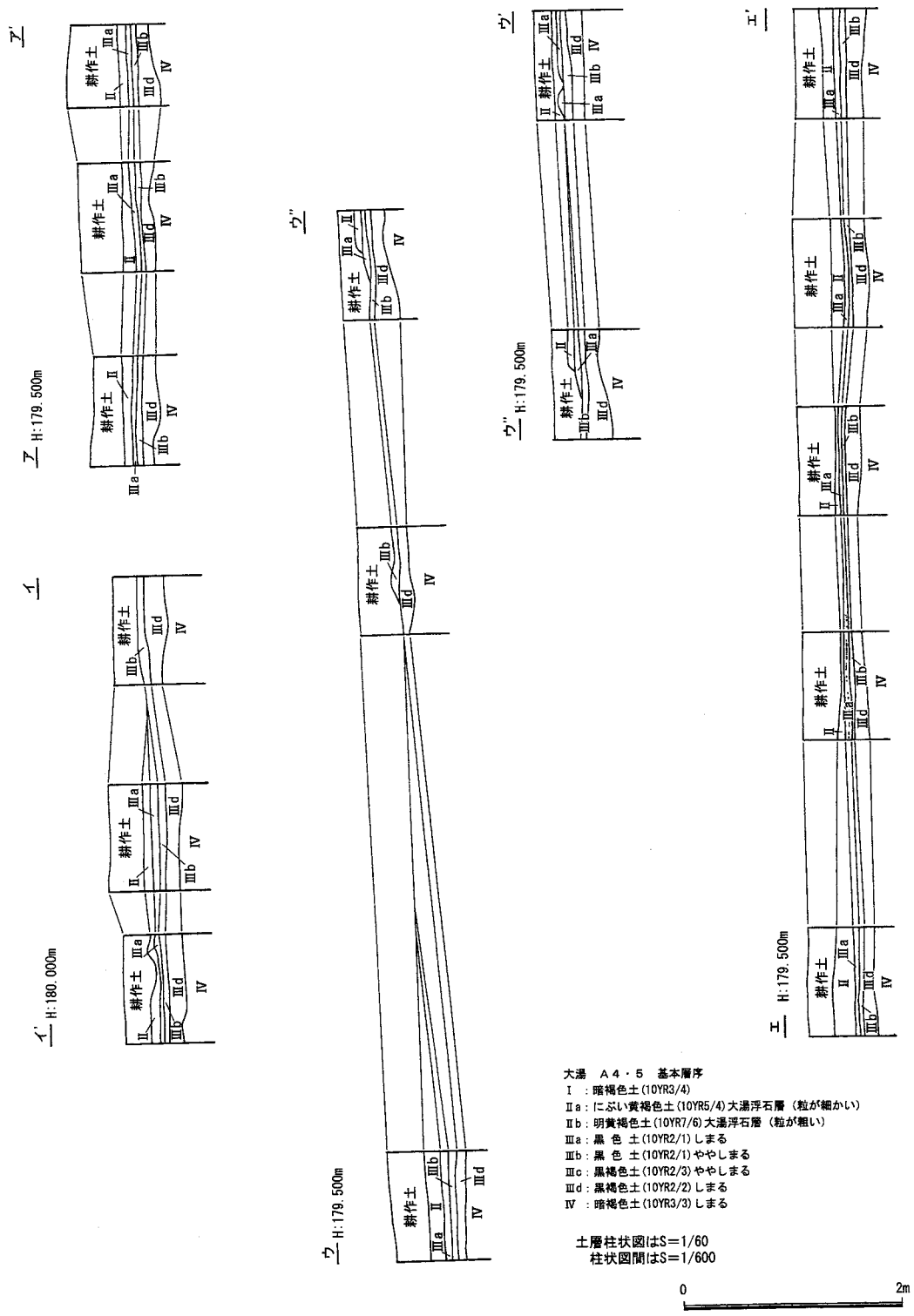
第Ⅱ層はにぶい黄橙色や明黄褐色の浮石層で、大湯浮石層と呼ばれている。青森県や岩手県北部に堆積している十和田ａ降下火山灰と一連のものであり、約1,000年前の十和田湖の噴火によって噴き上げられた降下軽石と考えられている。本層は、浮石粒の大きさ、色調等から２層（Ⅱａ、Ⅱｂ）に分層できる。

第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土（Ⅳ層）までの黒色または黒褐色の土層である。色調や堅さなどから４層（Ⅲａ～Ⅲｄ）に細分される。

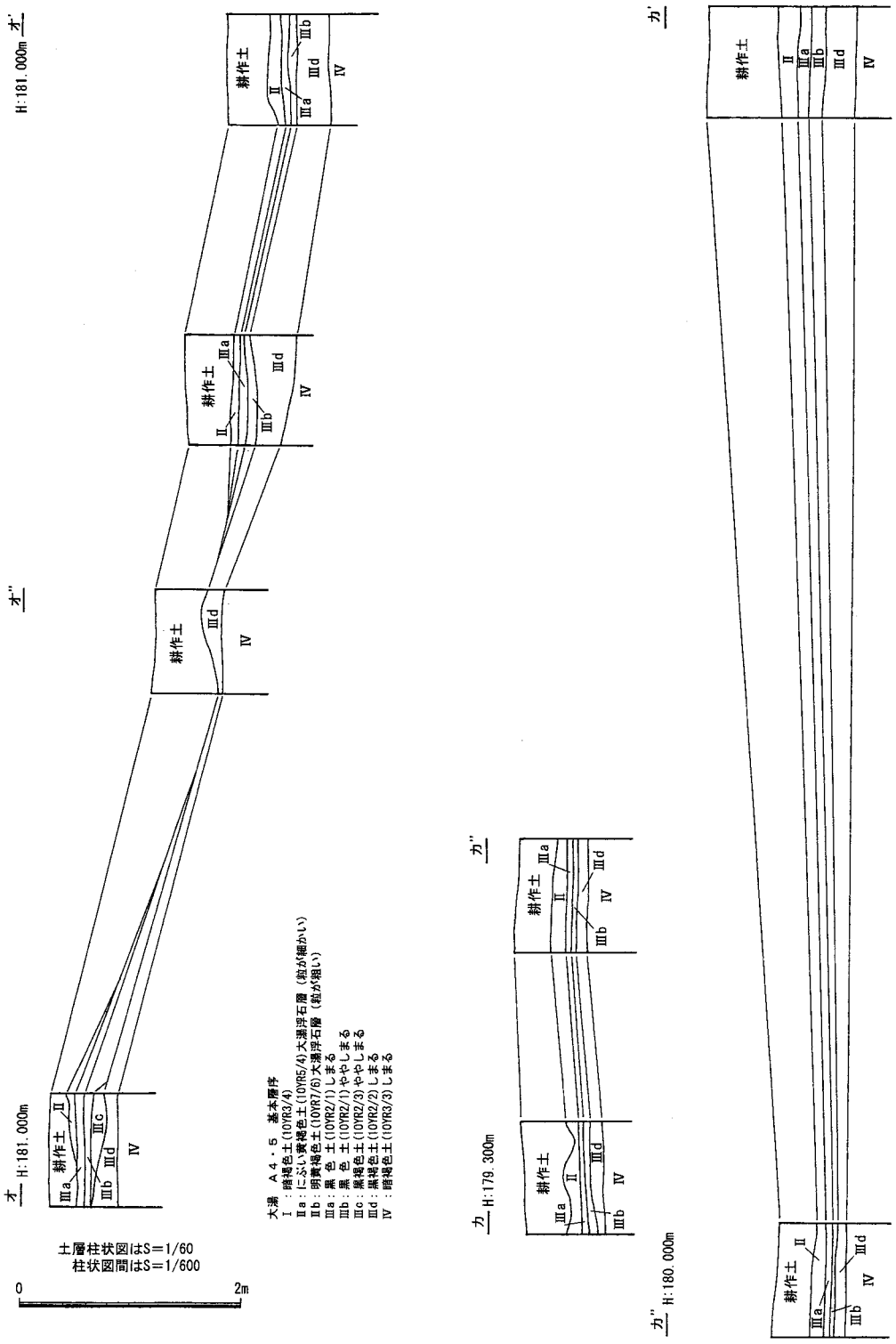
第Ⅳ層は地山直上（下位火山灰）の層で、暗褐色で、若干粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は先に述べたとおり、申ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色の火山灰層である。本層は上位に堆積する大湯浮石層に対比し下位火山灰、あるいは関東ロームに相当するところからロームと呼ばれているものである。本報告書では、本層をⅤ層以外に下位火山灰や地山と表現している。

（三浦貴子）



第４図　調査区基本層序(1)



第５図　調査区基本層序(2)

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査要項

1．遺　跡　名　　特別史跡大湯環状列石（遺跡番号：123）

2．調　査　地　　鹿角市十和田大湯字一本木後ロ　ほか

3．発掘調査面積　　Ａ４区　1,492.89㎡

Ａ５区　　53.9㎡

計　　1,546.79㎡

4．調査期間　　発掘調査　　平成17年8月10日～平成17年11月14日

整理・報告書作成　　平成17年11月15日～平成18年3月31日

5．調査主体者　　鹿角市教育委員会

6．調査担当者　　鹿角市教育委員会　生涯学習課

主　　事　　三浦貴子

7．調査参加者　　調査指導　　榮　　一郎

（秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室副主幹）

調　査　員　　鎌田健一（秋田県立横手高等学校　教頭）

大里勝蔵

（元鹿角市出土文化財管理センター館長）

調査補助員　　松田隆史、柳沢和仁

発掘調査作業員

石川三郎、大森勝次、加賀ユキ子、黒沢珠子、黒沢文子、黒沢陸雄、佐藤一祐、関　イサ、高橋秀明、田中美千栄、兎沢寛貝子、兎沢サツ子、兎沢優子、成田則子、成田由紀子、三浦茂雄、湯瀬トキ、湯瀬晴子、柳沢大樹、柳沢ヤス、柳沢千晶、柳舘愛子

整理作業員

黒沢文子、田中栄子、福島美紀子、三上晴香

8．事　務　局　　鹿角市教育委員会　生涯学習課

課　長　　相馬田富

班　長　　児玉和子

主　幹　　秋元信夫

主　査　　藤井安正（本務　大湯ストーンサークル館主査）

主　事　　上　田　　学

主　事　　田　村　信　仁（本務　大湯ストーンサークル館主事）

主　事　　三　浦　貴　子

9．協 力 機 関　　文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター、大湯ストーンサークル館

2．調査の目的

大湯環状列石周辺遺跡の発掘調査は、昭和48～51年の分布調査によりその存在が知られていた各地区の様々な遺構の形態、性格、構築時期及び環状列石との関連の解明を主目的に、昭和59年から継続されている。昭和59年から61年は一本木後ロ配石遺構群、昭和62年から63年は万座環状列石の北西～西側隣接地、平成元年から2年には同列石の北側台地縁辺部、平成3年には万座配石遺構群の調査を行い、同年で上記の目的をほぼ達成している。

また、平成2年3月に周辺遺跡のほとんどが特別史跡に追加指定され、3年度から追加指定地の公有化を開始、4年3月には「特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想」をまとめるに至った。このようなことから、平成4年からは史跡の環境整備を進めるための直接的な資料の収集を目的に発掘調査が行われることとなった。

環境整備の年次計画を考慮し、発掘調査は第Ⅰ期環境整備計画地である万座環状列石、野中堂環状列石周辺の順に行うこととし、平成4年から10年に万座環状列石隣接地及び同列石北側台地縁辺部、11年から13年にかけ野中堂環状列石隣接地の発掘調査を実施している。

なお、これらの調査結果を基に、第Ⅰ期環境整備を平成10～14年度に行っている。

平成14年からは第Ⅱ期環境整備計画地である史跡西部に調査地を移し、16年で同地区の調査を終了している。

このため、本年度からは第Ⅲ期環境整備計画地である一本木後ロ地区に調査地を移すこととした。本地区では先に述べたとおり、昭和59～61年の調査（Ａ１～Ａ３区）で一本木後ロ配石遺構群が確認され、同配石遺構群が南西側と北東側に延びると考えられていた。このため、本年度は同配石遺構群の南西側への広がりを確認するため、Ａ３区の南西側隣接地を調査区のひとつとした。同地区は地形復元も計画している地区であることから、配石遺構群予想される地点の他、小沢部にも十字にトレンチを設定した。

また、竪穴住居跡等の遺構の有無を確認するため野中堂環状列石の台地縁辺部に３列のトレンチ、土器捨て場、水場遺構等の確認のため斜面に１箇所の坪掘り箇所を設定した。

（秋元信夫）

３．調査の方法

グリッドについては、第１次調査以来のグリッドを延長した。すなわち、Ｎ－49°－Ｗを基準線とした５ｍ四方のグリッドとし、グリッドの名称は、アルファベットと算用数字を組み合わせ、西側の杭をもってグリッド名とした。

発掘は、遺跡の保存を第一に考え、トレンチ方式を基本とし、必要に応じて拡張することとした。

表土については重機で除去、Ⅱ層以下については人力による分層発掘とし、極力上面での遺構確認に努めた。

確認された遺構については、発見順に番号を付した。ただし、配石遺構については、第１号から３号配石遺構までは発見順に付したが、第10号配石遺構については基本的に分布位置すなわち北東側から南西側の順になるような番号とした。なお、遺構の精査については、後に追調査ができるように必要最小限にとどめた。

遺構の実測図の作成については、グリッド杭を利用し、簡易遣り方測量を行い、縮尺１／20、１／10で図化した。遺物については、１点ずつ図化し、レベル測量後に取り上げた。

写真撮影については、小型一眼レフカメラ２台とデジタルカメラを使用し、調査の過程や遺物出土状況などを記録した。

４．調査の経過

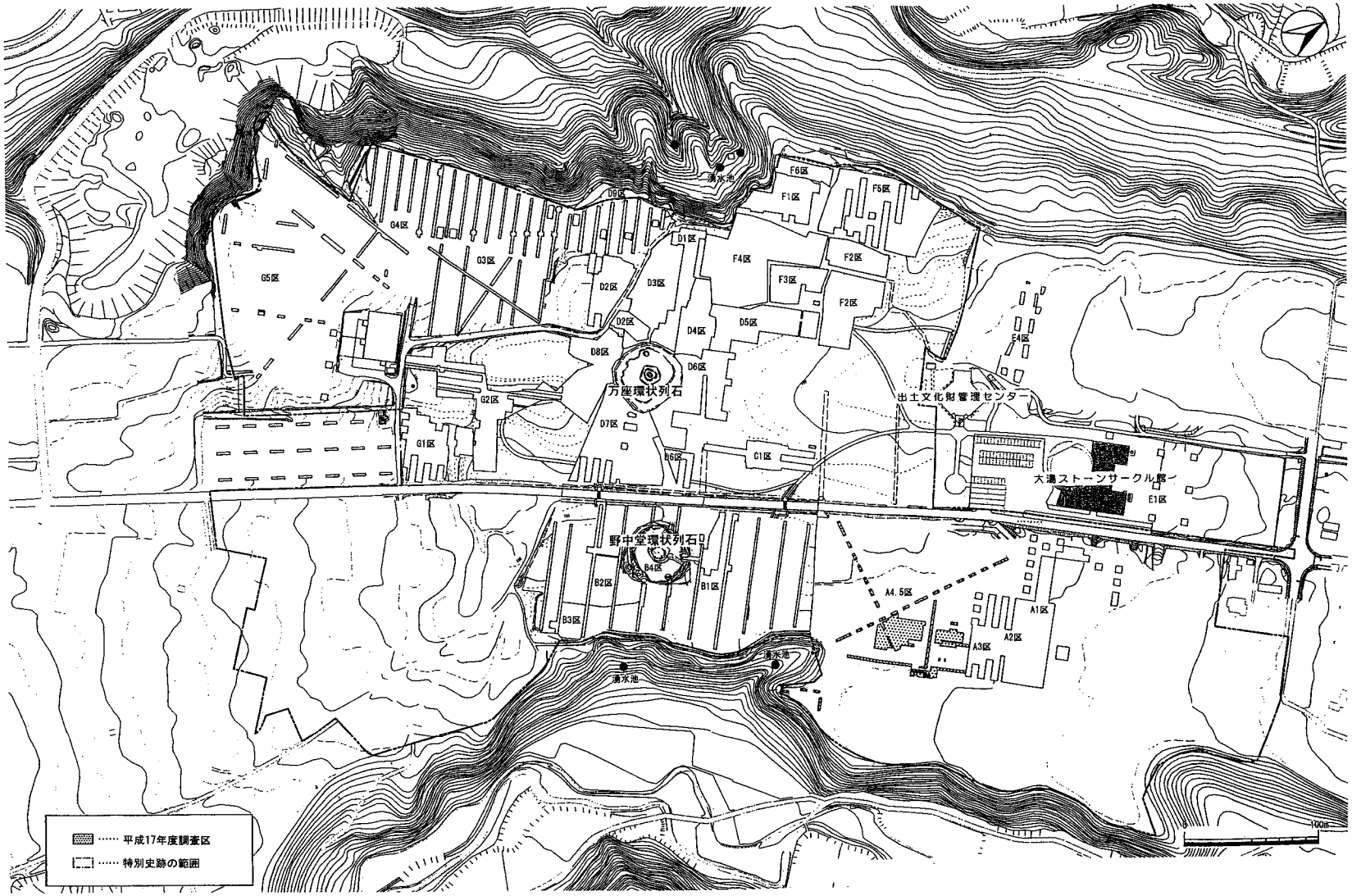
特別史跡大湯環状列石の第22次発掘調査は、平成17年8月10日より開始し、1,546.79㎡の調査を終了したのは11月14日である。以下、調査日誌に基づき、調査経過の概要を述べる。

8月10日、作業員への作業説明、連絡事項伝達の後、トレンチの設定を行い、重機により、表土除去の終了した第１トレンチからⅡ層以下を分層的に掘り下げ、各層上面での遺構確認を行った。盆休み明けの18日には同トレンチほぼ中央より配石遺構の一部（ＳＸ（S）01）を発見、全容を表すため、トレンチを南東側に1.5m拡幅する。

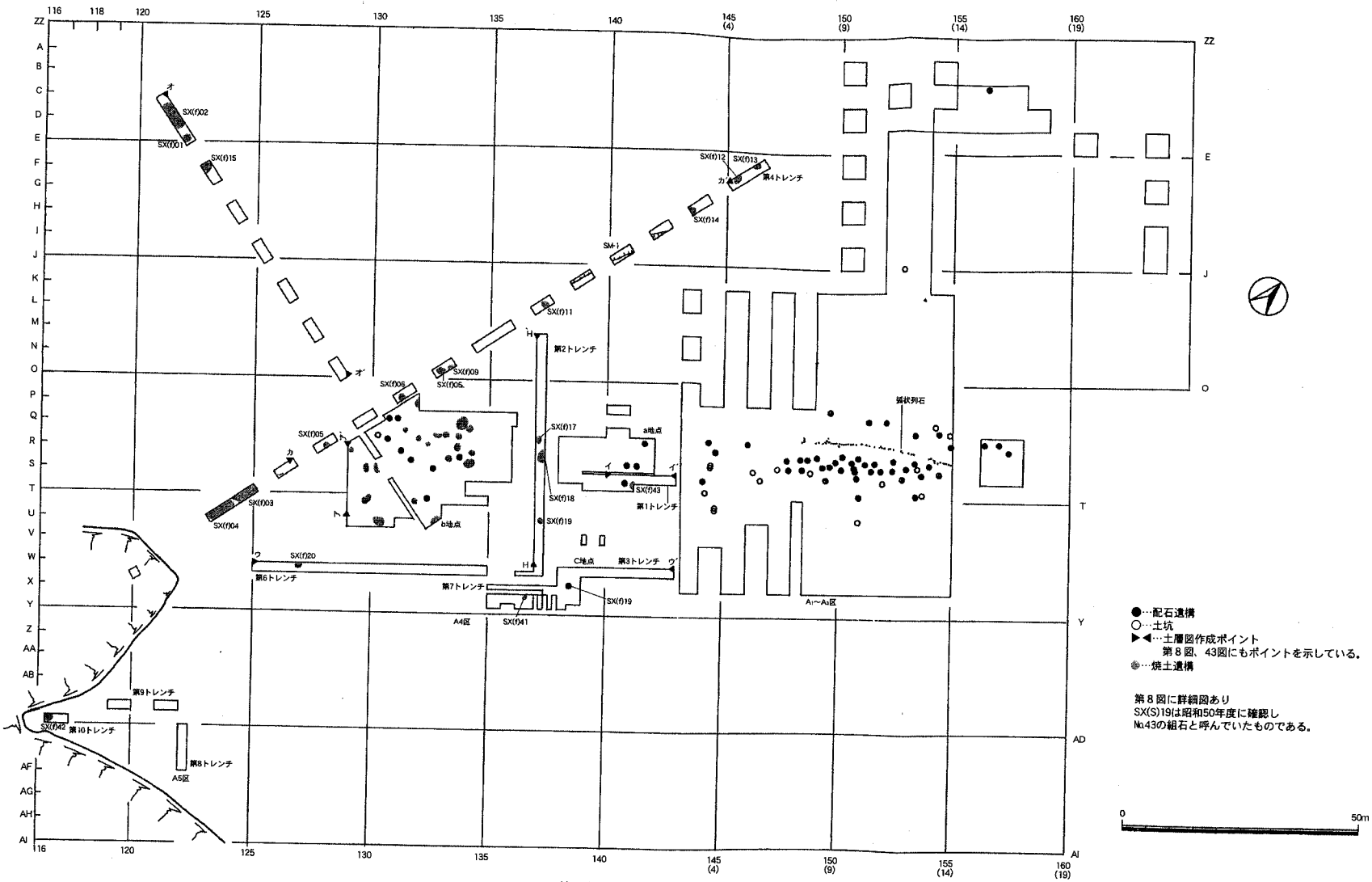
同配石の発見により、従来から発見されていた一本後ロ配石遺構群が南西側に延びることが明らかとなったため、19日には今年度の発掘区（Ａ４区）と以前の発掘区（Ａ３区）との位置関係を明確にする目的で、同調査区で発見されていた第41号、43号配石遺構の再表出をした。また、第２、３トレンチの調査にも着手した。

8月23日には第１トレンチ周辺をボーリング調査し、配石遺構の有無を確認した。その結果、第１トレンチの北西10m付近で数個の石の感触があったため、第１トレンチを北西方向にも拡張することとし、この周辺をａ地点と呼ぶこととした。

8月24日からは、ａ地点の調査と併行し、小沢部に十字に設定した第４、５トレンチの調査


湧水池
F6区
F1区
F5区
D9区
G4区
D1区
F4区
F2区
G3区
G5区
D2区
D3区
F3区
F2区
D2区
D4区
D5区
E4区
D8区
D6区
方座環状列石
出土文化財管理センター
G2区
D7区
G1区
B6区
C1区
大湯ストーンサークル館
E1区
野中堂環状列石
B4区
B2区
B1区
A4.5区
A1区
B3区
A3区
A2区
湧水池
湧水池
100m
……平成17年度調査区
……特別史跡の範囲

第6図　調査区位置図



第7図　トレンチ配置図・遺構分布図

も行った。両トレンチからは次々と焼土遺構が発見された。また29日には第５トレンチ東部のＲ－131グリッド、Ｔ－132グリッドよりそれぞれ１基の配石遺構（ＳＸ（S）14、03）が確認された。このため第５トレンチ東部を北東側及び南西側に拡張することとし、この周辺をｂ地点とした。

9月15日には、昭和50年の調査で坪掘り地点№43で確認されている配石遺構を再確認するため、同調査報告書調査実施図から予想される地点に第７トレンチを設定し、調査を開始する。

拡張していたｂ地点からは、9月19日までに新たに２基の配石遺構（ＳＸ（S）11、13）が確認されている。

草刈りの終了していた台地縁辺部については、20日に３本のトレンチ（第８～10トレンチ）を設定し、第８トレンチより調査を開始した。

9月26日には第４トレンチ北部で確認された道路状遺構の実測及び写真撮影を行う。また、28日には第６トレンチで確認された焼土遺構の実測、写真撮影を行い、同トレンチの調査を終了した。

9月30日には拡張していたａ地点から新たに配石遺構１基（ＳＸ（S）10)、10月18日にはｂ地点西部から配石遺構２基（ＳＸ（S）15、16）さらに10月21日にはａ地点から配石遺構１基（ＳＸ（S）18）が確認された。

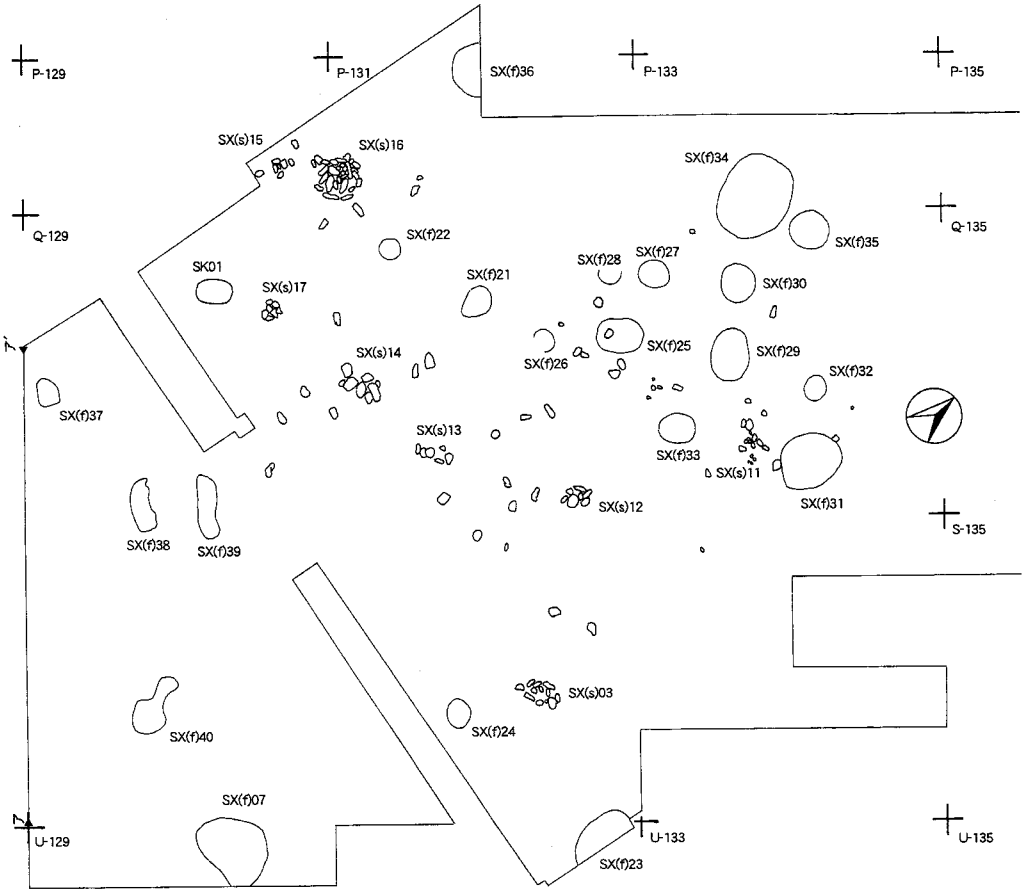
10月24日、湧水地上の斜面、坪掘り箇所の調査を行う。なお、ｂ地区においては新たな配石遺構１基（ＳＸ（S）17）が確認される。

昭和50年の坪掘地点が当初予想したトレンチで確認されず、その南東、北東に調査トレンチを延ばした結果、10月26日にようやく当初設定した第７トレンチの北東５ｍ程の地点で確認された。なお、本日で予定範囲の粗堀と遺構確認を終了した。

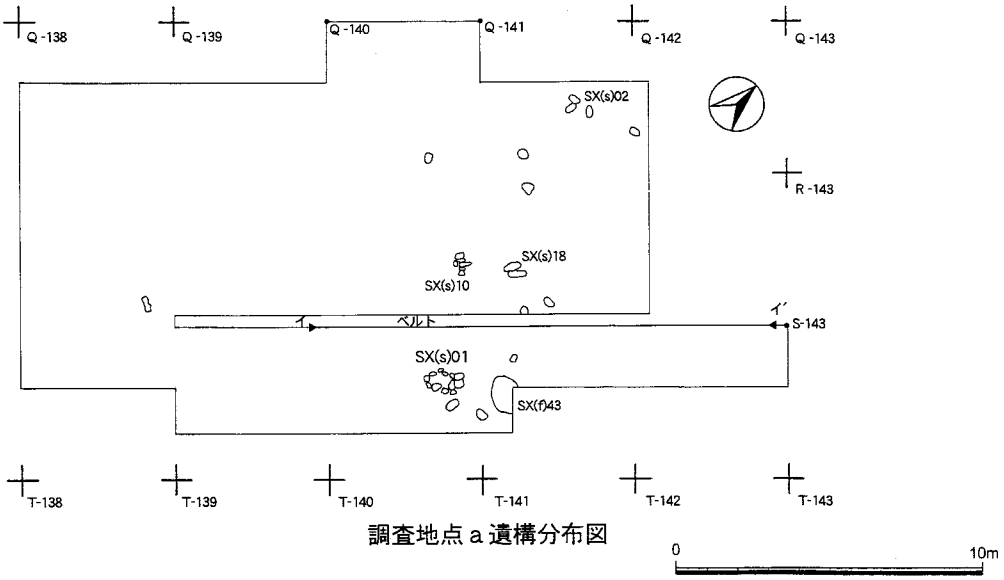
10月27日から31日には配石遺構の平面図の作成、同日から11月2日には第１号配石遺構下土坑の調査、11月4日、7日に遺跡の基本層序図を作成、11月14日に発掘区全体写真を撮影し、現場での全ての調査を終了した。

なお、10月13日、14日には特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会を開催し、発掘調査ならびに環境整備について指導と助言をいただいた。また、11月13日には現地説明会を開催、50名の見学者があった。なお、18年1月22日には、大湯ストーンサークル館講座「縄文に学ぶ」において本年度の調査成果を発表した。

（三浦貴子）



調査地点ｂ遺構分布図



調査地点ａ遺構分布図

第８図　遺構の分布詳細図

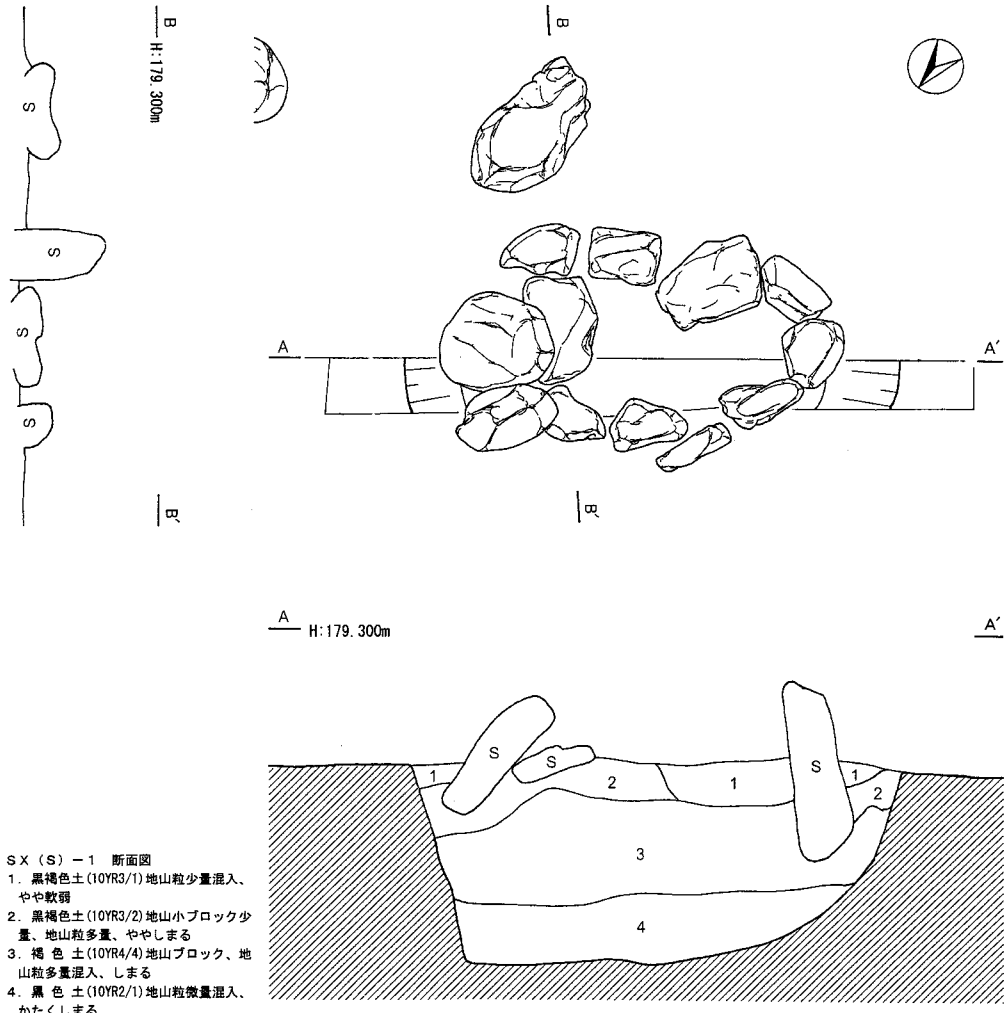
第Ⅲ章　A4区検出遺構と出土遺物

1．縄文時代

A4区において、確認された縄文時代の遺構は配石遺構13基、土坑１基、焼土遺構40基である。

(1)　配石遺構（第９図～第16図）

A4区において、調査区中央部ａ地点・ｂ地点を中心に13基の配石遺構が検出された。



ＳＸ（Ｓ）－１　断面図
1．黒褐色土(10YR3/1)地山粒少量混入、やや軟弱
2．黒褐色土(10YR3/2)地山小ブロック少量、地山粒多量、ややしまる
3．褐色土(10YR4/4)地山ブロック、地山粒多量混入、しまる
4．黒色土(10YR2/1)地山粒微量混入、かたくしまる

第１号配石遺構

0　1m

第９図　配石遺構実測図(1)

第１号配石遺構（第９図）

調査区東側、ａ地点のＳ－140グリッドに位置する。Ⅱ層下位において複数の石を確認し、Ⅲｄ層面において配石全体が検出された。南東側や北東側の一部の立石が耕作等によって斜めになっている。配石は、石を立てて楕円形を作り、その内側に扁平な石を並べている。配石部の規模は長軸132cm、短軸80cmを測る。配石を構成する石には27cm～59cmの大きさのものを使用している。配石の長軸方向はＮ－52°－Ｗである。形態から、本遺構はＩａ類に分類されると考えられる。

また、配石部を崩さないように幅約20cmのトレンチによる下部土坑の精査を行った結果、長軸153cm、深さ65cmの下部土坑を確認した。小トレンチによる一部精査のため短軸の規模は不明だが、土坑の平面形は楕円形と考えられる。底面は鍋底状とみられ、堆積土には地山ブロックを含む黒褐色土や黒色土がみられ、人為堆積である。

配石部分ならびに下部土坑から遺物の出土はみられなかったが、周辺の出土遺物や層位から構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第２号配石遺構（第10図）

調査区東側、ａ地点のＱ－141～142グリッドに位置する。Ⅰ層下位で２個の石を確認し、Ⅲｄ層までに５個の石が確認された。このうち、南西側の２個の石は耕作などによって動かされている。東側の石は動かされることなく残っていることから、本来の配石構築位置は東側である可能性が高く、南西側の石は東側から動かされたものと考えられる。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物や層位から縄文時代後期と考えられる。

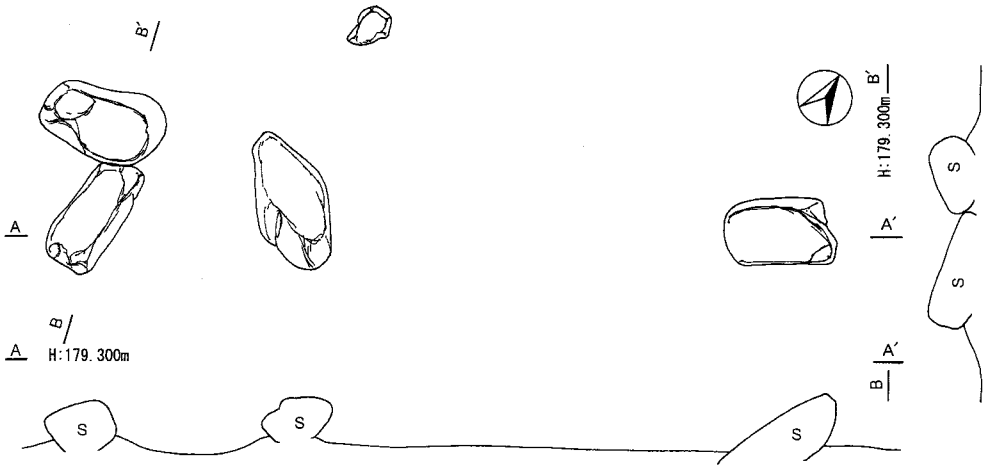
第３号配石遺構（第10図）

調査区中央部、ｂ地点のＴ－132グリッドに位置する。Ⅱ層除去時点で立石を確認し、Ⅲｄ層面において配石全体が検出された。配石部は、西側に３個の石を立て、東側、南東側には石を立て並べて楕円形の配石を構成している。また、内側には扁平な石を並べている。このような形態から、本遺構はＩａ類に分類されると考えられる。配石の規模は、長軸135cm、短軸83cmを測る。長軸方向はＮ－71°－Ｅである。

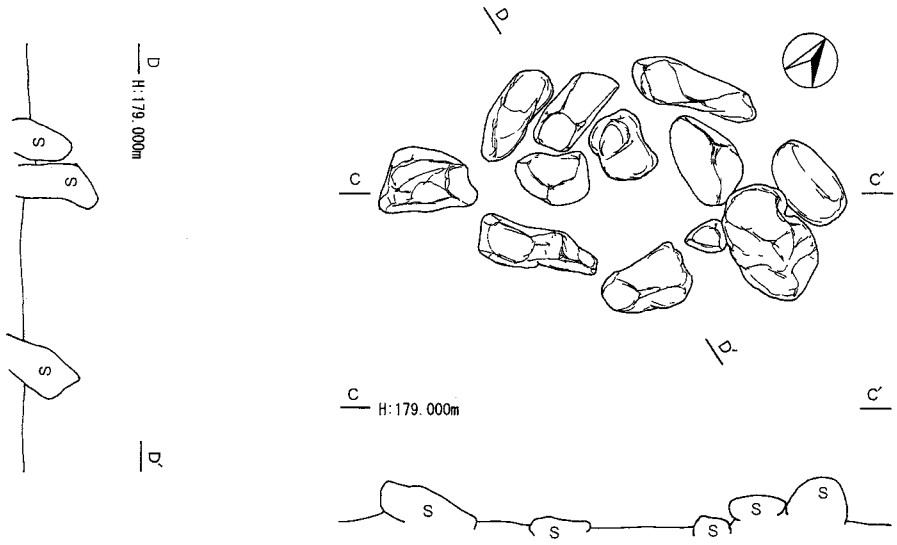
本遺構から遺物は出土していないが、層位より縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

第10号配石遺構（第11図）

調査区東側、ａ地点のＲ－140グリッドに位置する。Ⅱ層下位で立石の一部を確認し、Ⅲｄ層で配石全体が検出された。配石部は、南側、南東側、北西側に１個ずつ石を立て、その内側に細長い３個の石を立て並べている。規模は長軸73cm、短軸59cmを測る。外側に立てた石には30cm大のものが使用され、内側に立て並べられた石は20cm～41cmで、細長いものが使われている。配石の長軸方向はＮ－48°－Ｗである。形態から、本遺構はＩｂ類に分類される。



第２号配石遺構



第３号配石遺構

0 1m

第10図　配石遺構実測図(2)

本遺構から出土した遺物はなく、構築時期は明確にできないが、周辺の出土遺物や層位より縄文時代後期と考えられる。

第11号配石遺構（第11図）

調査区中央部ｂ地点のＲ－133グリッドに位置する。Ⅱ層除去後に配石の一部を確認し、Ⅲｄ層において配石全体が検出された。本遺構は配石の一部が耕作等の撹乱により動かされており、配石の構成を明確にすることができなかったが、東側に下部土坑とみられる楕円形のプランをみることができ、そのまわりに扁平な石を立て並べている状態を確認することができた。このことから、配石の形態はⅡａ類の可能性が考えられる。配石を構成する石には12cm～34cmのものが使用されていた。

本遺構から出土した遺物はないが、層位より縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

第12号配石遺構（第12図）

調査区中央部ｂ地点のＲ－132グリッドに位置する。Ⅱ層中位において立石の一部を確認し、Ⅲｄ層面において配石全体が検出された。配石部は、細長い石が楕円形に立てられ、それぞれ斜めに交差しているが、これは立石が倒れたことによるものと考えられ、本来の構成は立石が楕円形に配置され、内側に扁平な石を置いたものと考えられる。このことから、配石の形態はⅠａ類に分類されると考えられる。配石の規模は長軸105cm、短軸82cmを測る。配石の長軸方向はＮ－13°－Ｅである。

本遺構からは遺物は出土していないが、層位より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

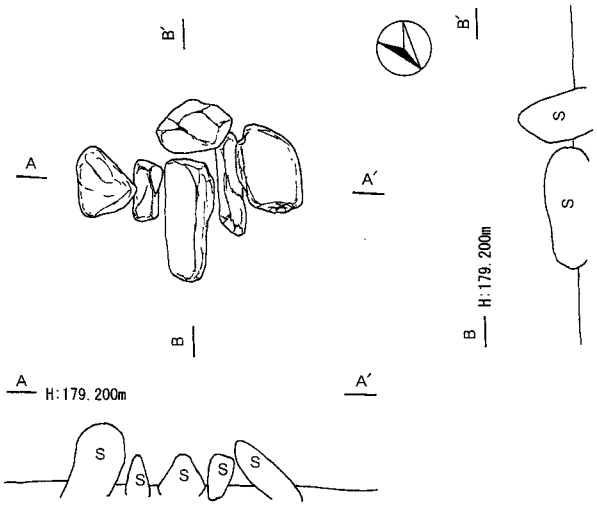
第13号配石遺構（第12図）

調査区中央部ｂ地点のＲ－131グリッドに位置する。Ⅱ層上面において立石の一部を確認し、Ⅲｄ層下位において配石全体が検出された。配石部は、中央部が一部撹乱を受けているものの、大きく動かされてはいない。立石が楕円形を形作り、内側には扁平な石を置いている状態が確認できることから本遺構の形態はⅠａ類に分類されると考えられる。配石の規模は、長軸120cm、短軸57cmを測る。配石の長軸方向はＮ－91°－Ｅである。

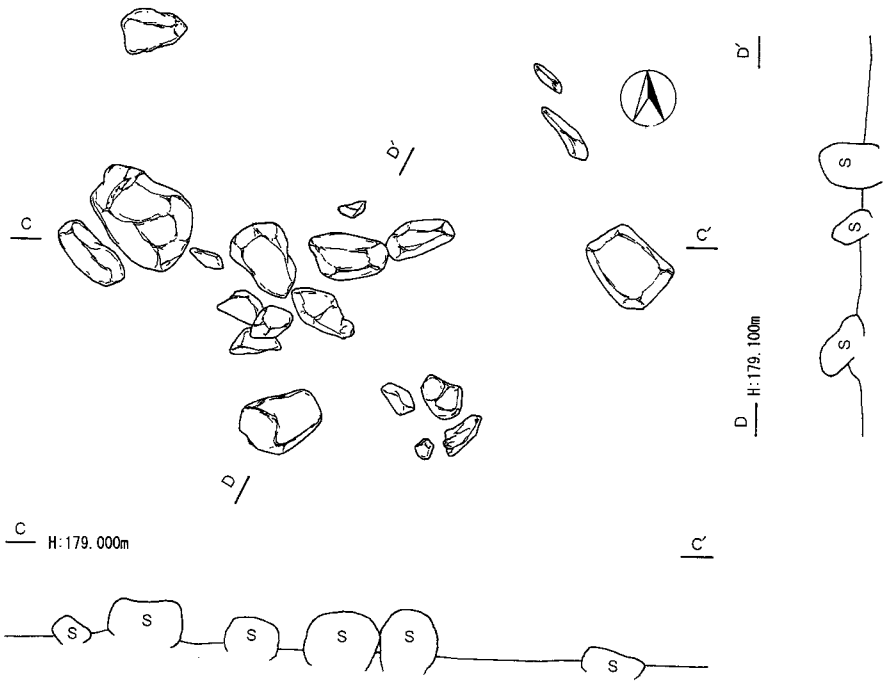
本遺構から遺物は出土していないが、周辺の出土遺物や層位より縄文時代後期以前に構築されたものと考えられる。

第14号配石遺構（第13図）

調査区中央部ｂ地点のＲ－131グリッドに位置する。Ⅱ層上面において立石の一部を確認し、Ⅲｄ層面において配石全体が検出された。配石部は、耕作により一部動かされており、立石が斜めになっている部分もみられるが、立石で楕円形を構成し、内側に扁平な石を並べていることからⅠａ類に分類されると考えられる。配石の規模は長軸140cm、短軸90cmを測る。配石は23cm～57cmの石で構成されている。配石の長軸方向はＮ－73°－Ｗである。



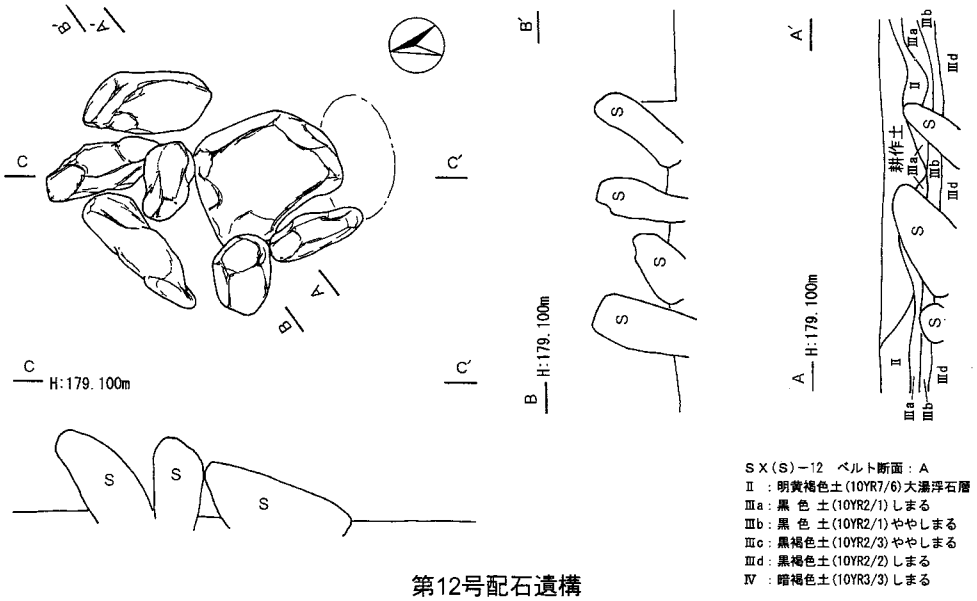
第10号配石遺構



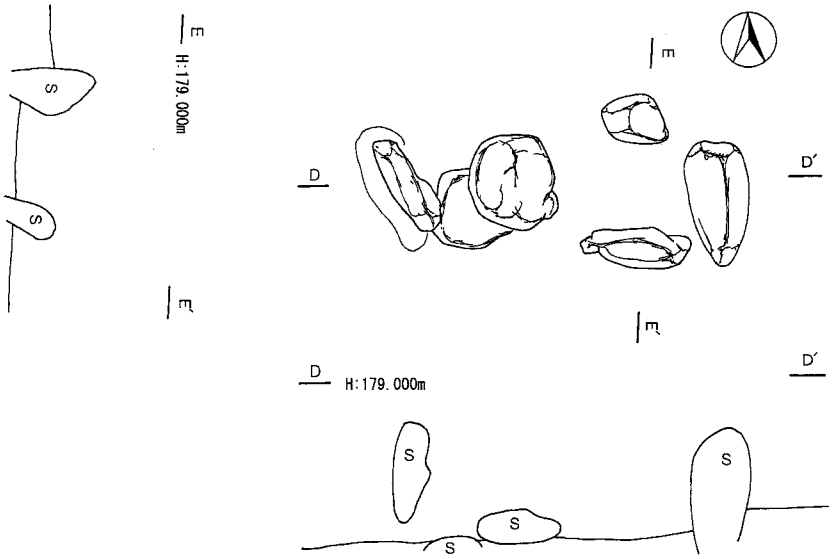
第11号配石遺構

0 1m

第11図　配石遺構実測図(3)



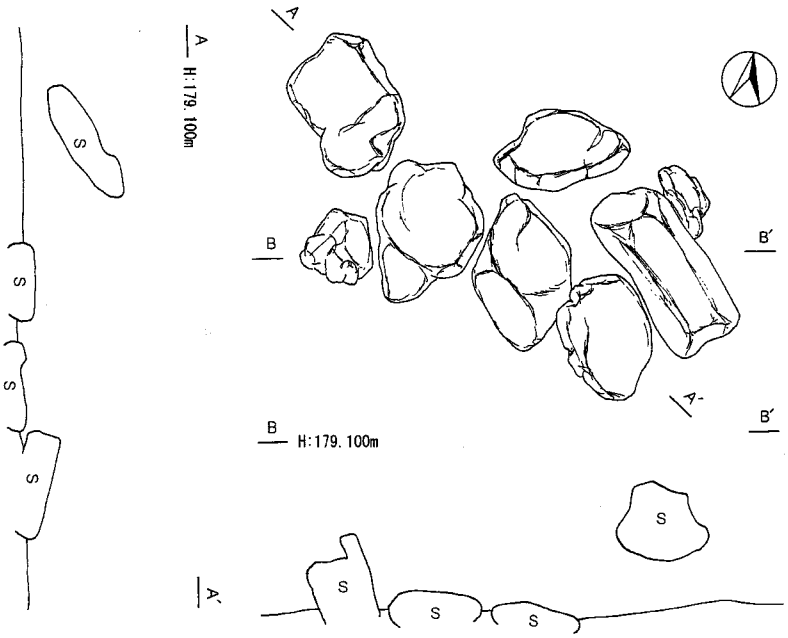
第12号配石遺構



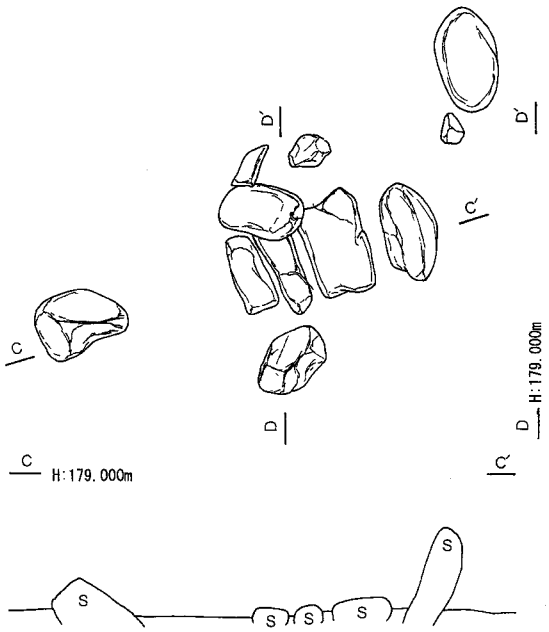
第13号配石遺構

0 1m

第12図　配石遺構実測図(4)



第14号配石遺構



第15号配石遺構

第13図　配石遺構実測図(5)

本遺構からは遺物は出土しないが、層位より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第15号配石遺構（第13図）

調査区中央部ｂ地点のＰ－130グリッドに位置する。Ⅱ層除去面において立石の一部を確認し、Ⅲｄ層面において配石全体が検出された。配石部は、北側、西側、南東側、南側に１個ずつ石を立て、内側に扁平な石を４個並べている。規模は長軸125cm、短軸65cmを測る。配石を構成している石には25cm～35cmのものが用いられている。形態から、本遺構はＩａ類に分類される。配石の長軸方向はＮ－18°－Ｅである。

本遺構から遺物は出土しないが、構築時期は層位より縄文時代後期と考えられる。

第16号配石遺構（第14図）

調査区中央部ｂ地点のＰ－131グリッドに位置する。Ⅱ層上面において石を1個確認し、Ⅲｄ層面において配石全体が検出された。配石部は円形で、縁辺部に細長い石を立て並べ、内側に小さな石や細長い石を並べている。縁辺部に立て並べられている石には81cm～114cmのものが使用され、内側に並べられている石には20cm大～80cm大のものが使われている。配石の規模は、165cm×150cmを測る。形態から、本遺構はＩｃ類に分類されると考えられる。

本遺構から遺物の出土はみられないが、周辺の出土遺物や層位により縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

第17号配石遺構（第15図）

調査区中央部ｂ地点のＱ－130グリッドに位置する。Ⅱ層除去時点において石の頭を確認し、Ⅲｄ層面において配石全体が検出された。配石部は細長い石を立てて楕円形に配置しており、内側に石を１個配置している。内側の石は置かれているものか立てられているものか確認することができなかった。配石を構成する石には40cm大のものが使用されている。配石の規模は長軸70cm、短軸60cmを測る。下部土坑は長軸88cm、短軸72cmを測る。形態から、本遺構はＩａ類かＩｂ類に分類される。配石の長軸方向はＮ－6°－Ｗである。

本遺構から遺物は出土していないが、周辺の出土遺物や層位により縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

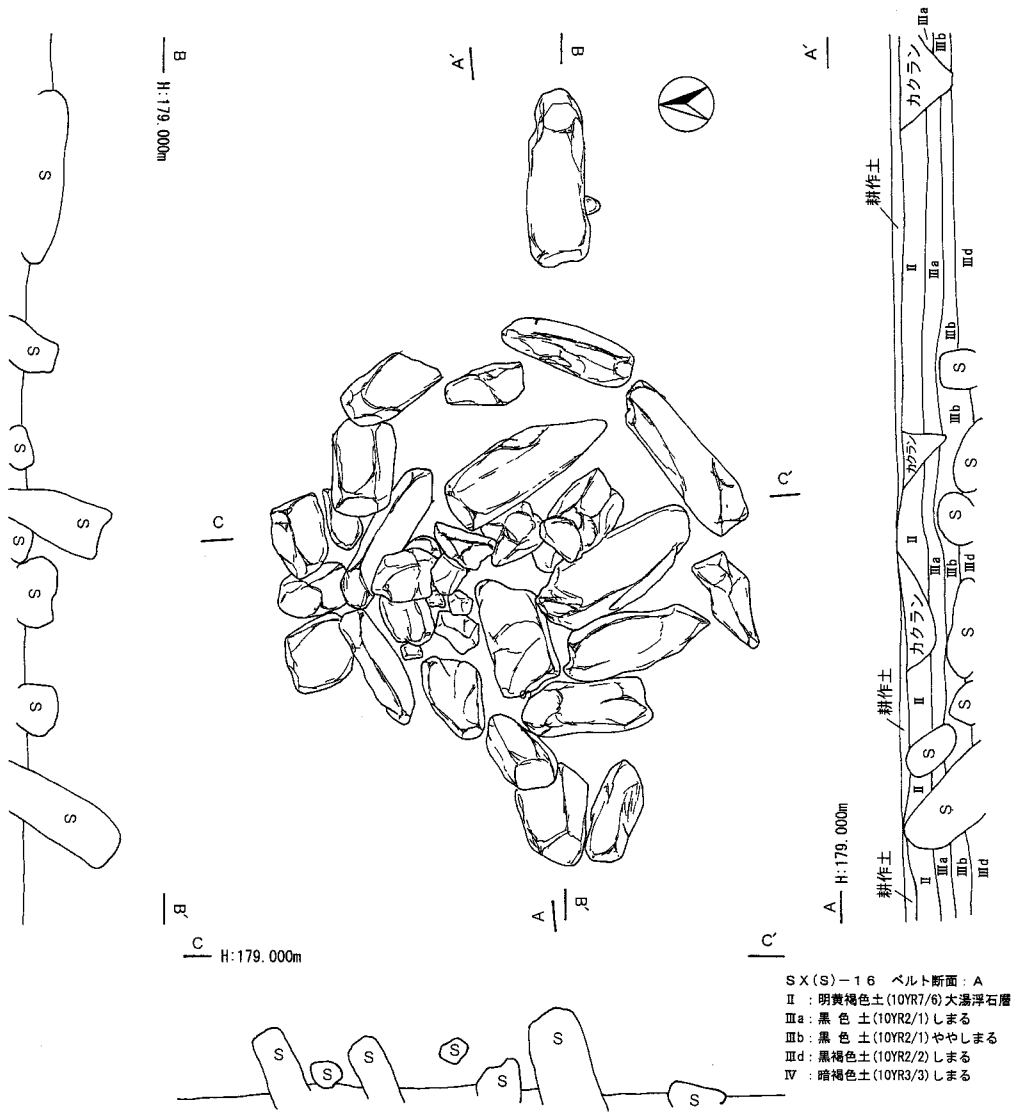
第18号配石遺構（第15図）

調査区東側、ａ地点のＲ－141グリッドに位置する。Ⅱ層除去時において３個の石を確認し、Ⅲｄ層面において全体を確認した。配石部は４個の石が点在するのみであるが、周辺には石の抜き取り痕と思われる楕円形の撹乱があることから、配石とした。検出された石の規模は41cm～61cmを測る。

本遺構から遺物は出土していないが、層位より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

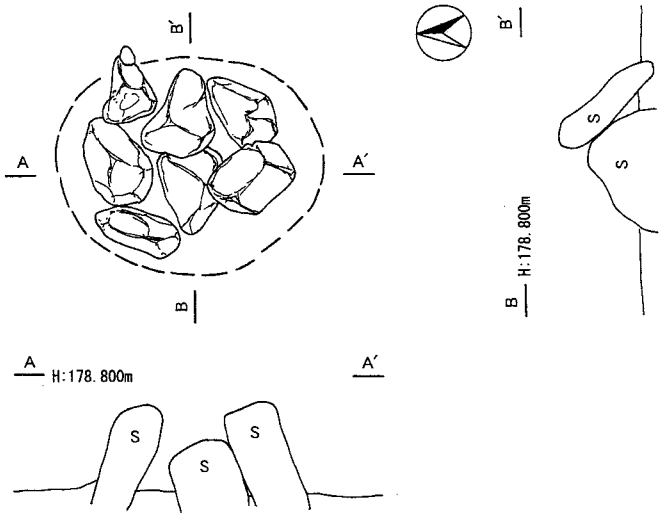
第19号配石遺構（第16図）

調査区南東側、ｃ地点のＷ－138グリッドに位置する。表土除去時において配石の一部を確認し、Ⅲｄ層において配石全体を確認した。位置、形態から昭和50年の試掘によって確認されたNo.43配石であると考えられる。配石の縁辺部に石を立て、内側に扁平な石を並べていることからＩａ類に分類されると考えられる。配石の規模は、長軸（130）cm、短軸（94）cmを測る。

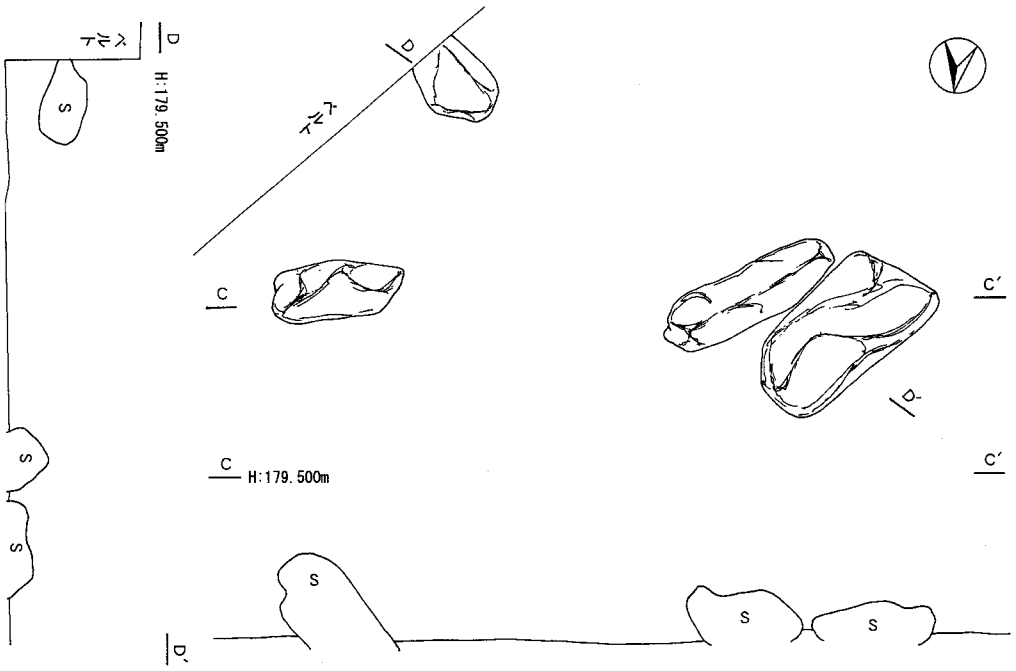


第16号配石遺構

第14図　配石遺構実測図(6)

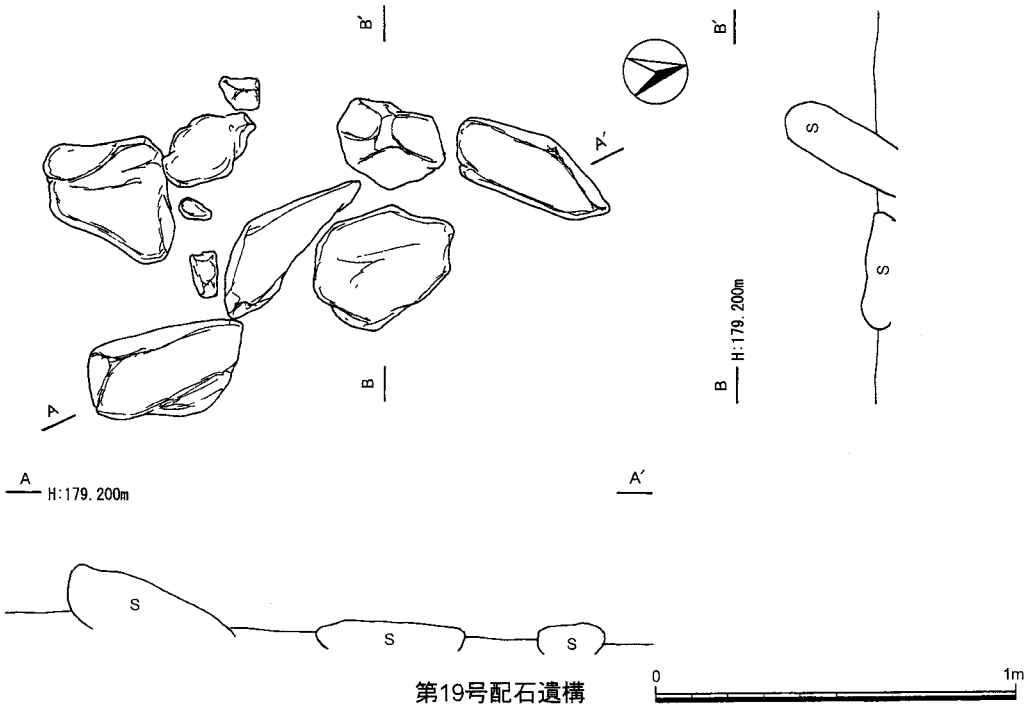


第17号配石遺構



第18号配石遺構

第15図　配石遺構実測図(7)



第19号配石遺構

第16図　配石遺構実測図(8)

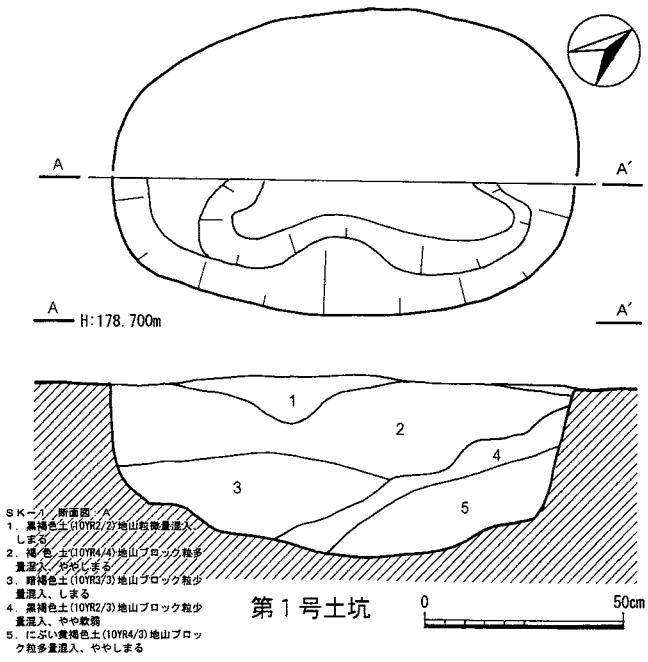
また、配石の長軸方向はN－14°－Wである。配石を構成する石の規模は28cm～52cmを測る。本遺構から遺物は出土していないが、層位により縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

(2) 土　　坑（第17図）

第１号土坑

調査区中央部ｂ地点のQ－130グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。構築面はⅢｄ層である。規模は長軸115cm×短軸76cm、深さ44cmを測る。平面形は楕円形で、長軸方向はN－39°－Eである。底面は鍋底状で、垂直に立ち上がる。堆積土は５ブロックに区分され、人為堆積である。遺構内より遺物は出土していない。

構築時期は構築面および周辺の出土遺物から縄文時代後期と考えられる。



第１号土坑

第17図　土坑実測図

⑶ 焼土遺構（第18図～第21図）

焼土遺構は本調査区では40基確認され、調査区南側にあたる第４トレンチ南側とｂ地点に多く検出された。

第１号焼土遺構（第18図）

調査区北西部Ｄ－121～122グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は（169）cm×107cmを測り、焼土は（158）cm×84cmを測る。遺物は出土しなかった。

第２号焼土遺構（第18図）

調査区北西部Ｃ～Ｄ－121グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は696cm×（200）cmを測り、一部には炭化材を含む。焼土は全体に点在し、最大163cm×98cmを測る。遺物は出土しなかった。

第３号焼土遺構（第18図）

調査区南部、第４トレンチの南端Ｔ－124～125グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は556cm×（200）cmを測り、焼土は南側に集中し、268cm×101cmを測る。遺物は出土しなかった。

第４号焼土遺構（第18図）

調査区南部、第４トレンチの南端Ｔ－123グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は613cm×（200）cmを測り、焼土は北側、南側に集中し、最大147cm×73cmを測る。遺物は出土しなかった。

第５号焼土遺構（第18図）

調査区南部、第４トレンチの南側Ｒ－128グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は135cm×（109）cmを測り、焼土は中央部に44cm×25cmを測る。遺物は出土しなかった。

第６号焼土遺構（第18図）

調査区中央部、第４トレンチの中央Ｏ－131グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は183cm×（131）cmを測り、焼土は中央部に35cm×37cmを測る。遺物は出土しなかった。

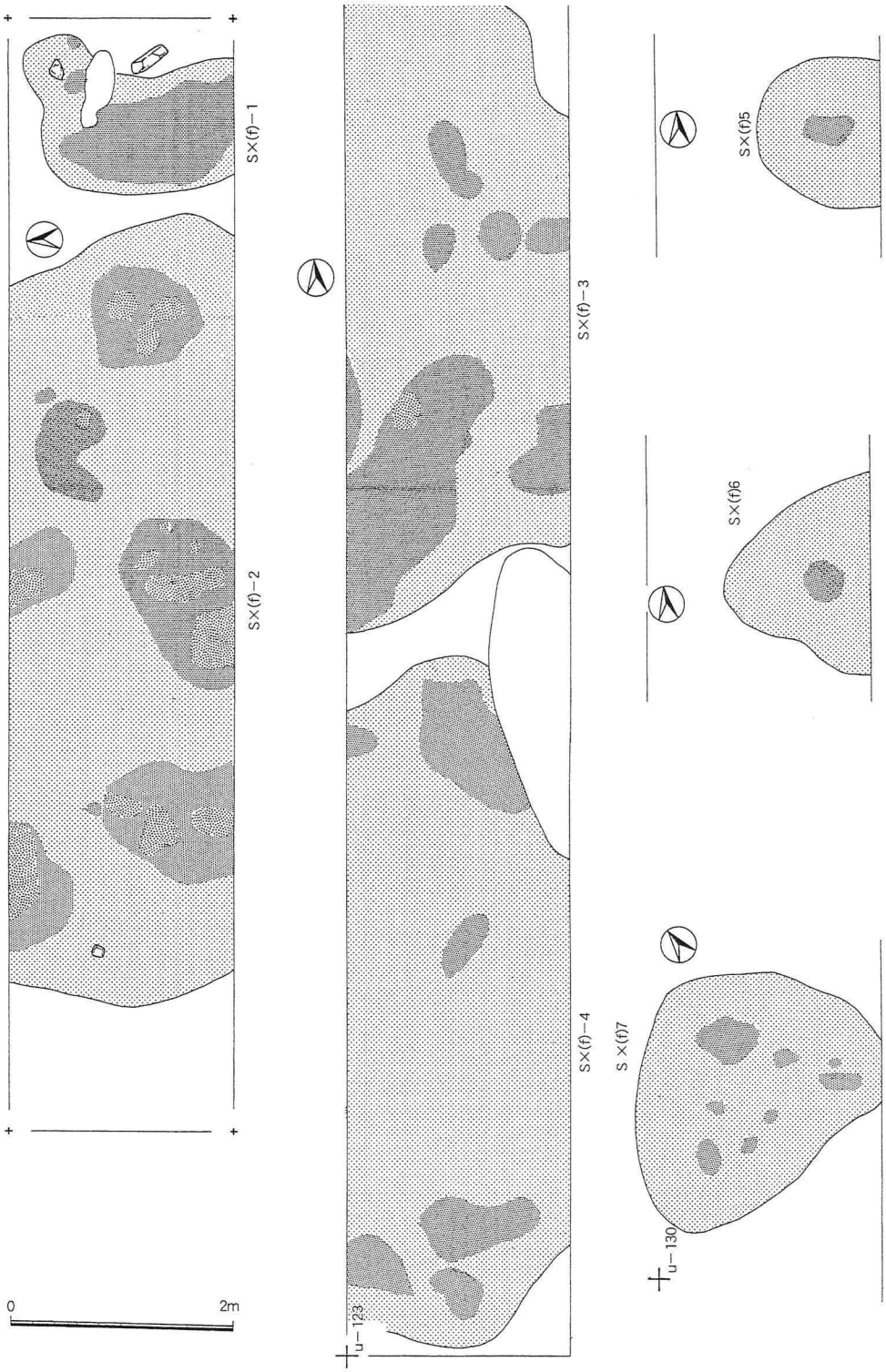
第７号焼土遺構（第18図）

調査区中央部Ｕ－130グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は225cm×218cmを測り、焼土は全体に点在し、最大59cm×43cmを測る。遺物は出土しなかった。

第８号焼土遺構　欠番

第９号焼土遺構（第19図）

調査区中央部、第４トレンチの中央Ｎ－123グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によると思われる細長い撹乱がいくつもみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は135cm×（78）cmを測り、焼土25cm×22cmを測る。遺物は出土しなかった。



第18図　焼土遺構実測図(1)

第10号焼土遺構（第19図）

調査区中央部、第４トレンチの中央Ｎ－122グリッドに位置し、Ⅲｂ層下位で確認した。第９号焼土遺構と同様に耕作によると思われる撹乱がみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は（229）cm×129cmを測り、焼土は62cm×56cmを測る。遺物は出土しなかった。

第11号焼土遺構（第19図）

調査区中央部、第４トレンチの中央Ｋ－137グリッドに位置し、Ⅲｂ層で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は166cm×131cmを測り、焼土は中央部で強く、69cm×36cmを測る。本遺構より遺物は出土しなかった。

第12号焼土遺構（第19図）

調査区北西部、第４トレンチの北端Ｆ－145グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は（216）cm×（106）cmを測り、焼土は13cm×11cmを測る。遺物は出土しなかった。

第13号焼土遺構（第19図）

調査区北西部、第４トレンチの北端Ｅ－146グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は138cm×（79）cmを測り、焼土は56cm×38cmを測る。遺物は出土しなかった。

第14号焼土遺構（第19図）

調査区中央部Ｇ－144グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は200cm×（133）cmを測り、焼土は11cm×12cmを測る。遺物は出土しなかった。

第15号焼土遺構（第19図）

調査区西部の第５トレンチＦ－122グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は（150）cm×（200）cmを測り、焼土は53cm×23cmを測る。遺物は出土しなかった。

第16号焼土遺構　欠番

第17号焼土遺構（第19図）

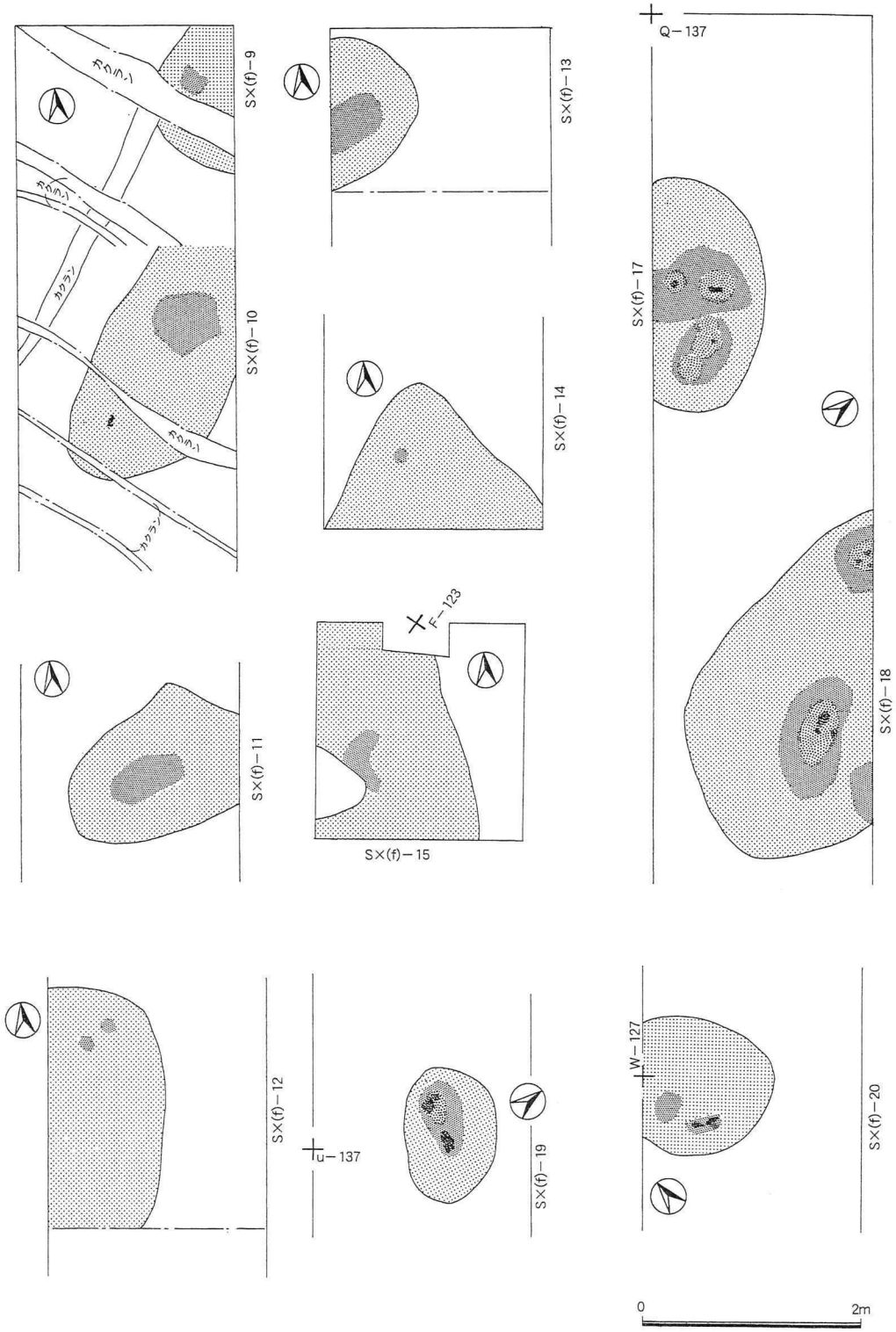
調査区中央部の第２トレンチＱ－137グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は113cm×（101）cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は（89）cm×61cmを測る。遺物は出土しなかった。

第18号焼土遺構（第19図）

調査区中央部の第２トレンチＲ－137グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は338cm×205cmを測り、焼土は全体に点在し、規模は最大117cm×53cmを測る。遺物は出土しなかった。

第19号焼土遺構（第19図）

調査区中央部の第２トレンチＵ－137グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は122cm×84cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は69cm×37cmを測る。遺物は出土しなかった。



第19図　焼土遺構実測図(2)

第20号焼土遺構（第19図）

調査区南部W－126～127グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は125cm×140（推定値）cmを測り、焼土は31cm×13cmを測る。遺物は出土しなかった。

第21号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＱ－131～132グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は113cm×83cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は59cm×41cmを測る。遺物は出土しなかった。

第22号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＱ－131グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は68cm×67cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は32cm×34cmを測る。遺物は出土しなかった。

第23号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＵ－132グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は232cm×（88）cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は108cm×（79）cmを測る。遺物は出土しなかった。

第24号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＴ－131グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は97cm×71cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は44cm×33cmを測る。遺物は出土しなかった。

第25号焼土遺構（第20図）

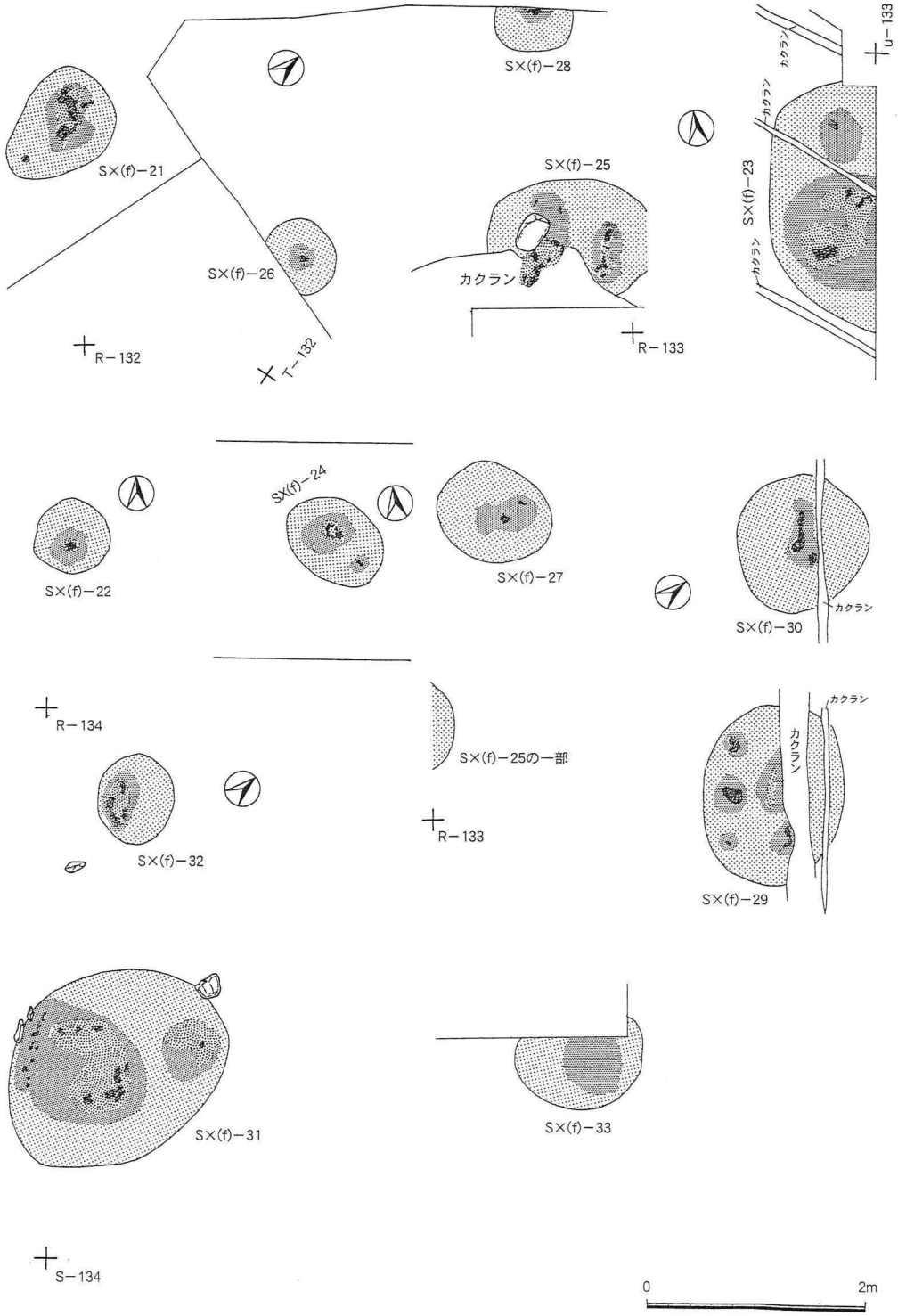
調査区ｂ地点のＱ－132グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は144（推定値）cm×111cmを測り、焼土の色は中央で強く、91cm×31cmを測る。遺物は出土しなかった。

第26号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＱ－132グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は69cm×（49）cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は23cm×24cmを測る。遺物は出土しなかった

第27号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＱ－133グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は106cm×90cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は55cm×29cmを測る。遺物は出土しなかった。



第20図　焼土遺構実測図(3)

第28号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＱ－132グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は68cm×（41）cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は34cm×（13）cmを測る。遺物は出土しなかった。

第29号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＱ～Ｒ－133グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によると思われる細長い溝があり、遺構の一部が撹乱されている。焼土および焼土粒を含む範囲は165cm×124cmを測り、焼土は全体に点在しており、最大62cm×25cmを測る。遺物は出土しなかった。

第30号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＱ－133グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は128cm×115cmを測り、焼土は62cm×29cmを測る。遺物は出土しなかった。

第31号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＲ－133～134グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は216cm×171cmを測り、焼土は126cm×103cmを測る。遺物は出土しなかった。

第32号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＲ－134グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は83cm×69cmを測り、焼土の色は南西側で強く、その規模は57cm×31cmを測る。遺物は出土しなかった。

第33号焼土遺構（第20図）

調査区中央部ｂ地点のＲ－133グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は116cm×92（推定値）cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は54cm×51cmを測る。遺物は出土しなかった。

第34号焼土遺構（第21図）

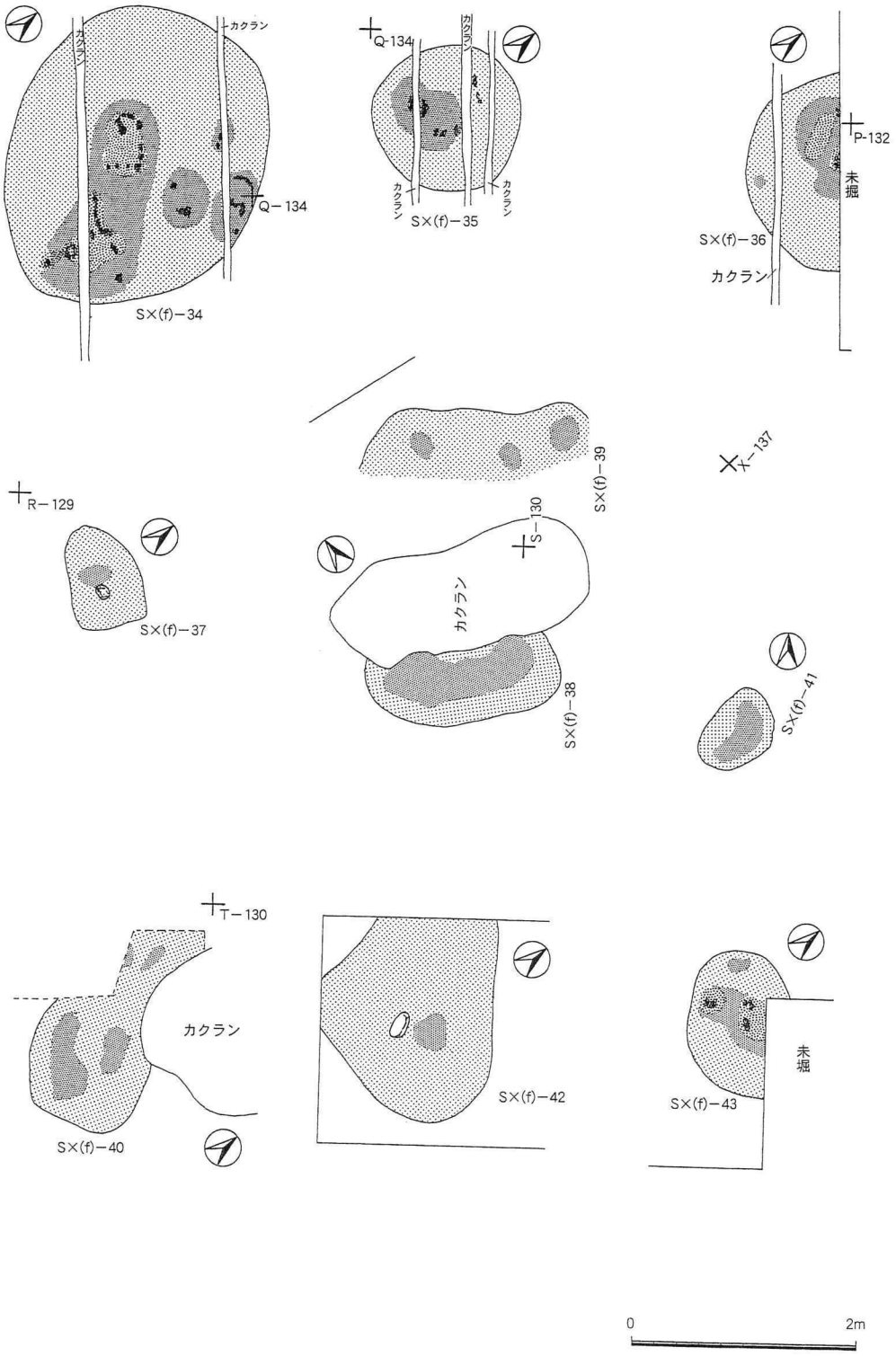
調査区中央部ｂ地点のＰ～Ｑ－134グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によると思われる撹乱がみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は276cm×222cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は178cm×65cmを測る。遺物は出土しなかった。

第35号焼土遺構（第21図）

調査区中央部ｂ地点のＱ－134グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によると思われる撹乱がみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は111cm×109cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は58cm×51cmを測る。遺物は出土しなかった。

第36号焼土遺構（第21図）

調査区中央部ｂ地点のＰ－131～132グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によるものか細長い撹乱がみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は172cm×83



第21図　焼土遺構実測図(4)

（推定値）cmを測り、焼土は89cm×38（推定値）cmを測る。遺物は出土しなかった。

第37号焼土遺構（第21図）

調査区中央部R－129グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は95cm×62cmを測り、焼土は31cm×19cmを測る。遺物は出土しなかった。

第38号焼土遺構（第21図）

調査区中央部R－129グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は170cm×66（推定値）cmを測り、焼土は131cm×32cmを測る。遺物は出土しなかった。

第39号焼土遺構（第21図）

調査区中央部ｂ地点のR～S－130グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は201cm×62（推定値）cmを測り、焼土は全体に点在しており、最大31cm×26cmを測る。遺物は出土しなかった。

第40号焼土遺構（第21図）

調査区中央部T－129グリッドに位置し、Ⅲｂ層下位で確認した。一部が風倒木痕により撹乱されている。焼土および焼土粒を含む範囲は202（推定値）cm×108cmを測り、焼土は全体に点在しており、最大75cm×32cmを測る。遺物は出土しなかった。

第41号焼土遺構（第21図）

調査区南東部X－136グリッドに位置し、Ⅲｂ層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は77cm×54cmを測り、焼土は55cm×26cmを測る。遺物は出土しなかった。

第43号焼土遺構（第21図）

調査区南部S－141グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は128cm×88cmを測り、焼土は中央部で強く、59cm×52cmを測る。遺物は出土しなかった。

(4) 遺構外出土遺物

遺構外より出土した遺物は、縄文土器破片307点、石器６点である。

① 土　器（第22図～第26図）

本調査区からは307点の縄文土器破片が出土した。北東部や中央部で多い（第27図）。

後期初頭から前葉の土器（第22図～第24図）

１類：帯縄文が施文された土器（１～26）

帯縄文が施文された土器を一括した。小破片が多く器形が明確でないものが多いが、深鉢形土器と思われるものが多くみられ、口縁部分が外反しているものもある。帯縄文の幅は狭く、曲線文や入り組み文がみられるものもある。焼成はいずれも良好で、色調はにぶい黄橙色、黄褐色を呈する。

２類：地文上に沈線文が施された土器（27～29、32）

地文上に沈線が施された土器を一括した。小破片のみのため、全体の文様構成や器形は不明である。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色、にぶい赤褐色を呈する。

３類：沈線文が施文された土器（33～69）

沈線文のみで文様構成されている土器を一括した。調査区中央部からの出土が目立つ。深鉢形土器が多くみられる。69は波状口縁をもち、口縁部が外反する。円形文、曲線文などが施文されており、55には渦巻文が、36には花弁状文が施されている。焼成はおおむね良好で、色調はにぶい黄橙色、にぶい赤褐色、暗赤褐色を呈する。

後期初頭から中葉の土器（第24図～第26図）

１類：撚糸文の土器（70～76）

撚糸文が施された土器を一括した。破片が小さく、器形は不明であるが、72と75は平口縁とわかる。70～76はすべて網目状撚糸文が施された土器である。胎土に砂粒を含むものがみられ、焼成はおおむね良好である。色調は、にぶい黄橙色を呈する。

２類：条痕文の土器（106）

条痕文が施された土器である。本調査区からは1点のみ出土した。

３類：縄文の土器（77～80、98～108、110～123）

本類には無節、単節、複節の縄文が施文されたものを一括した。107は無節の縄文が施文されたもので、77～80は複節の縄文が施文されたものである。破片が小さいものが多いが、主体は深鉢形の土器であると思われる。110については縄文が細かく薄いため、時代が下る可能性がある。焼成は良好で、色調は、にぶい黄橙色、にぶい橙色を呈する。

②　石　器（第28図）

本調査区における石器の出土はきわめて少ないが、調査区全体から出土している。（第29図）

石　鏃

本調査区から４点出土した。石材はすべて硬質頁岩である。

１群…有茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

ａ…平基有茎石鏃で、本調査区からは１点出土した。(2)

ｂ…凹基有茎石鏃で、本調査区からは１点出土した。(3)

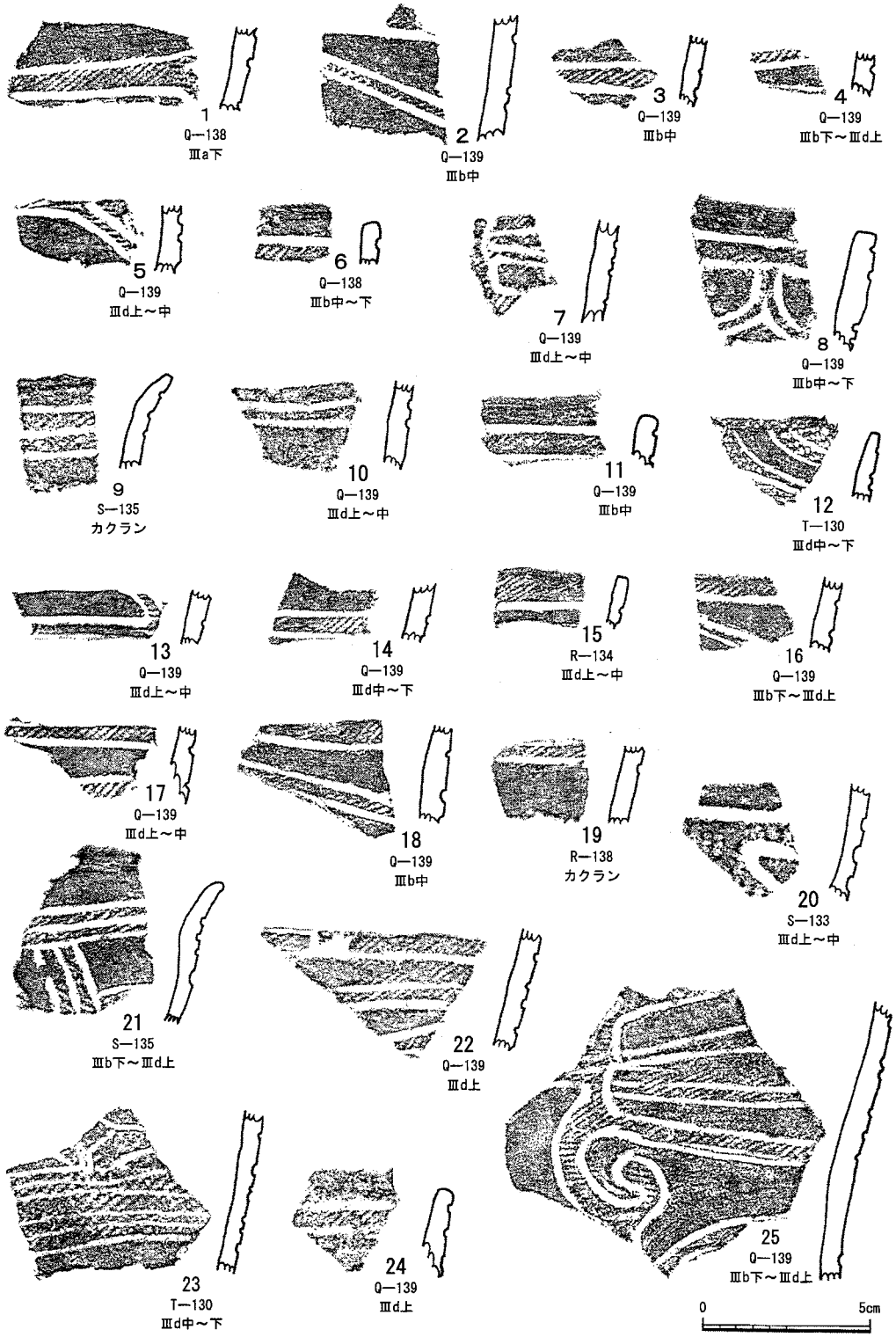
ｃ…凸基有茎石鏃で、本調査区からは出土しなかった。

２群…無茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

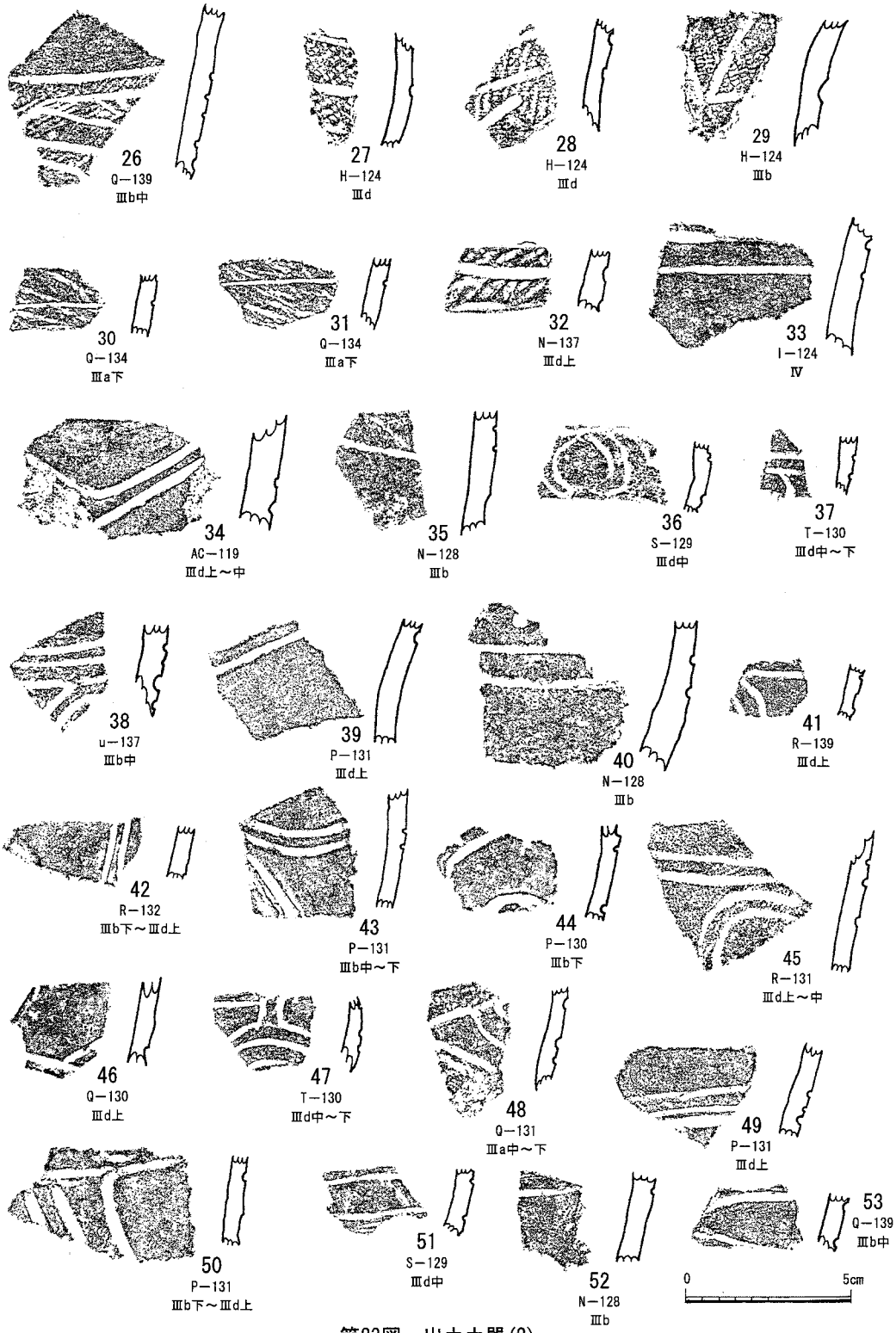
ａ…平基無茎石鏃で、本調査区からは１点出土した。(1)

ｂ…凹基無茎石鏃で、本調査区からは１点出土した。(4)

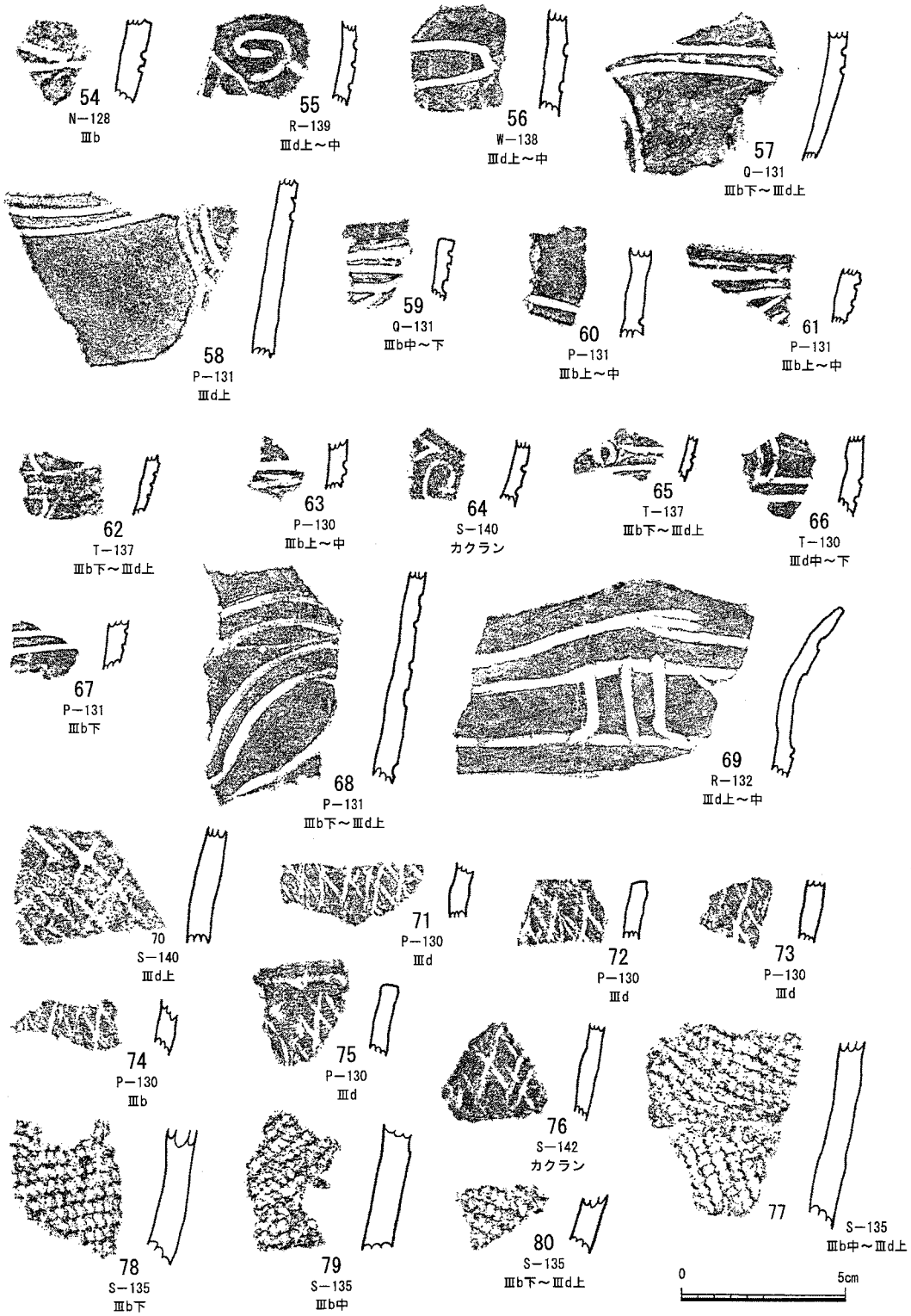
ｃ…尖基石鏃で、本調査区からは出土しなかった。


1
Q—138
Ⅲa下
2
Q—139
Ⅲb中
3
Q—139
Ⅲb中
4
Q—139
Ⅲb下～Ⅲd上
5
Q—139
Ⅲd上～中
6
Q—138
Ⅲb中～下
7
Q—139
Ⅲd上～中
8
Q—139
Ⅲb中～下
9
S—135
カクラン
10
Q—139
Ⅲd上～中
11
Q—139
Ⅲb中
12
T—130
Ⅲd中～下
13
Q—139
Ⅲd上～中
14
Q—139
Ⅲd中～下
15
R—134
Ⅲd上～中
16
Q—139
Ⅲb下～Ⅲd上
17
Q—139
Ⅲd上～中
18
Q—139
Ⅲb中
19
R—138
カクラン
20
S—133
Ⅲd上～中
21
S—135
Ⅲb下～Ⅲd上
22
Q—139
Ⅲd上
23
T—130
Ⅲd中～下
24
Q—139
Ⅲd上
25
Q—139
Ⅲb下～Ⅲd上
0
5cm

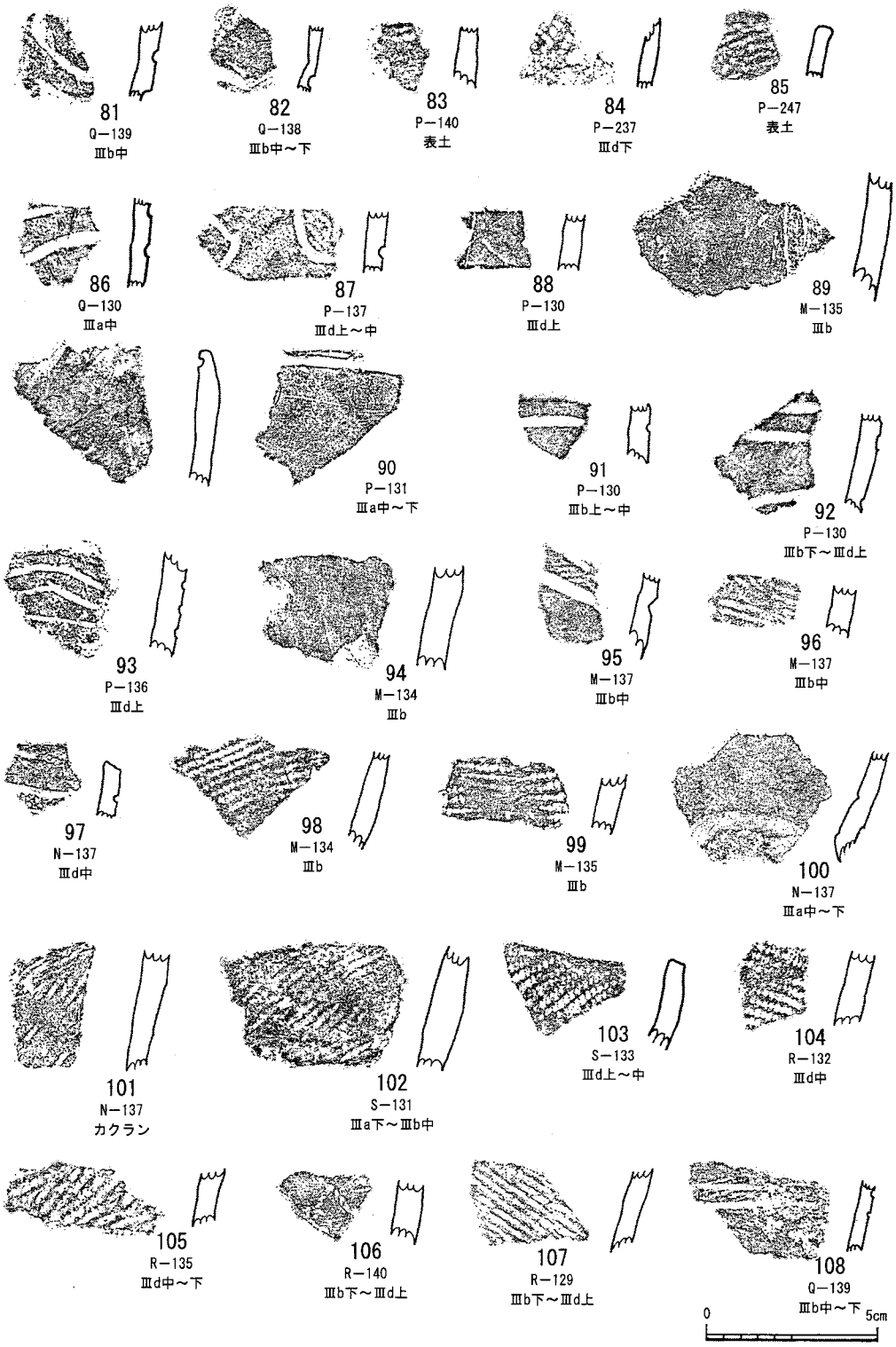
第22図　出土土器(1)


26
Q−139
Ⅲb中
27
H−124
Ⅲd
28
H−124
Ⅲd
29
H−124
Ⅲb
30
Q−134
Ⅲa下
31
Q−134
Ⅲa下
32
N−137
Ⅲd上
33
I−124
Ⅳ
34
AC−119
Ⅲd上～中
35
N−128
Ⅲb
36
S−129
Ⅲd中
37
T−130
Ⅲd中～下
38
u−137
Ⅲb中
39
P−131
Ⅲd上
40
N−128
Ⅲb
41
R−139
Ⅲd上
42
R−132
Ⅲb下～Ⅲd上
43
P−131
Ⅲb中～下
44
P−130
Ⅲb下
45
R−131
Ⅲd上～中
46
Q−130
Ⅲd上
47
T−130
Ⅲd中～下
48
Q−131
Ⅲa中～下
49
P−131
Ⅲd上
50
P−131
Ⅲb下～Ⅲd上
51
S−129
Ⅲd中
52
N−128
Ⅲb
53
Q−139
Ⅲb中
0
5cm

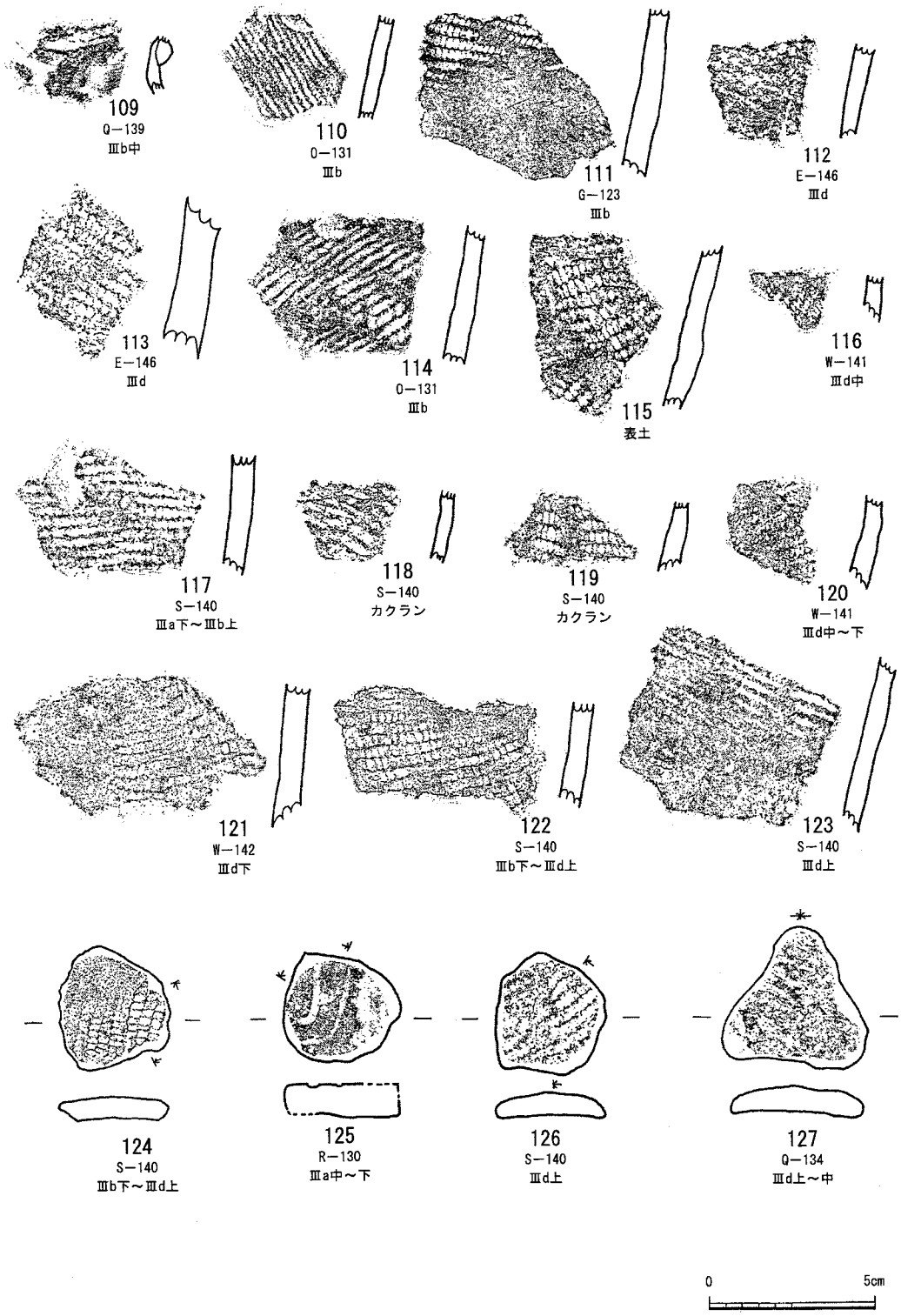
第23図　出土土器(2)


54
N−128
Ⅲb
55
R−139
Ⅲd上〜中
56
W−138
Ⅲd上〜中
57
Q−131
Ⅲb下〜Ⅲd上
58
P−131
Ⅲd上
59
Q−131
Ⅲb中〜下
60
P−131
Ⅲb上〜中
61
P−131
Ⅲb上〜中
62
T−137
Ⅲb下〜Ⅲd上
63
P−130
Ⅲb上〜中
64
S−140
カクラン
65
T−137
Ⅲb下〜Ⅲd上
66
T−130
Ⅲd中〜下
67
P−131
Ⅲb下
68
P−131
Ⅲb下〜Ⅲd上
69
R−132
Ⅲd上〜中
70
S−140
Ⅲd上
71
P−130
Ⅲd
72
P−130
Ⅲd
73
P−130
Ⅲd
74
P−130
Ⅲb
75
P−130
Ⅲd
76
S−142
カクラン
77
S−135
Ⅲb中〜Ⅲd上
78
S−135
Ⅲb下
79
S−135
Ⅲb中
80
S−135
Ⅲb下〜Ⅲd上
0
5cm

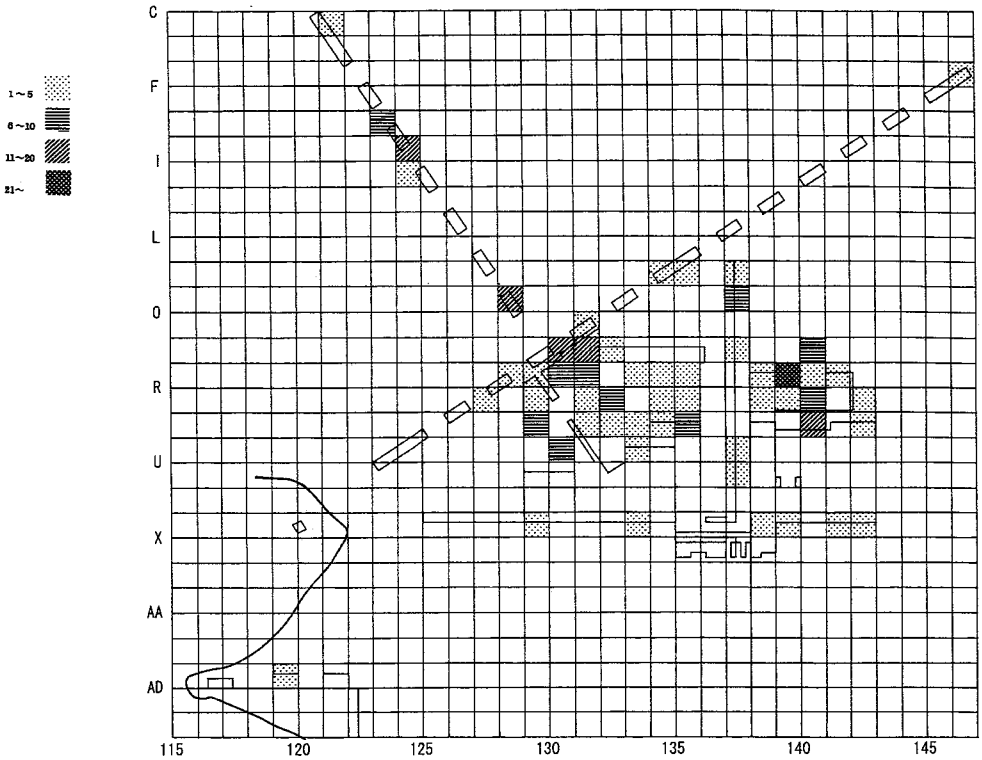
第24図　出土土器(3)


81
Q−139
Ⅲb中
82
Q−138
Ⅲb中〜下
83
P−140
表土
84
P−237
Ⅲd下
85
P−247
表土
86
Q−130
Ⅲa中
87
P−137
Ⅲd上〜中
88
P−130
Ⅲd上
89
M−135
Ⅲb
90
P−131
Ⅲa中〜下
91
P−130
Ⅲb上〜中
92
P−130
Ⅲb下〜Ⅲd上
93
P−136
Ⅲd上
94
M−134
Ⅲb
95
M−137
Ⅲb中
96
M−137
Ⅲb中
97
N−137
Ⅲd中
98
M−134
Ⅲb
99
M−135
Ⅲb
100
N−137
Ⅲa中〜下
101
N−137
カクラン
102
S−131
Ⅲa下〜Ⅲb中
103
S−133
Ⅲd上〜中
104
R−132
Ⅲd中
105
R−135
Ⅲd中〜下
106
R−140
Ⅲb下〜Ⅲd上
107
R−129
Ⅲb下〜Ⅲd上
108
Q−139
Ⅲb中〜下
0
5cm

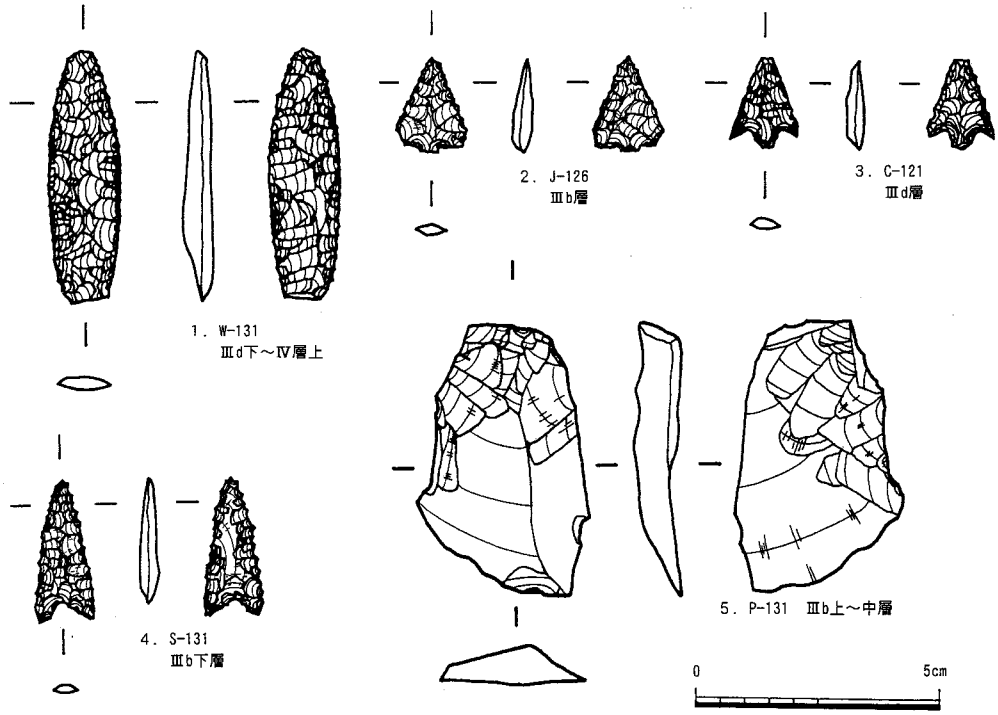
第25図　出土土器(4)



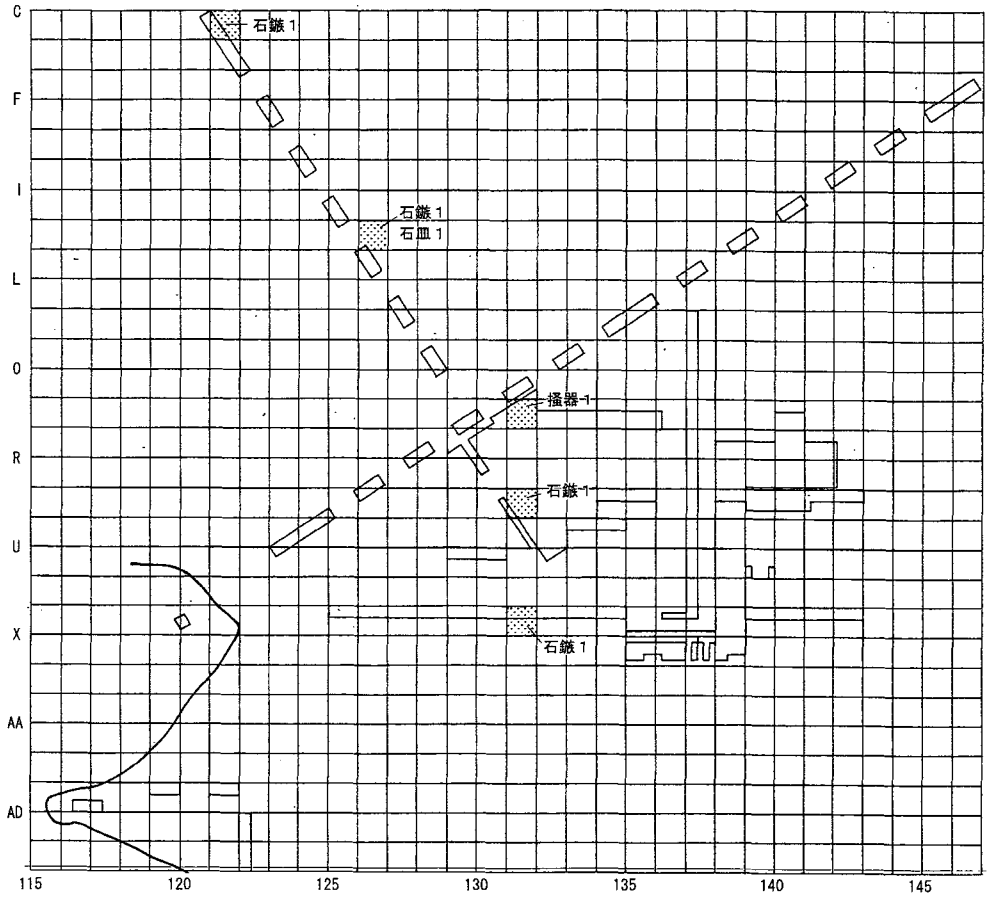
第26図　出土土器(5)・土製品



第27図　出土土器破片分布状況



第28図　出土石器



第29図　出土石器分布状況

掻　器

本調査区からは１点出土した。５は打面付近にのみ剥離がみられるが、刃部は先端部一側縁である。石材は、硬質頁岩である。

石　皿

本調査区からは１点出土した。欠損品で、石材は砂質凝灰岩である。

③　土製品（第26図）

本調査区からは４点の土製品が出土し、すべてが土器破片利用土製品である。

土器破片利用土製品

土器破片を打ち欠き、研磨することによって整形しているものである。形態的に円形、三角形、方形に分類される。本調査区から出土したものは、124～126は円形、127は三角形である。

２．歴史時代

本調査区で検出された歴史時代の遺構は道路状遺構１条である。

(1)　道路状遺構（第30図）

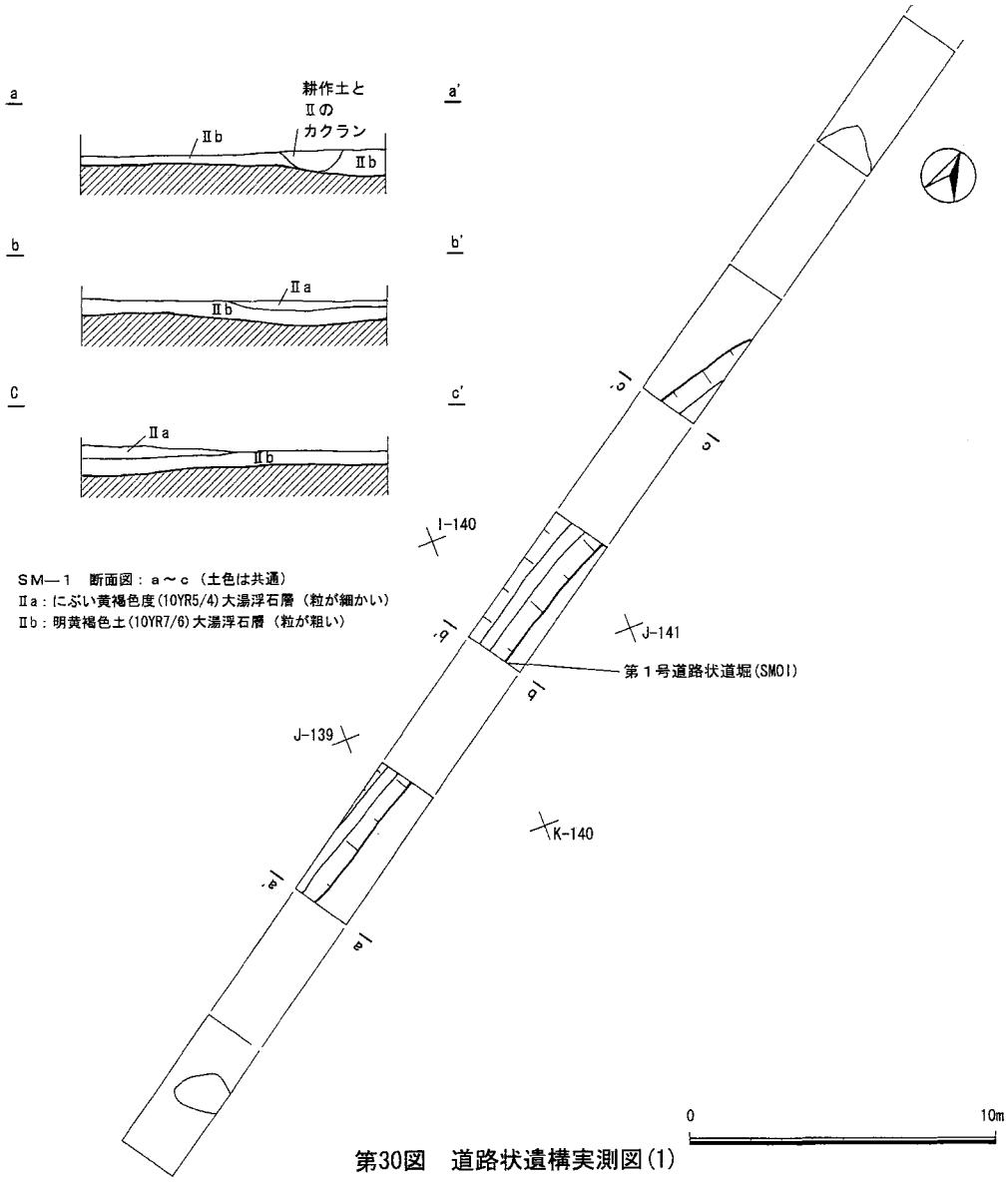
本調査区からは１条の道路状遺構が検出された。

第１号道路状遺構

調査区北西部Ｊ－138～139、Ｉ－140、Ｈ－141グリッドに位置し、Ⅱ層である十和田ａ降下火山灰除去と同時に確認された。南西から北東へと続いており、２ｍの幅で硬くしまっているのが確認された。硬くしまる部分の高さは周辺より低くなっており、その上に十和田ａ降下火山灰が周囲より厚く堆積していた。このことから、この道路状遺構が火山灰降下時には周囲より低くなるほど硬くしまった状態におかれていたことが判明した。

構築時期は、火山灰の堆積状況および層位により大湯浮石降下前の平安時代前半以前と考えられる。

（三浦貴子）



第30図　道路状遺構実測図(1)

第Ⅳ章　Ａ$_5$区検出遺構と出土遺物

１．縄文時代

本調査区で検出された縄文時代の遺構は、焼土遺構１基である。

⑴　焼土遺構

第42号焼土遺構（第21図）

調査区南西部ＡＣ－116グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は178（推定値）㎝×152㎝を測り、焼土は32㎝×28㎝を測る。焼土のまわりに石が立てられた状態で検出しており、石囲炉の可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

⑵　遺構外出土遺物

本調査区から出土した遺物は縄文土器１点である。（第23図34）

（三浦貴子）

第Ⅴ章　分析と考察

1．配石遺構群について

(1)　配石遺構の形態

一本木後ロ地区は、昭和59年から61年まで発掘調査し、３ヵ年に確認された配石遺構43基について、大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)で分析と考察を行っている。今回の発掘区は、この調査区Ａ$_1$～Ａ$_3$区の南西側隣接地であり、一本木後ロ配石遺構群が広がると予想された部分である。このため、以下の分析においては、分類基準等は基本的に報告書(3)と同一とする。

なお、本年度の調査によって、12基の配石遺構が確認され、昭和50年に確認されている１基の配石遺構の再確認を行っているが、これらの配石遺構は後述のように２つの群に分割される。一つは以前から確認されている一本木後ロ配石遺構群の続きと考えられる一群、もう一つはその南西28～53mに位置する一群である。いずれもその小字名が一本木後ロであるため、従来の一本木後ロ配石遺構群と呼んでいたものを以後一本木後ロ配石遺構群Ａ、新たに確認された配石遺構群を一本木後ロ配石遺構群Ｂと仮称する。

(2)　配石遺構の形態

配石遺構の形態については、報告書(3)において次のように分類している。

Ⅰ類…縁辺部に立石を巡らすもので、内・外部構造から4類に細分される。

ａ．縁辺部形態が楕円形を呈し、その内部に平石を数個置いたもの。

ｂ．形態が楕円形を呈し、その内部中央に立石を立て、その隙間に平石を置くもの。

ｃ．形態が円形を呈し、その内部に数個～十数個の平石を積み、さらにその縁辺部外側に石を環状に巡らすもの。

ｄ．下部土坑の四方向に立石を立て、その内部に平石を数個置き、さらにその縁辺部に内部を覆うように斜めに立石を巡らすもの。

Ⅱ類…立石のみで配石がつくられるもので、３類に細分される。

ａ．縁辺部に立石を楕円形に巡らすもの。

ｂ．配石下土坑の長軸両端に一対の立石を立てるもの。

ｃ．配石下土坑の長軸両端に一対の立石を立て、そのほぼ中間に数個の小さな石を立てるもの。

Ⅲ類…配石縁辺部に平石を巡らせるもので、次の２類に細分される。

ａ．石の長軸を連結させ、円形に一巡させるもので、その内部に石が雑然と積まれるもの。

ｂ．石の長軸を中心に向け、所謂放射状に置き、その内部には石が雑然と積まれるもの。

今年度、確認された配石遺構の配石形態は第３表に示すとおりである。第２、18号配石遺構は後世の攪乱により石が本来の位置を動いたり抜かれているため、形態はつかめない。形態の推測できる配石は11基で、うち７基がＩａ類で、第17号配石遺構もＩａ類の可能性もある。Ｉｂ類は第10号配石遺構、Ｉｃ類は第16号配石遺構のそれぞれ１基のみで、第11号配石遺構はⅡａ類である可能性がある。なお、Ⅲ類に分類される配石は今年度の発掘では確認されていない。

比較のため、第２表に昭和59～61年に確認された配石遺構の観察表を再掲した。

(3) 配石下土坑について

配石遺構の保存のため、配石下の発掘は第１号配石遺構１基しか行っていない。しかも配石を動かさないという調査方針から部分的な調査となったため、下部土坑の存在と長軸径、深さの確認に終わっている。同配石下の土坑の規模は、長軸径が153cm、深さが65cmで、以前調査された一本木後ロ配石遺構群Ａの配石下土坑の規模と比較すると、長軸がやや長いものの、規模的な矛盾はない。

他の配石下の発掘は行っていないが、第17号配石遺構のように配石遺構構築面で下部土坑と考えられるプランがみえる遺構もあることや、以前調査された一本木後ロ配石遺構群域の配石には全て下部土坑が伴うことから、今年度確認された配石遺構下にも土坑があるものと考えられる。

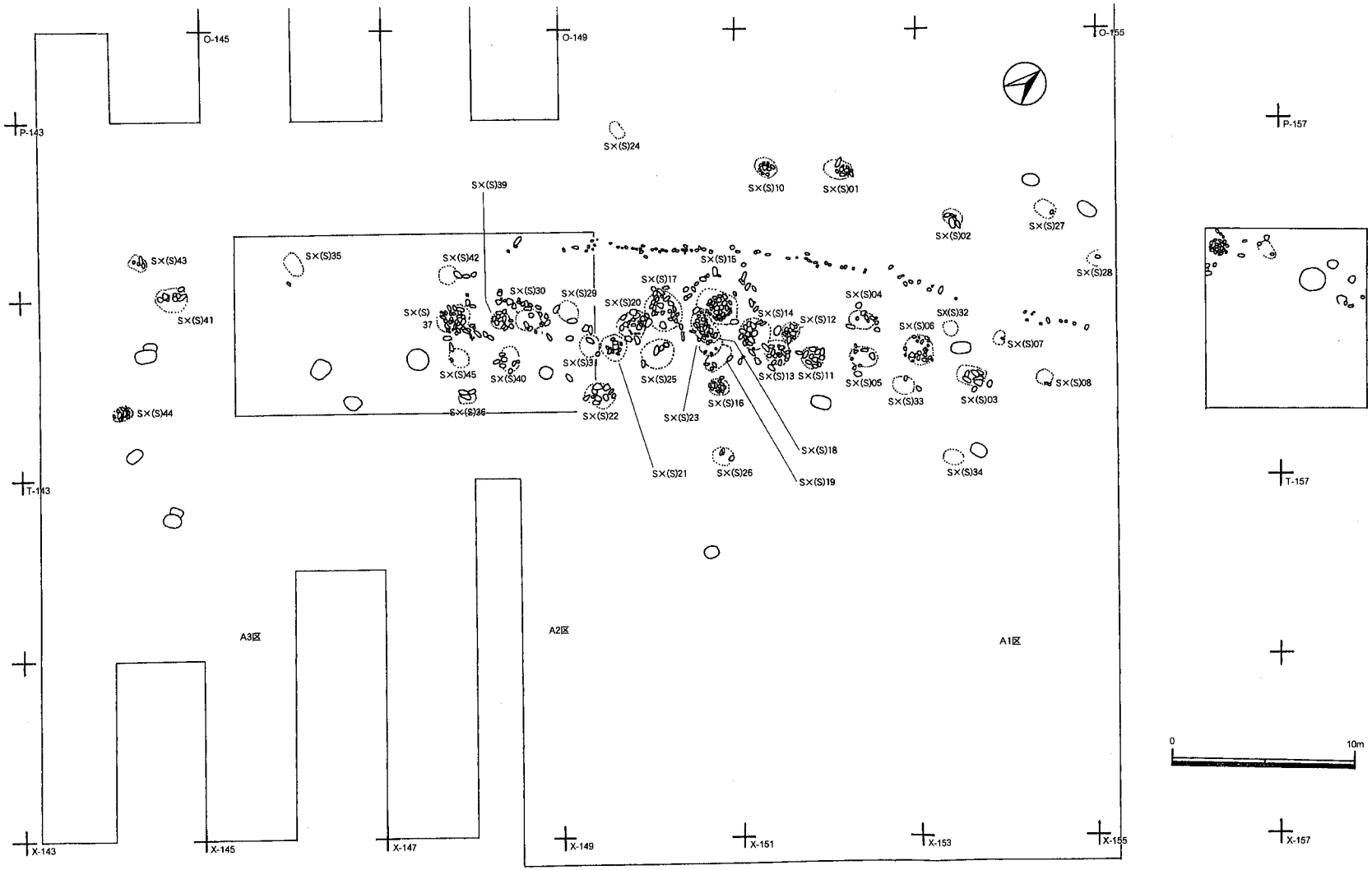
(4) 配石遺構の時期・性格

配石遺構に伴う遺物は、下部土坑の調査が第１号配石遺構１基のみであることもあり、確認されていない。このため、配石遺構の構築時期を明確にすることはできない。ただし、配石遺構の構築面がこれまでに確認されている配石遺構と同じⅢｄ層上面であることや配石周辺の同層の出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

(5) 配石遺構の配置

一本木後ロ地区の第１次から３次の調査で確認された所謂一本木後ロ配石遺構群は配石遺構43基、弧状列石１条、土坑数基から構成されている。第１、２次調査部分（配石群北東部）においては、配石遺構は幅20ｍの弧状帯上に位置し、この帯は弧状列石により内・外帯に二分割され、内帯側の配石遺構は4～6基を一単位とする小塊（Ａ～Ｆ小塊）に細分され、それぞれ最も近い距離の外帯に位置する配石遺構１基に対応するという規則的な配置であった。これに対し、第３次調査部分（配石群南西部）では、弧状列石や外帯の配石遺構は検出されず、配石遺構10基と同性格と考えられる土坑3基はいずれも幅10ｍの内帯の延長線上に位置している。これらの遺構も小塊（ＺＡ～ＺＤ小塊）に細分されるが、その一単位の数が３～５基と少なく、各小塊間の距離も広くなっている。

また、Ａ～Ｆ小塊ではＩａ類（縁辺部に立石を一巡し、その内部に平石をおくタイプ）の配



第31図　一本木後口配石遺構群

石遺構が外帯を構成し、内帯の各小塊に内在するⅢａ類（縁辺部に平石を長軸が連結するように円形に一巡させ、その内側に石を雑然と積むタイプ）と相関関係にあったが、ＺＡ～ＺＤ小塊ではⅠａ類の配石遺構は内帯の小塊に内在するという違いがみられる。

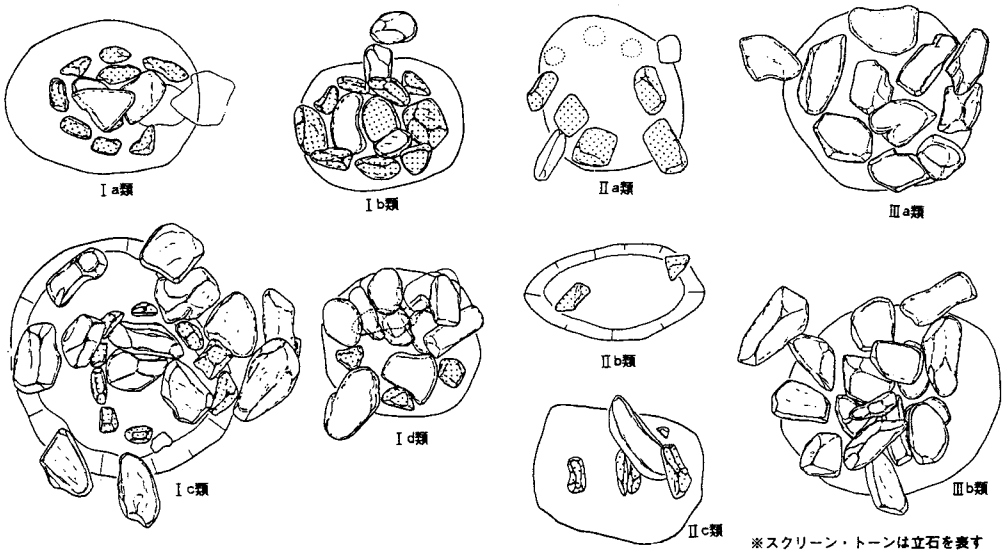
これらの配石遺構群はさらに南西及び東方向へと延びる様相をしているが、野中堂、万座環状列石のように円形（環状）に一巡することはないと考えた。それは、発掘部分の配石群の曲率から、円と仮定してその直径をだすと300mとなり、その南東部が台地からはみ出るからである。このため、これらの配石遺構群は、曲率を変え、南西－北東方向に長い楕円形状に一巡するか、一巡せず弧状で終わるかのいずれかとした。

今年度の調査目的の一つは、これらの推察が正しいどうかを確認することにあった。すなわち、一本木後ロ配石遺構群が南西方向にどのような曲率でどこまで延びるのか、それらの配石群の形態、分布状況はどうかを判断する資料を得ることであった。

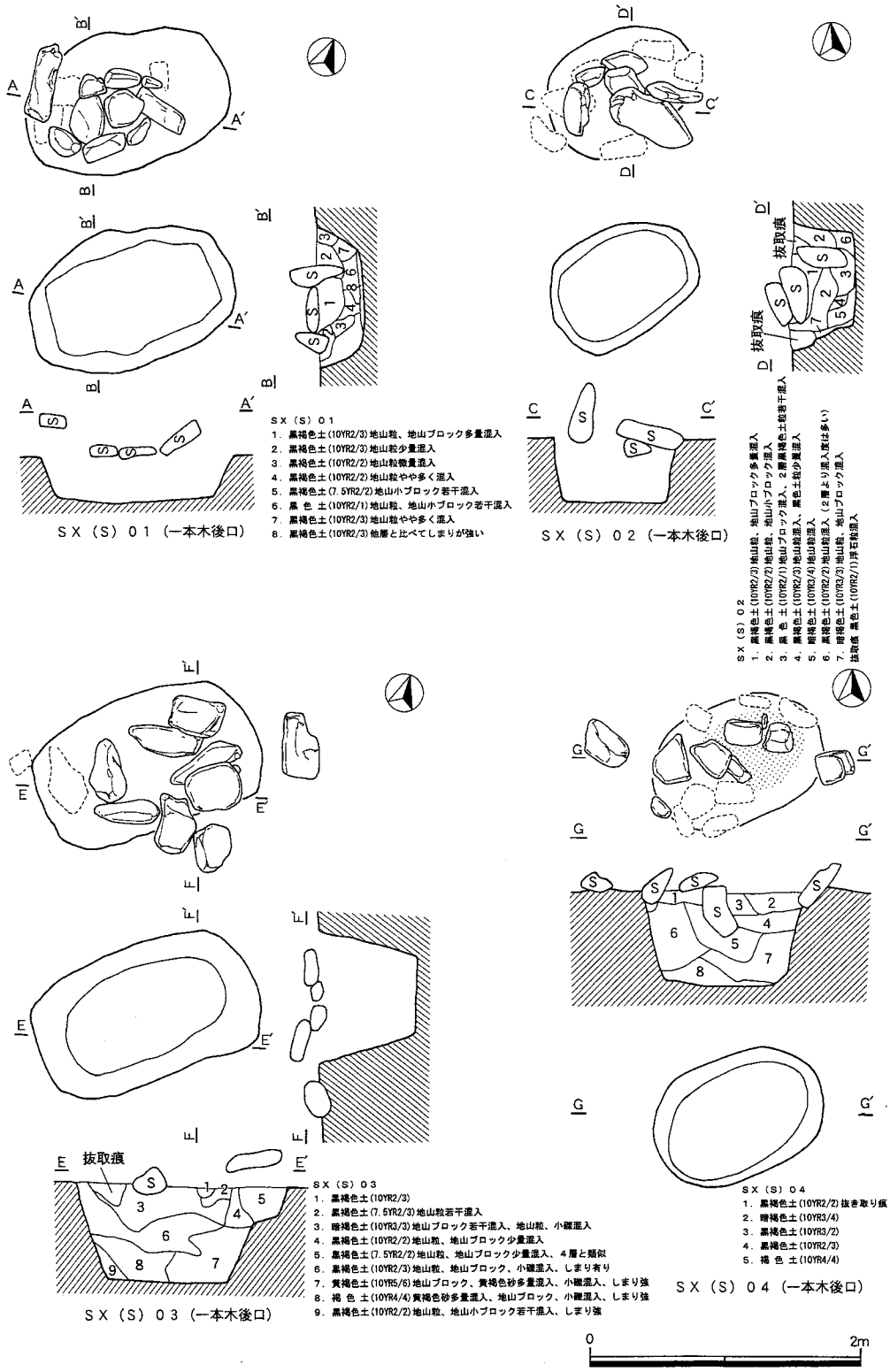
前述のように、今年度の調査で、新たにａ地点で４基、ｂ地点で８基の配石遺構が検出され、ｃ地点で昭和50年に発見されていた１基の配石遺構を再確認した。

なお、ａ地点の配石とｂ地点の配石が一連のものか問題となり、ａ地点南西側とｂ地点北東側をⅣ層上面まで精査したが、配石遺構や土坑が確認されず、別の群であると判断した。両部分の一部は耕作によりⅣ層上位にまで攪乱が及んでおり、配石は抜き取られた可能性もないではないが、これまでに確認されている一本木後ロ地区の配石下土坑の深さは19～70cmもあり、攪乱により下部土坑まで消失とは考えられないからである。

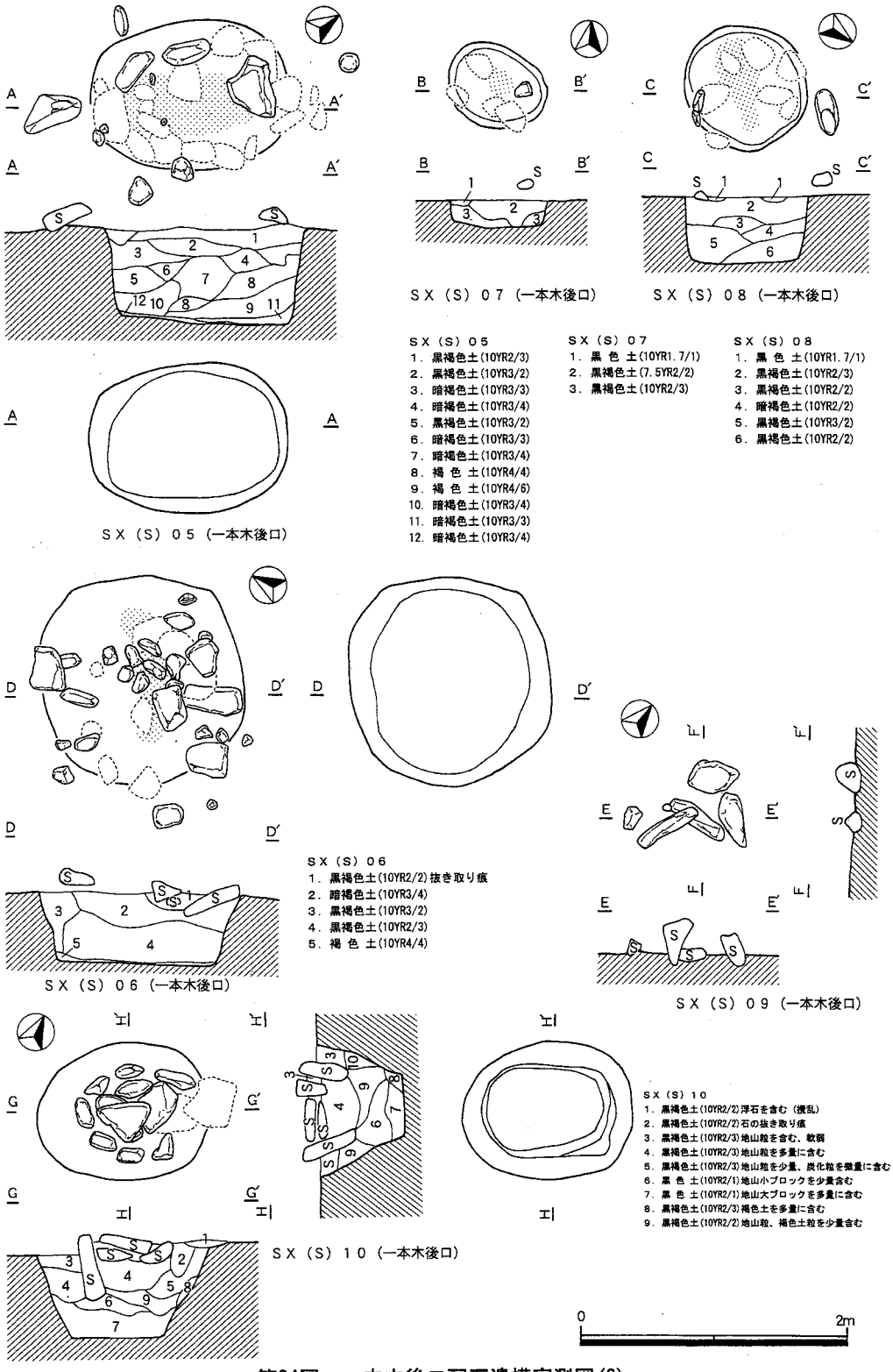
ａ地点と第３次調査地Ａ$_3$区との間には若干の未掘部分があるが、新たに確認された配石遺構４基の分布位置がＡ$_3$区の配石群の曲率とほぼ同じであるため、これらの配石遺構はこれま



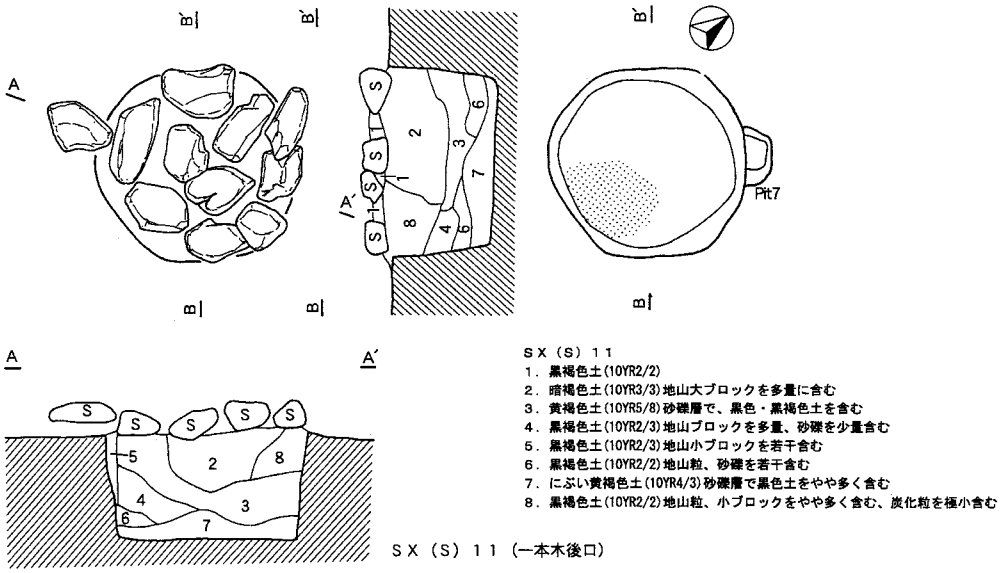
第32図　配石遺構形態分類図



第33図　一本木後口配石遺構実測図(1)



第34図　一本木後口配石遺構実測図(2)



SX（S）11
1．黒褐色土(10YR2/2)
2．暗褐色土(10YR3/3)地山大ブロックを多量に含む
3．黄褐色土(10YR5/8)砂礫層で、黒色・黒褐色土を含む
4．黒褐色土(10YR2/3)地山ブロックを多量、砂礫を少量含む
5．黒褐色土(10YR2/3)地山小ブロックを若干含む
6．黒褐色土(10YR2/2)地山粒、砂礫を若干含む
7．にぶい黄褐色土(10YR4/3)砂礫層で黒色土をやや多く含む
8．黒褐色土(10YR2/2)地山粒、小ブロックをやや多く含む、炭化粒を極小含む

SX（S）11（一本木後口）

SX（S）12
1．黒褐色土(10YR2/2)地山ブロックを若干含む
2．暗褐色土(10YR3/3)地山ブロックを多量含む
3．黒褐色土(10YR2/2)地山ブロック、砂礫を多く含む
4．黒褐色土(10YR2/3)地山ブロック、砂礫を多量に含む
非常に堅くしまる
5．黒褐色土(10YR2/3)
6．黄褐色土(10YR4/8)黒褐色土を含む
7．黒褐色土(10YR2/2)
8．黄褐色土(10YR5/8)砂礫
9．黒褐色土(10YR2/3)砂礫を含む
10．黒褐色土(10YR2/2)地山粒、小ブロックを少量
炭化物を極小含む
11．黒褐色土(10YR2/2)
12．暗褐色土(10YR3/4)
13．黒 色 土(10YR2/1)地山粒、小ブロック
茶褐色土を少量含む
14．黒褐色土(10YR2/3)地山ブロックを多く含む
15．黒褐色土(10YR2/2)

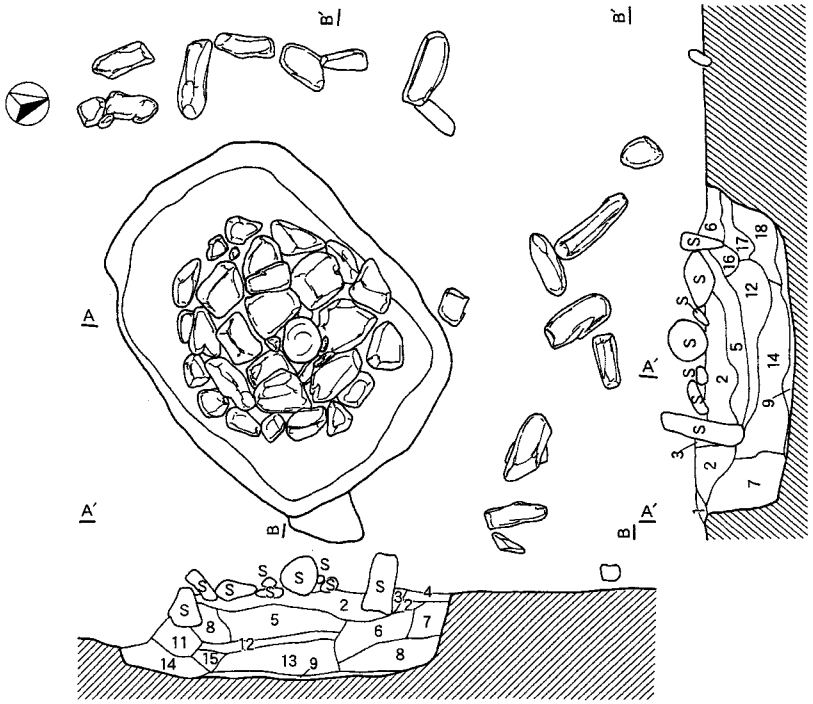
SX（S）12（一本木後口）

SX（S）13
1．黒褐色土(10YR2/3)地山粒を若干含む
2．黒褐色土(10YR2/2)地山粒を若干含む
3．黒褐色土(10YR3/2)地山粒、小ブロックを多く含む
4．黒褐色土(10YR3/2)地山粒、小ブロックを多く含む
非常に堅くしまる
5．黒褐色土(10YR3/2)地山粒、大ブロックを多量に含む
6．黒褐色土(10YR3/2)地山粒、ブロックを若干含む
非常に堅くしまる
7．暗褐色土(10YR3/4)堅くしまる
3'．黒褐色土(10YR3/2)3層と同様、ただし非常に堅い

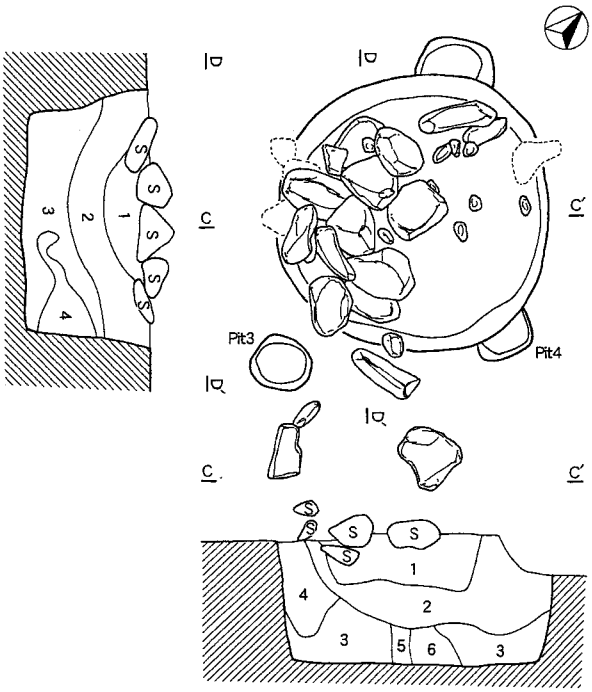
SX（S）13（一本木後口）

0　2m

第35図　一本木後口配石遺構実測図(3)



ＳＸ（Ｓ）１４（一本木後口）



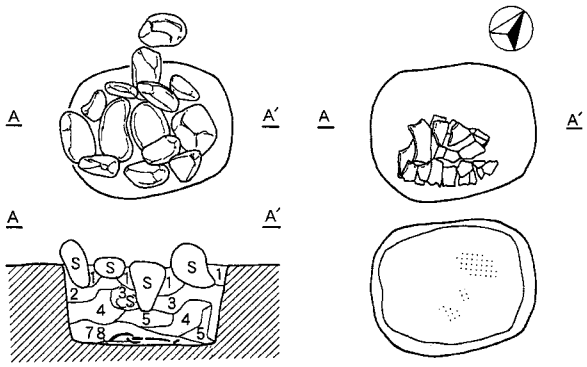
ＳＸ（Ｓ）１５（一本木後口）

ＳＸ（Ｓ）１４
1．黒 色 土(10YR2/1)基本層序第Ⅲｂ層
2．暗褐色土(10YR3/3)地山粒、ブロック混入
3．黒 色 土(10YR1.7/1)
4．黒褐色土(10YR2/2)地山粒、ブロック混入
5．黒褐色土(10YR3/2)地山ブロック多量混入
6．黒褐色土(10YR3/2)地山粒多量に混入、堅くしまる
7．暗褐色土(10YR3/3)地山大ブロック多量混入、堅くしまる
8．黒褐色土(10YR2/3)地山粒～小ブロックを多量混入
9．暗褐色土(10YR3/3)堅くしまる
10．黒褐色土(10YR2/3)地山粒、炭化物を若干混入
11．黒褐色土(10YR2/2)地山粒、炭化物を若干混入
12．黒褐色土(10YR2/2)黒色土混入
13．黒褐色土(10YR3/2)大型の地山ブロックを混入
14．黒褐色土(10YR2/2)中型地山ブロック炭化物を混入
16．黒褐色土(10YR2/3)
17．黒褐色土(10YR2/3)地山ブロックを混入
18．黒褐色土(10YR3/2)

ＳＸ（Ｓ）１５
1．にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山ブロックを少量含む
礫を含む、非常に堅くしまる
2．暗褐色土(10YR3/3)砂礫を含む、非常に堅くしまる
3．にぶい黄褐色土(10YR5/4)砂礫・地山ブロックを多量に含む
非常に堅くしまる
4．黒褐色土(10YR3/2)地山ブロックを多量に含む、堅くしまる
5．にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山ブロックを多量に含む
6．地山ブロック

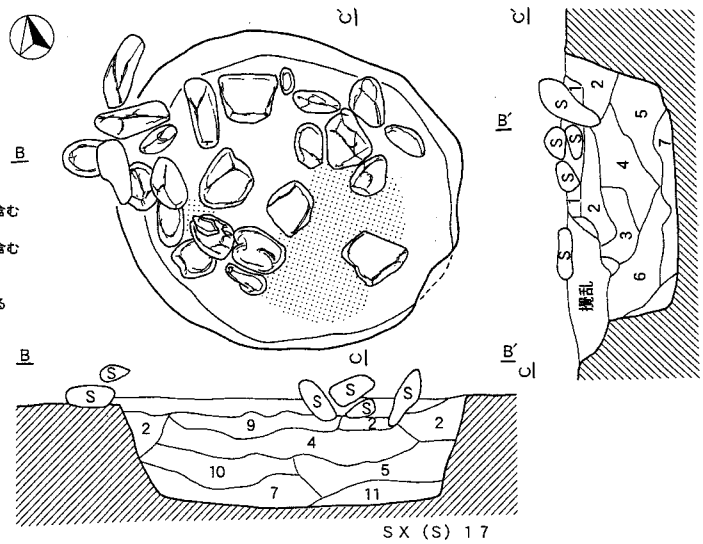
0　2m

第36図　一本木後口配石遺構実測図(4)



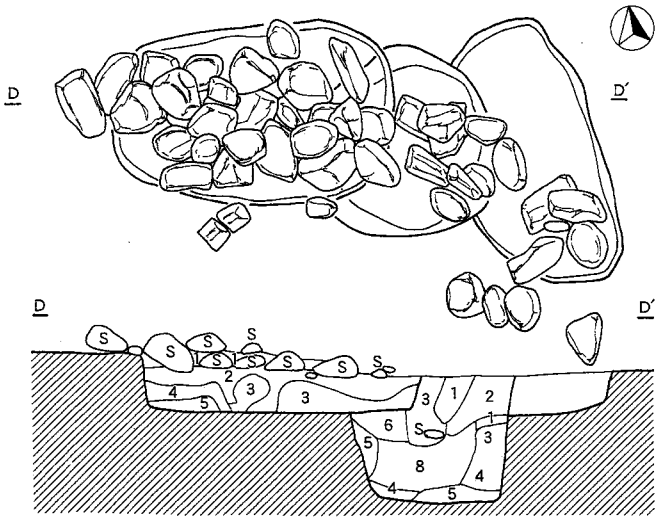
SX（S）16

SX（S）16
1．黒褐色土(10YR2/2)地山粒微量混入
2．暗褐色土(10YR3/3)地山粒少量混入
3．暗褐色土(10YR3/4)地山粒微量混入
4．褐 色 土(10YR4/4)地山粒多量混入、堅くしまる
5．暗褐色土(10YR3/4)地山粒、ブロック少量混入
6．黄褐色土(10YR5/8)地山ブロック
7．暗褐色土(10YR3/4)地山粒極微量混入
8．褐 色 土(10YR4/4)



SX（S）17

SX（S）17
1．黒 色 土(10YR2/1)
2．黒褐色土(10YR3/2)
3．黒褐色土(10YR3/2)地山ブロック、砂礫を多く含む
4．暗褐色土(10YR3/3)
5．暗褐色土(10YR3/3)地山ブロック、砂礫を多く含む
堅くしまる
6．暗褐色土(10YR3/3)砂を多く含む、堅くしまる
7．黒褐色土(10YR2/3)砂を多量に含む、堅くしまる
8．黒褐色土(10YR2/1)
9．黒褐色土(10YR2/2)地山粒を若干含む
10．黒 色 土(10YR2/1)
11．黒 色 土(10YR2/1)地山ブロックを含む



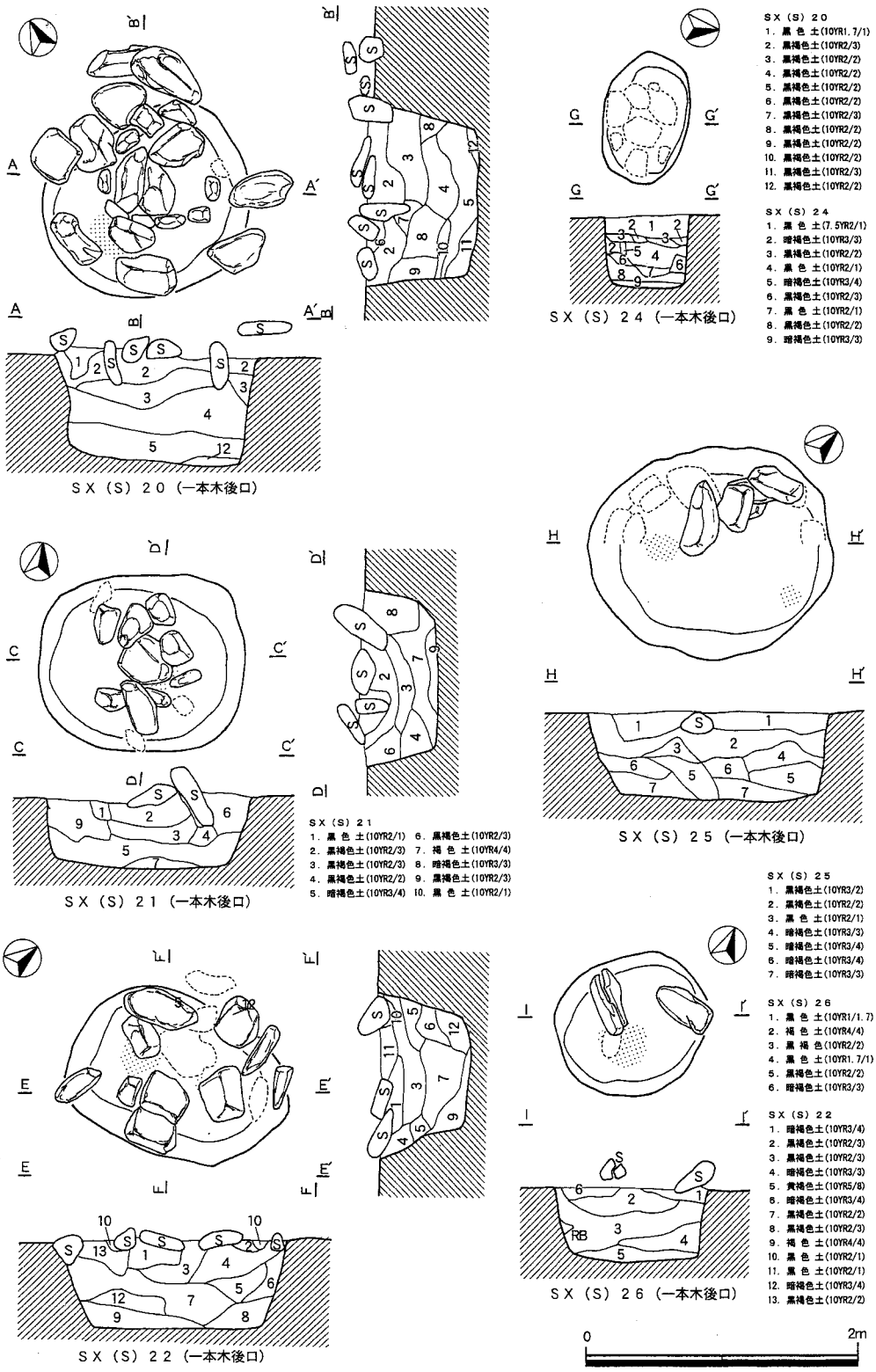
SX（S）18・23・19

SX（S）18・23・19
SX（S）18
1．黒 色 土(10YR2/1)
2．黒褐色土(10YR2/2)
3．暗褐色土(10YR3/3)地山粒、炭化物を若干含む
4．暗褐色土(10YR3/4)
5．黄褐色土(10YR5/8)

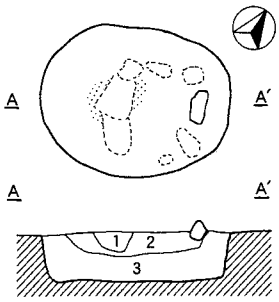
SX（S）28
1．黒褐色土(10YR2/2)
2．暗褐色土(10YR3/3)
3．黒褐色土(10YR2/3)
4．褐 色 土(10YR4/4)砂礫を多く含む
非常に硬くしまる
5．黒褐色土(10YR2/2)砂を含む
6．黒褐色土(10YR3/2)
7．黄褐色土(10YR5/8)地山ブロックを多量に含む
8．名褐色土(10YR3/3)地山ブロックを多量に含む

0　2m

第37図　一本木後口配石遺構実測図(5)

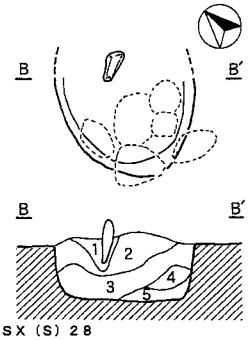


第38図　一本木後口配石遺構実測図(6)



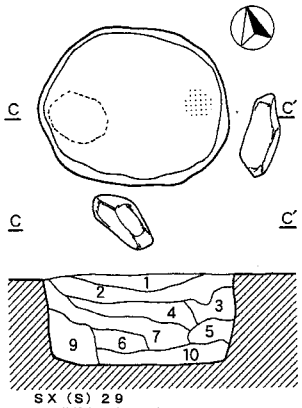
SX（S）27
1．黒 色 土(10YR1.7/1)白色浮石、砂を若干含む
2．黒褐色土(10YR2/3)地山粒、小ブロックを含む
3．黒 色 土(10YR2/1)地山粒、小ブロックを含む

SX（S）27（一本木）



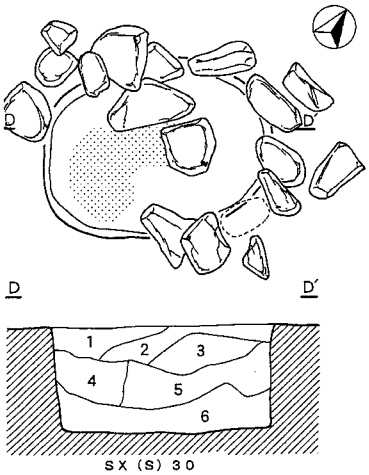
SX（S）28
1．黒褐色土(10YR2/2)地山粒若干含む
2．黒褐色土(10YR2/3)地山粒、小ブロックを含む
3．黒 色 土(10YR2/1)地山粒～中ブロックを含む
4．褐 色 土(10YR4/6)地山粒～大ブロックの集合層
5．黒褐色土(10YR3/2)地山粒～小ブロックを若干含む

SX（S）28（一本木）



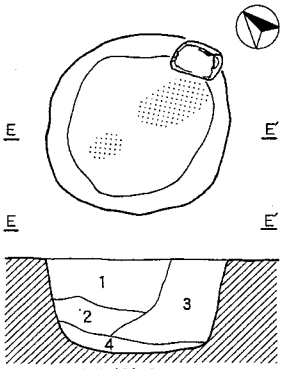
SX（S）29
1．黄褐色土(10YR5/6)
2．暗褐色土(10YR3/3)
3．暗褐色土(10YR3/4)
4．黒褐色土(10YR3/2)
5．暗褐色土(10YR3/3)
6．黒褐色土(10YR2/2)
7．黒褐色土(10YR2/3)
8．褐 色 土(10YR4/4)
9．黒褐色土(10YR2/3)

SX（S）29（一本木）



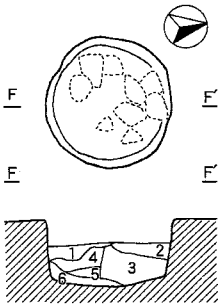
SX（S）30
1．暗褐色土(10YR3/3)
2．黒褐色土(10YR3/2)
3．黒褐色土(10YR3/2)
4．暗褐色土(10YR3/4)
5．褐 色 土(10YR4/4)

SX（S）30（一本木）



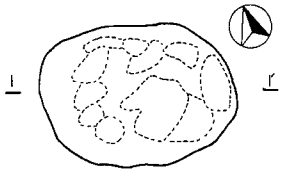
SX（S）31
1．黒褐色土(10YR2/3)
2．黒褐色土(10YR2/3)
3．暗褐色土(10YR3/3)
4．暗褐色土(10YR3/4)

SX（S）31（一本木）

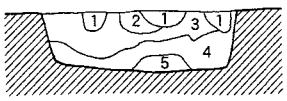


SX（S）32
1．黒 色 土(10YR2/1)
2．暗褐色土(10YR3/3)
3．暗褐色土(10YR3/4)
4．暗褐色土(10YR3/4)
5．暗褐色土(10YR3/3)
6．暗褐色土(10YR3/3)

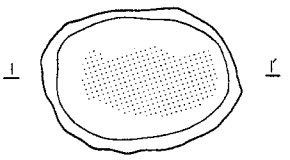
SX（S）32（一本木）



SX（S）33
1．石に抜き取り痕
2．黒褐色土(10YR2/3)
3．黄褐色土(10YR5/8)
4．褐 色 土(10YR4/6)
5．暗褐色土(10YR3/4)
6．暗褐色土(10YR3/3)
7．暗褐色土(10YR3/4)
8．黒褐色土(10YR3/2)
9．暗褐色土(10YR3/4)
10．褐 色 土(10YR4/6)

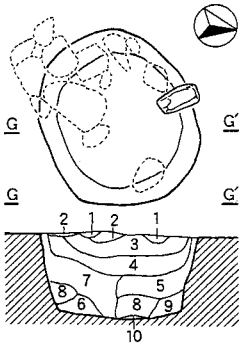


SX（S）34
1．黒褐色土(10YR2/2)
2．黒褐色土(10YR2/3)
3．黒褐色土(10YR2/3)
4．暗褐色土(10YR3/3)
5．暗褐色土(10YR3/3)
6．暗褐色土(10YR3/4)
7．暗褐色土(10YR3/4)
8．黒褐色土(10YR2/3)

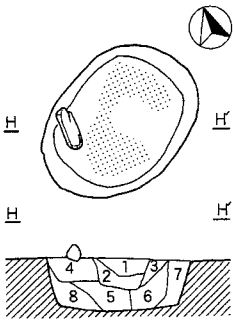


SX（S）35（一本木後口）

SX（S）35
1．黒 色 土(10YR1.7/1)
2．暗褐色土(10YR3/4)
3．暗褐色土(10YR3/4)
4．黒褐色土(10YR2/2)
5．黒褐色土(10YR2/3)



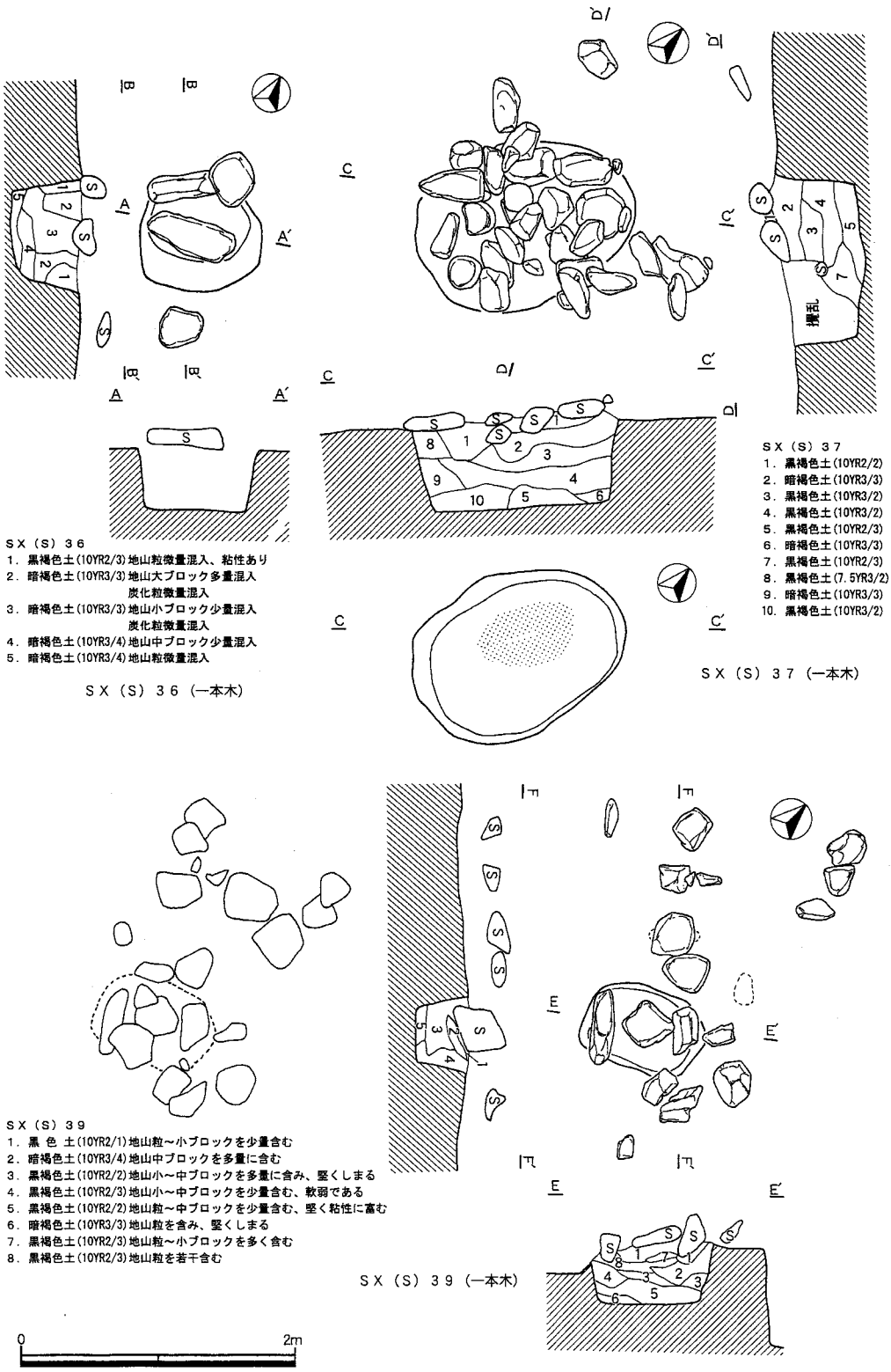
SX（S）33（一本木後口）



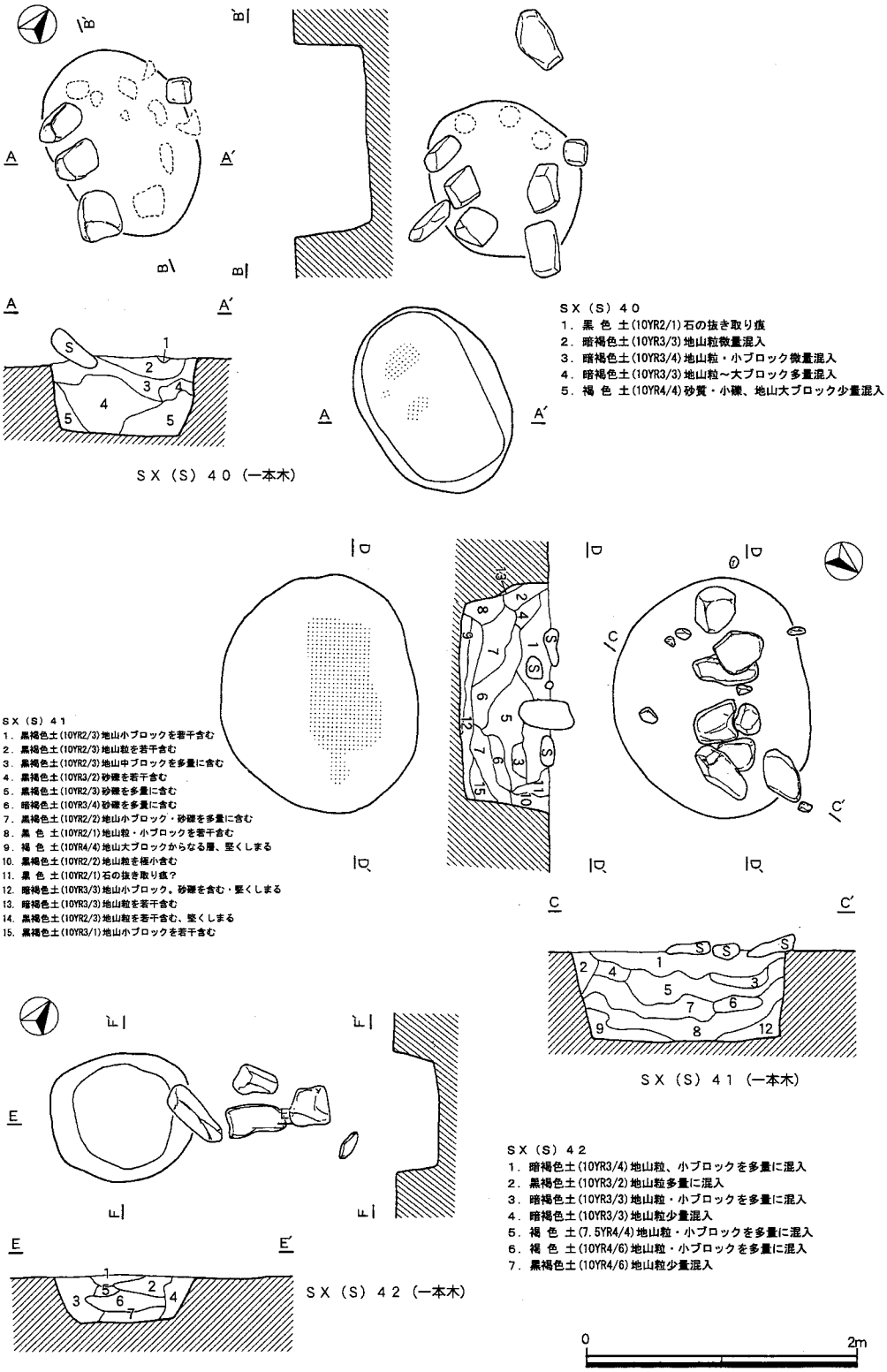
SX（S）34（一本木後口）

0　2m

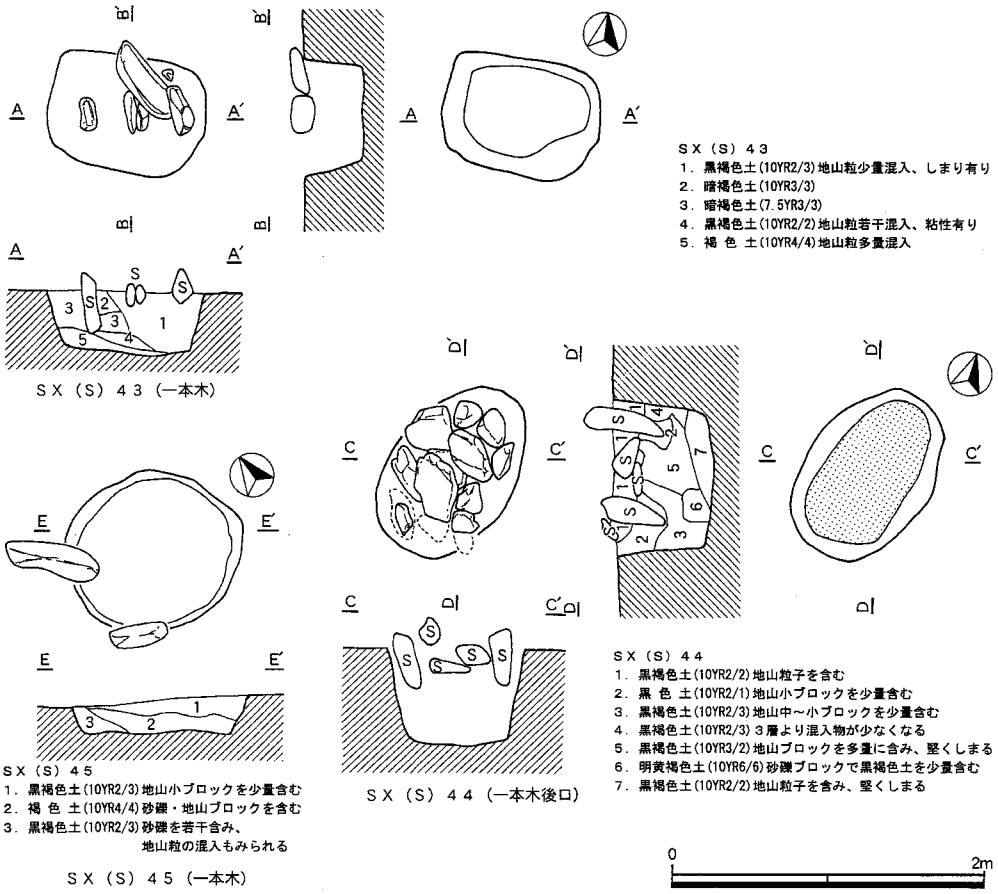
第39図　一本木後口配石遺構実測図(7)



第40図　一本木後口配石遺構実測図(8)



第41図　一本木後口配石遺構実測図(9)



第42図　一本木後口配石遺構実測図(10)

で一本木後口配石遺構群と呼ばれていたものと一連のものと考えられる。以下、この配石遺構群を一本木後口配石遺構群A、b地点で確認された配石遺構群を一本木後口配石遺構群Bとして分析を試みる。

一本木後口配石遺構群A

先にのべたとおり、一本木後配石遺構群Aはa地点の南西部に延びることはない。c地点で確認されている配石遺構につながるかは、a地点、c地点間の調査が不十分で、現時点では結論を出せない。

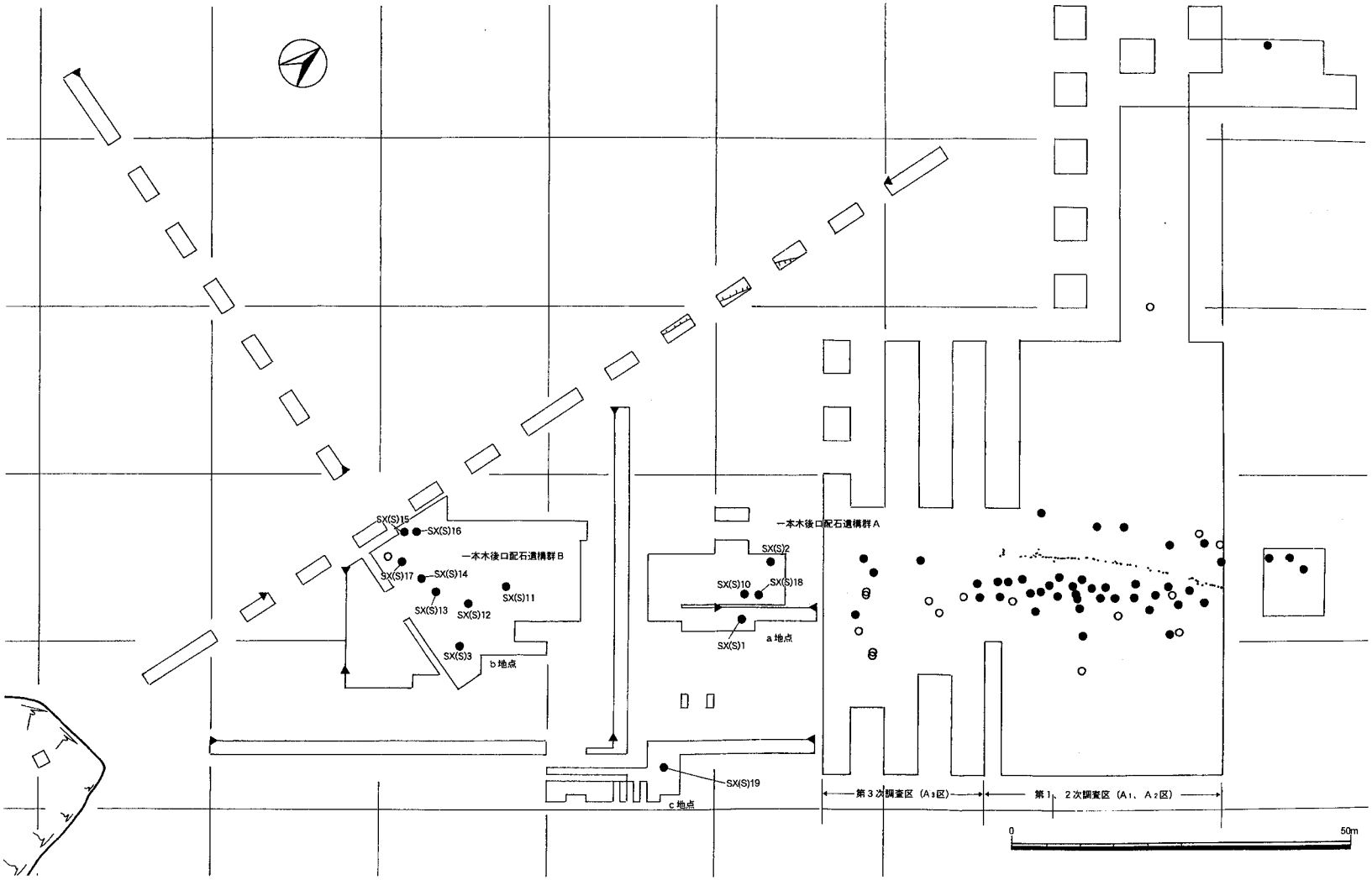
a地点からは、第1、2次調査のA_1区、A_2区で確認された弧状列石や外帯部の配石遺構は確認されていない。a地点北西側の未掘部の存在は否定できないが、a地点で確認された配石遺構が1小塊を形成するがその数が少ないこと、A_3区のZD小塊とa地点との間の未掘部分に予想される小塊とも間隔があいていること等から、a地点の配石群はA_3区の配石群と同様の規則性にあると考えられる。

本配石遺構群の形態、規模等については、来年度に予定している本年度調査地の追調査と配

第２表　一本木後口配石遺構観察表(1)

配石	確認地点	確認面	配石		土坑			長軸方向	赤色	出土遺物	備考
No.			形態	規模(cm)	平面形	規模(cm)	底面積(㎡)		範囲		
1	P－10	Ⅲd	Ⅰa	109×62	楕円	154×104×35	0.78	N-53-E	×	土器片	
2	Q－10	Ⅲd	Ⅰa	(83×64)	楕円	113×82×46	0.54	N-69-E	×		
3	R－12		Ⅲa	(130×95)	楕円	165×98×72	0.70	N-51-E	○	漆塗木製品	
4	R－11	Ⅲd	Ⅰb	(150×90)	楕円	131×90×70	0.67	N-63-E	○		
5	R－11	Ⅲd	Ⅲa	(158×108)	楕円	148×111×73	1.05	N-49-E	○		
6	R－11・12	Ⅲd	Ⅲ	(150×　)	円	152×150×70	1.34		○	土器片	
7	R－12	Ⅲd		(70×　)	楕円	77×61×22	0.28	N-81-W	○		
8	R－13	Ⅲd	Ⅲ	(100×　)	円	101×92×50	0.55		○		
9	B－14・15	Ⅲd		(91×70)							配石遺構群域外
10	P－10	Ⅲd	Ⅰa	115×71	楕円	125×101×61	0.43	N-68-E	×	ミニチュア土器、土器片	
11	R－10	Ⅲd	Ⅲa	(120×115)	円	127×125×70	0.88		○	土器片	ピット7→本配
12	R－10	Ⅲd	Ⅰd	(95×92)	円	108×101×55	0.56	N-1-E	○	カメ棺	
13	R－10	Ⅲd	Ⅲb	(167×152)	楕円	148×124×47	0.96	N-73-W	○	土器片	ピット4→15配→本配
14	Q・R－9・10	Ⅲd	Ⅰc		隅丸方	236×175×53	2.78	N-55-E	○	土器片	ピット1→本配→15・17・18配
15	R－9・10	Ⅲd	Ⅲ	(150×　)	円	184×184×87	2.04		○	土器片	14配・ピット2・4→本配→13配
16	R・S－9	Ⅲd	Ⅰb	98×90	楕円	106×84×52	0.60	N-51-E	○	カメ棺	
17	Q・R－8・9	Ⅲd	Ⅰ	(200×150)	楕円	223×202×72	2.89		○	石鏃13点、土器片	14配→本配→20配
18	R－10	Ⅲd	Ⅲ	(201×104)	楕円	180×114×25	1.59	N-85-E	×	深鉢形土器	14配・23配→本配
19	R－9	Ⅲd	Ⅲ		楕円	175×92×26	1.19	N-7-W	×	土器片	本配→23配→18配
20	R－8・9	Ⅲd	Ⅰc	(198×185)	楕円	157×128×83	1.16	N-82-E	○	土器片	17配→本配
21	R－8	Ⅲd	Ⅰc	(98×94)	楕円	154×132×58	1.18	N-84-E	○		
22	R・S－8	Ⅲd	Ⅲ	138×130	楕円	164×115×67	0.91	N-54-E	○		
23	R－9	Ⅲd			円	124×115×81	0.76		○	土器片	19配→本配→18配
24	P－8	Ⅲd	Ⅰa	(70×50)	楕円	95×63×54	0.34	N-82-W	×	土器片	
25	R－8・9	Ⅲd	Ⅰ		楕円	181×158×60	1.46	N-28-E	○	土器片	
26	S－9	Ⅲd	Ⅱb		円	113×103×55	0.65	(N-33-E)		土器片	
27	P・Q－13	Ⅲd	Ⅰa	(73×67)	楕円	124×98×28	0.78	N-66-E	○		
28	Q－13・14	Ⅲd	Ⅰ(a)		楕円	×92×38			○		
29	R－7・8	Ⅳ上			楕円	123×102×57	0.88	N-76-W	○	土器片	昭和51年X地域7号遺構
30	R－7	Ⅳ上	Ⅲa		楕円	153×119×72	1.24	N-50-E	○	石鏃1点、蓋形土器	昭和51年X地域6号遺構
31	R－8	Ⅲd	Ⅲ		円	132×120×61	0.71		○		
32	R－12	Ⅲd	Ⅰ	(70×54)	円	86×82×44	0.45		×		
33	R・S－11	Ⅲd	Ⅲ		楕円	118×100×51	0.58	N-49-E	×		
34	S－12	Ⅲd			楕円	112×82×35	0.53	N-57-E	○		
35	Q－4・5	Ⅳ上	Ⅰa	(105×73)	楕円	127×94×40	0.77	W－E	○		
36	R・S－6・7	Ⅳ上			円	90×83×50	0.33	(N-38-E)	×	土器片	昭和51年X地域3号遺構
37	R－7	Ⅳ上	Ⅰ		楕円	157×117×64	1.18	N-27-E	○		昭和51年X地域2号遺構
38	欠番										
39	R－7	Ⅳ上	Ⅰa		楕円	88×62×41	0.34	N-55-E	×	土器片	昭和51年X地域5号遺構
40	R－7	Ⅳ上	Ⅱa	(160×102)	楕円	143×105×55	0.93	N-55-W	○	土器片	昭和51年X地域4号遺構
41	Q・R－4	Ⅲd	Ⅰ	(175×　)	楕円	179×146×67	1.50	N-24-E	○	土器片	
42	Q－6	Ⅳ上			円	106×96×33	0.45	N-37-E	×		
43	R－2	Ⅲd	Ⅱc		隅丸方	103×74×38	0.38	N-74-E	×	土器片	
44	S－3	Ⅲd	Ⅰa	(80×75)	楕円	118×82×66	0.50	N-15-E	○	土器片	
45	R－6	Ⅳ上			楕円	113×102×25	0.76	(N-79-E)	×	土器片	

※　第９号配石遺構は一本木後ロ配石遺構群外に位置する。



第43図　一本木後口配石遺構群A・B分布図

第３表　一本木後口配石遺構観察表(2)

配石	確認地点	確認面	配石		土坑			長軸方向	赤色	出土遺物	備考
No.			形態	規模(cm)	平面形	規模(cm)	底面積(m²)		範囲		
4-1	S - 140	Ⅱ層下位・Ⅲd層	Ⅰa	132×80	楕円形	153×　×65	—	N-52-W	なし	なし	一本木後ロA トレンチ掘
4-2	Q - 141・142	Ⅱ層下位・Ⅲd層	—	—	未確認	—	—	—	—	なし	一本木後ロB 未掘
4-3	T - 132	Ⅲa層・Ⅲd層	Ⅰa	135×83	未確認	—	—	N-71-E	—	なし	一本木後ロB 未掘
4-10	R - 140	Ⅱ層下位・Ⅲd層	Ⅰb	73×59	未確認	—	—	N-48-W	—	なし	一本木後ロA トレンチ掘
4-11	Q - 133	Ⅲa層・Ⅲd層	Ⅱa	—	未確認	—	—	—	—	なし	一本木後ロB 未掘
4-12	Q - 132	Ⅱ層中位・Ⅲd層	Ⅰb	105×82	未確認	—	—	N-13-E	—	なし	一本木後ロB 未掘
4-13	Q - 131	Ⅱ層上位・Ⅲd下位	Ⅰa	120×57	未確認	—	—	N-91-E	—	なし	一本木後ロB 未掘
4-14	Q - 131	Ⅱ層上位・Ⅲd層	Ⅰa	140×90	未確認	—	—	N-73-W	—	なし	一本木後ロB 未掘
4-15	P - 130	Ⅲa層・Ⅲd層	Ⅰa	125×65	未確認	—	—	N-18-E	—	なし	一本木後ロB 未掘
4-16	P - 130・131	Ⅱ層上位・Ⅲd下位	Ⅰc	165×150	未確認	—	—	—	—	なし	一本木後ロB 未掘
4-17	Q - 130	Ⅲa層・Ⅲd層	Ⅰa又はⅠb	70×60	有り 楕円形	88×72×	—	N-6-W	—	なし	一本木後ロB 未掘 下部土坑についてはプランを確認
4-18	R - 141	Ⅲa層・Ⅲd層	—	—	未確認	—	—	—	—	なし	一本木後ロA 未掘
4-19	W - 138	Ⅲd層	Ⅰa	(130)　× (94)	未確認	—	—	N-14-W	—	なし	一本木後ロA 未掘 昭和50年度No.43にあたる

※　長軸方向は、下部土坑未掘のため配石遺構の長軸方向とした

石遺構群北東側隣接地の調査結果を加え、再度考察したい。

一本木後ロ配石遺構群Ｂ

ｂ地点で確認された配石遺構は８基で、同地点中央から西部にかけて分布している。北側や南側に広がることはない。西側にも小沢があり大きく広がるとは考えられない。配石の配置については環状や弧状、直線的といった規則性も考えられない。

配石遺構の形態については、Ⅰａ類が５基、Ⅰａ類あるいはⅠｂ類と考えられるもの、Ⅰｃ類、Ⅱａ類と考えられるものが、それぞれ１基である。

このようなことから、ｂ地点の一本木後ロ配石遺構群Ｂは、これまでの環状列石や配石遺構群とは形態が異なり、径20m程の範囲に群集する配石遺構群と考えられる。　　（秋元信夫）

2．道路状遺構について

(1) 道路状遺構の構造と規模

これまでの調査によって、道路状遺構と判断された場所は５ヶ所である。この発見状況と構造・規模を列記する。

A_1区　第１次発掘調査、県道に近いＢ－13～15、Ｃ－12～16グリッドに位置する。基本層序第Ⅱｂ層直下より非常に固く絞まった赤みを帯びた暗褐色土を確認した。硬く絞まった部分を移植ベラで叩くと金属音がするほどであった。

道路状遺構は三叉路となっており、その幅は２ｍ～3.5ｍを測る。

A_4区　第５トレンチ東端（Ｎ－129グリッド）、第４トレンチ北寄り（Ｈ－１143・Ｉ－140・Ｊ－138グリッド）で確認された。いずれの地点も、基本層序第Ⅱｂ層直下に非常に硬く踏み固められた赤味を帯びた暗褐色土を確認した。

B_2区　野中堂環状列石の南東側隣接地Ｑ－93グリッドを中心に南北に延びた轍を確認した。轍は地山まで達し、長さ約25m、幅3.5mを測る。

Ａ－25　大湯ストーンサークル館排水施設設置に伴う調査によって確認した。基本層序第Ⅱｂ層直下で非常に硬く絞まった暗褐色土を確認した。幅3.7mを測る。

(2) 巡検使道・旧道と確認された道路状遺構

巡検使とは「将軍が変るたびに幕臣三人一組となって諸国へ派遣され、藩政や民情を視察」することを目的としていた。江戸時代に街道が整備された要因としては、この巡検使の下向があったと言われている。

鹿角市内を通る街道としては、鹿角街道、来満街道、濁川街道がある。鹿角街道は大館市早口岩瀬付近で羽州街道から分岐して板沢、仁井田、扇田、十二所を経て南部領に入り、松ノ木、花輪、田山を抜けて盛岡へ通じる街道である。来満街道は、松ノ木から分岐して毛馬内・大湯を抜け青森県三戸に通じる脇街道、さらに濁川街道は、毛馬内から分岐して小坂を抜け青森県碇ガ関村に通じる脇街道である。

これらの主要街道のほかに「奥州南部領図十郡（注１）」には各村々を結ぶ脇街道が描き出されており、花輪から大湯に通じる往来も記されている。この往来は花輪を出、乳牛、柴内、小平を抜け、大湯環状列石の南側約500ｍに位置する「猿賀神社」の脇を抜け大湯に至る道筋である。

『鹿角市史第Ⅱ巻下』によると「即ち前日の宿泊地三戸郡関村を出立し、来満山中、大柴峠を越え折戸から鹿角郡大湯へ入るを例とした。大湯宿泊の翌日、数珠かけ地蔵堂のあった在郷坂を上がり宮野平村、倉沢村などの中通台地へ出、野中観音堂の前を猿ヶ野村へ至った。ここから低地に下り浜田村を通り、古川村錦木塚に御茶屋を設けて休息した」という記載があり、

さらにこの道筋を「天下道」と称したことも書き添えられている。

記載されている在郷坂は、大湯市街地から大湯環状列石へ通じる県道の一部となっており、二本柳へ向かう交差点の路肩には一里塚（市指定）が残されている。また、宮野平村・倉沢村はこの在郷坂より大湯環状列石へ向った現在の宮野平・倉沢集落であり、野中観音堂は地名から野中堂環状列石南側に鎮座する「駒形神社」、猿ヶ野村は現在の「申ヶ野」地区である。

これから推察すると、この「天下道」は野中堂環状列石の隣接地、「駒形神社」の前を過ぎ猿ヶ野村へと続いていることが解る。

第46図は、明治後半に作成された地籍切絵図、昭和50年に作成した地形図、これまでの発掘調査の成果を重ね合わせていった図である。

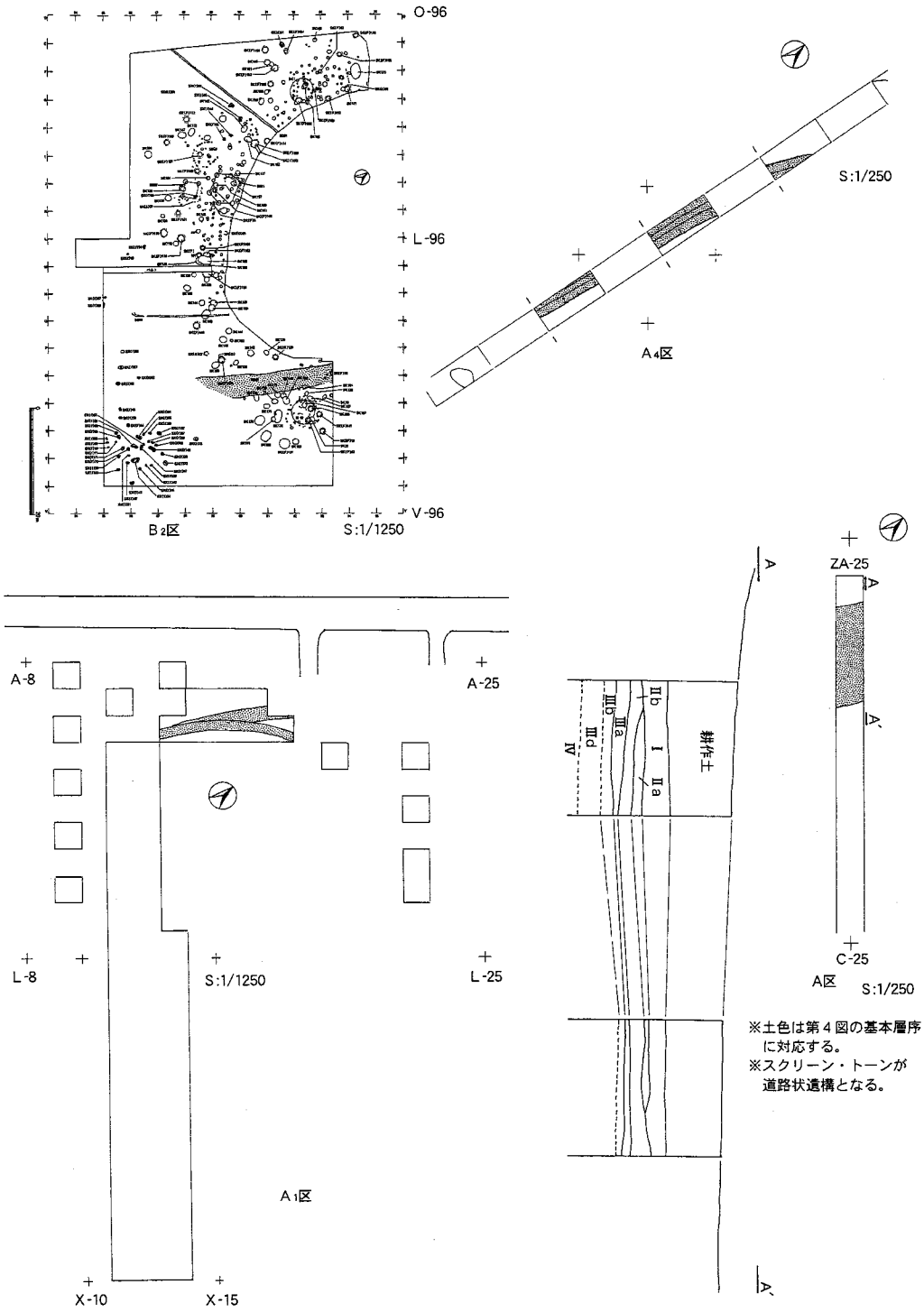
市史に見られる「天下道」と称する道筋は、名称が示すように明治後半でも主要な道筋であり、赤線で太く示されているものと推定される。その道筋は、野中観音前、野中堂環状列石南東側、現在の大湯ストーンサークル館隣接地を抜け、一本木集落・倉沢集落に続いていたものと推察され、その位置から野中堂環状列石南東側で確認された道路状遺構はまさしく、この「天下道」といってよいものといえる。

では、第46図で示した青線は何を意味するのであろうか。A$_5$区（第22次調査）で二ヶ所、A$_1$区（第１次調査）、さらに大湯ストーンサークル館排水施設設置に伴う試掘調査で、大湯浮石層直下が非常に固く踏みしめられた場所が確認された。これを結んでいくと緩やかなカーブを描き、その道筋は野中堂環状列石の南東側隣接地で「天下道」と合流するか、もしくは沢に沿って台地縁辺まで延び台地縁の細い道筋に合流する可能性がある。

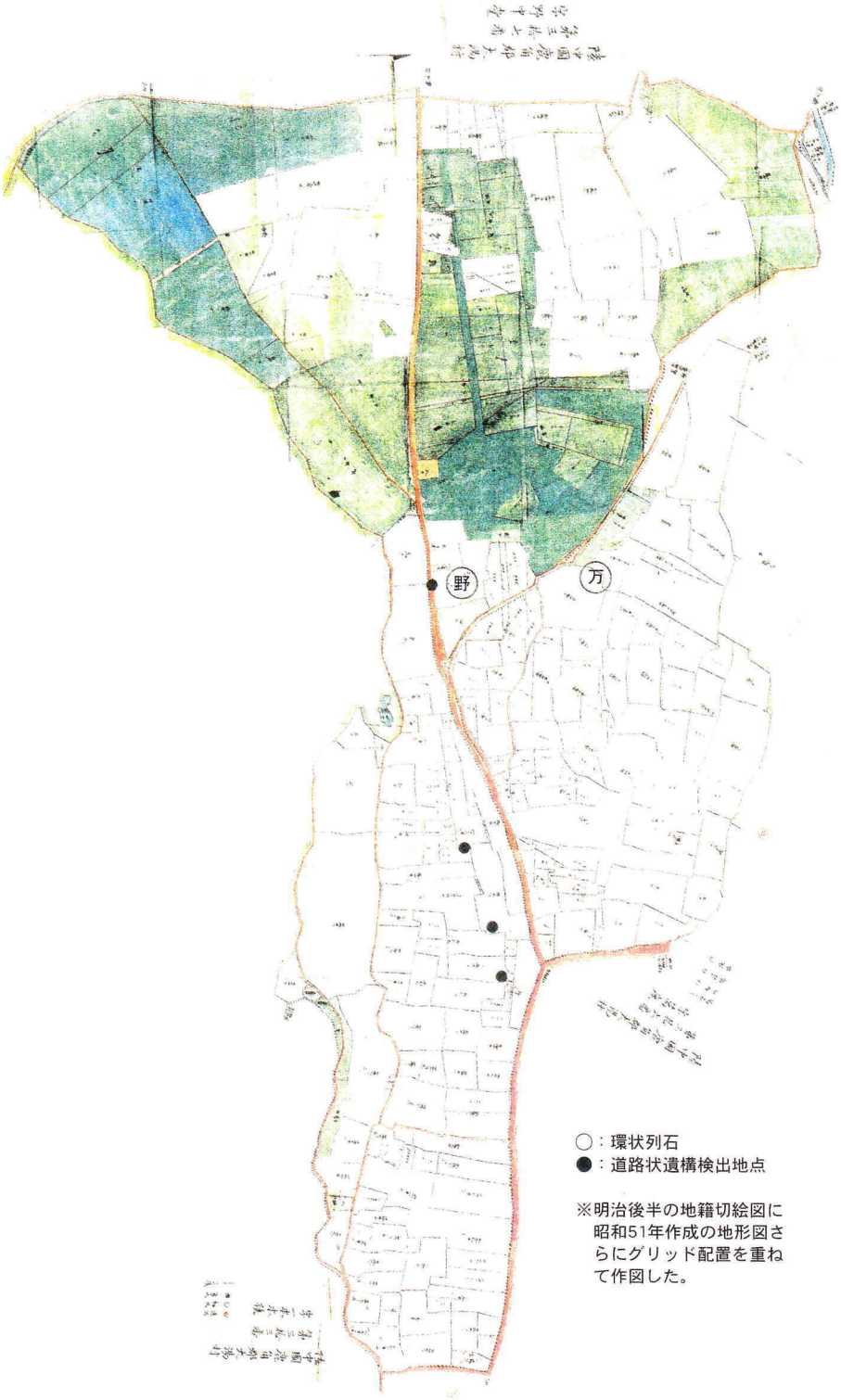
しかし、この道筋は、明治後半の地籍切絵図には示されてはおらず、明治後半には廃棄されていたことが切絵図から読み取ることができる。この道筋が使用された時期については、その確認面から大湯浮石層直下であること、さらに大湯浮石層は史跡全般で見られるようなノーマルな堆積状況でこの場所を覆っていたことから大湯浮石降下以前まで使用されていた可能性があり、その所産は平安時代前半の頃まで遡ることが可能である。

（注１）　南部藩では正保二年に領内絵図を書き上げているが、元禄十年に幕府の命により改定し、同十二年に再度書き上げている。この絵図は、盛岡市中央公民館所蔵の正保四年と元禄期の総絵図との比較から、元禄期のものを書き写したものと考えられる。絵図には藩境、郡名、村名、街道、脇街道、一里塚や要所要所にはその土地で起こった事件が記され、元禄期の南部領の実態を最も正確に伝えている。この絵図は、藩境の守備のため配置された盛岡藩譜代であった大湯北氏に与えられたものと考えられる。平成12年に市指定有形文化財に指定されている。

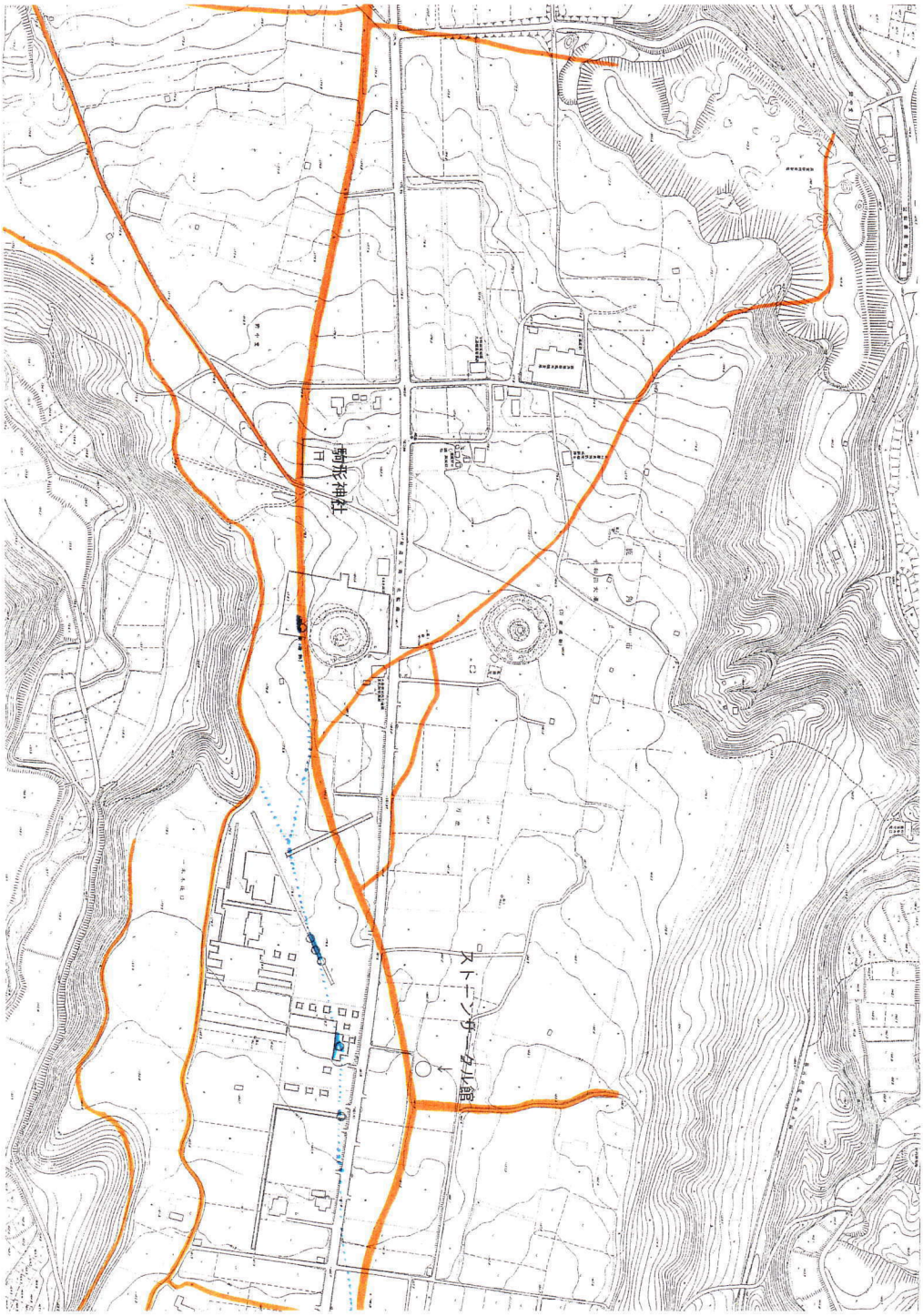
（藤井安正）



第44図　道路状遺構実測図(2)



第45図　大湯環状列石周辺の地籍切絵図



※地形図、調査グリッド配置図、地籍切絵図
をもとに作図した。

赤：明治後半の赤道
青：新たに発見された古道
（一部推定）

第46図　大湯環状列石周辺の古道

第Ⅵ章　調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座、野中堂、一本木後ロに所在し、万座、野中堂の２つの環状列石を中心とする大規模な「マツリと祈りの場」として縄文時代後期前葉から中葉にかけてつくられた遺跡である。これまでの調査で、万座・野中堂の２つの環状列石と一本木後ロ配石遺構群などの大規模な遺構が検出されているほか、配石遺構・建物跡などの遺構が多く検出されている。

今年度の調査区は史跡の北東部で、周辺には昭和59年からの第１次～３次調査で一本木後ロ配石遺構群が確認されている。今年度の調査区であるＡ$_4$区、Ａ$_5$区は、この一本木後ロ配石遺構群の南西側隣接地にあたることから、配石遺構群が本調査区にのびて分布する可能性が十分に考えられていた。このことから、今年度の調査は、一本木後ロ配石遺構群が南西側に分布するのか、その分布状況の確認を行うことを主な目的とし調査を行った。また、調査区の南端には湧水地があることから縁辺部における縄文時代の遺構の有無を確認した。

調査の結果、Ａ$_4$区で確認された遺構は配石遺構13基、土坑１基、焼土遺構40基、道路状遺構１条であり、Ａ$_5$区で確認された遺構は焼土遺構１基であった。

調査区の地形については、主に南側の沢に向かって下っていることが確認された。しかし、その傾斜は予想していたよりも緩やかであり、配石遺構周辺ではほぼ平坦となっている。また、南端に存在する湧水地周辺からは焼土遺構が検出されている。木の根などによる撹乱が激しく、縄文時代の層が残存する区域は少ないが、縄文時代の人々が利用した痕跡を確認することができた。

配石遺構はＡ$_1$～Ａ$_3$区との隣接部にあたる調査区北東部ａ地点と調査区中央部ｂ地点で確認されている。ａ地点の配石遺構については一本木後ロ配石遺構群の一部であると考えられるが、ｂ地点の配石遺構については一本木後ロとは異なる形態の配石遺構群である可能性が高いと考えられる。（第Ⅴ章１参照）しかしながら、調査が不十分であったこともあり、各配石遺構の下部土坑について、また配石遺構群の分布について十分な成果をあげることができなかった。

来年度調査区は一本木後ロ配石遺構の北東側への分布状況の解明を目的とする調査を行う予定である。今年度の成果とあわせて、一本木後ロ配石遺構群の姿を明らかにできるよう、下部土坑や弧状列石の有無、小塊の存在などの課題についても調査を行いたい。　　（三浦貴子）

参　考　文　献

鈴木克彦　『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣　2001年

成田滋彦　「青森県の土器」『縄文文化の研究４　縄文土器Ⅱ』雄山閣　1981年

高橋忠彦　「秋田県の縄文時代後期の土器」『研究紀要』第４号
秋田県埋蔵文化財センター　1989年

秋田県　『秋田県総合地質図幅　花輪』　1973年

秋田県教育委員会　『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ
ー高屋館跡ー』　1990年

秋田県教育委員会　『圃場整備地域内遺跡分布調査報告書』　1979年

十和田町教育委員会　『黒森山麓縄文期竪穴群』　1971年

鹿角市教育委員会　『下内野Ⅱ遺跡』　2000年

鹿角市教育委員会　『秋田県鹿角市遺跡詳細分布調査報告書』　1990年

鹿角市教育委員会　『下砂沢遺跡発掘調査報告書』　1990年

文化財保護協会　『大湯町環状列石』　1953年

鹿角市教育委員会　『昭和50年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』　1976年

鹿角市教育委員会　『昭和51年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』　1977年

鹿角市教育委員会　『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』(1)～(6)　1985年～1990年

鹿角市教育委員会　『大湯環状列石発掘調査報告書』(7)(8)　1991年、1992年

鹿角市教育委員会　『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』(9)～(21)　1993年～2005年

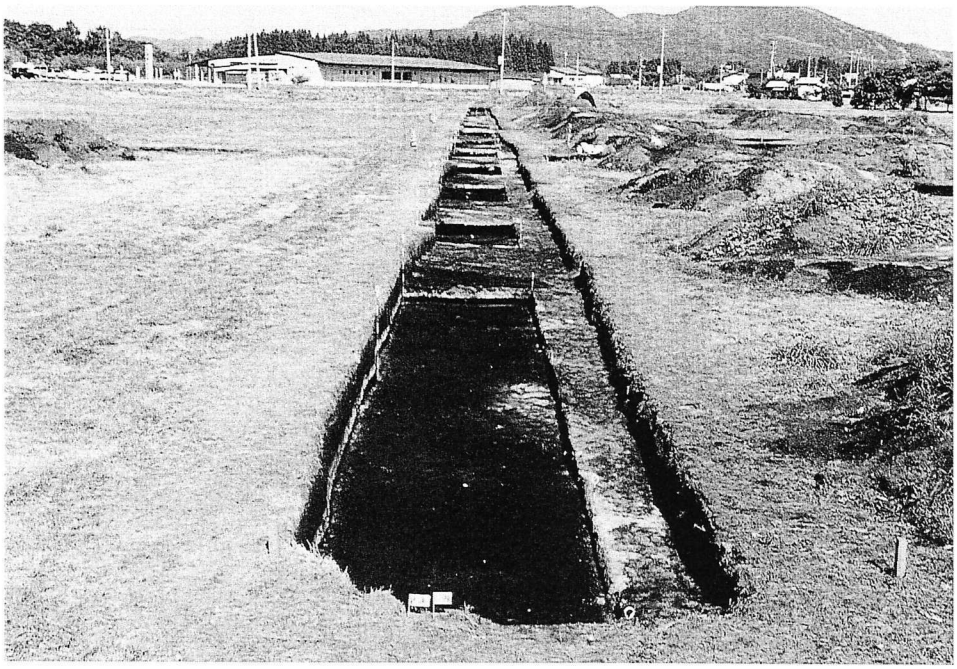
鹿角市教育委員会　『特別史跡大湯環状列石（Ⅰ）』　2005年

鹿角市　『鹿角市史』第Ⅱ巻下　1987年

PL1　大湯環状列石(1)

写真中央に県道を挟み、野中堂環状列石と万座環状列石がみえる。平成14年撮影
写真左下が本年度の調査区

PL2　大湯環状列石(2)

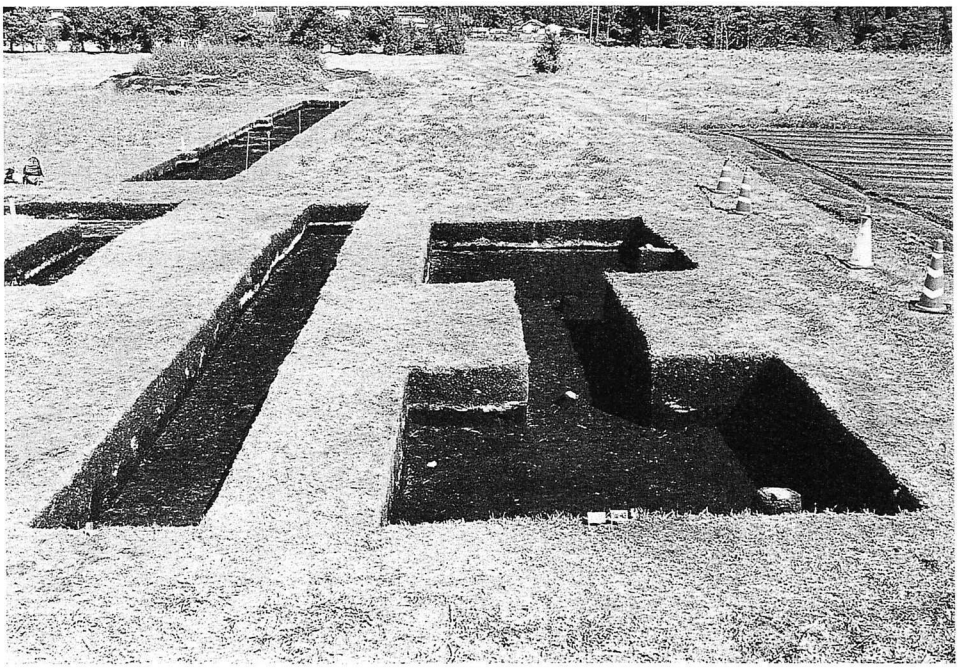


第４トレンチ

第５トレンチ

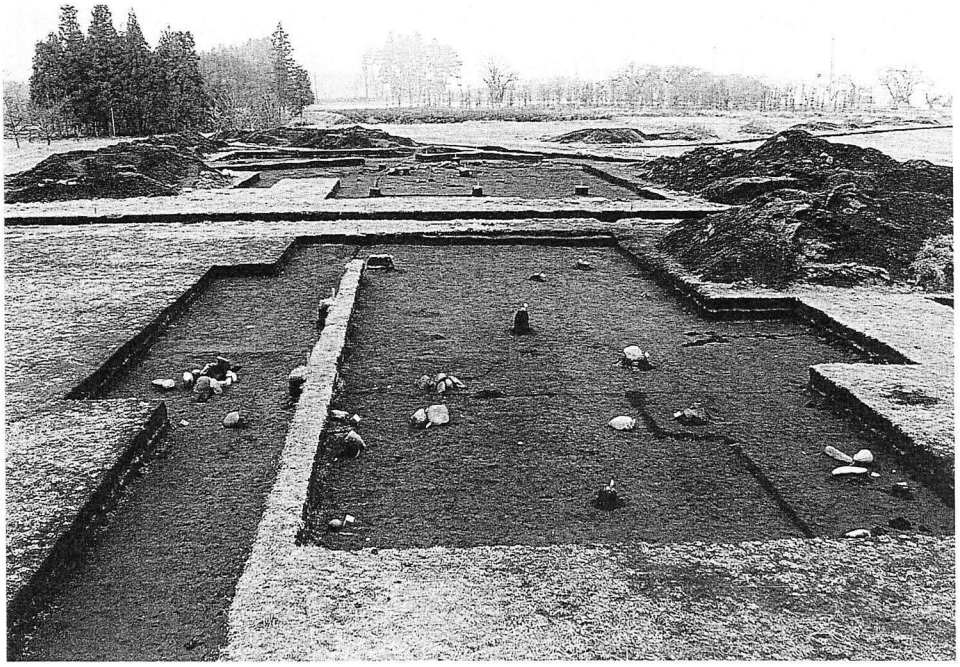
PL3　調 査 区 近 景（1）

第６トレンチ

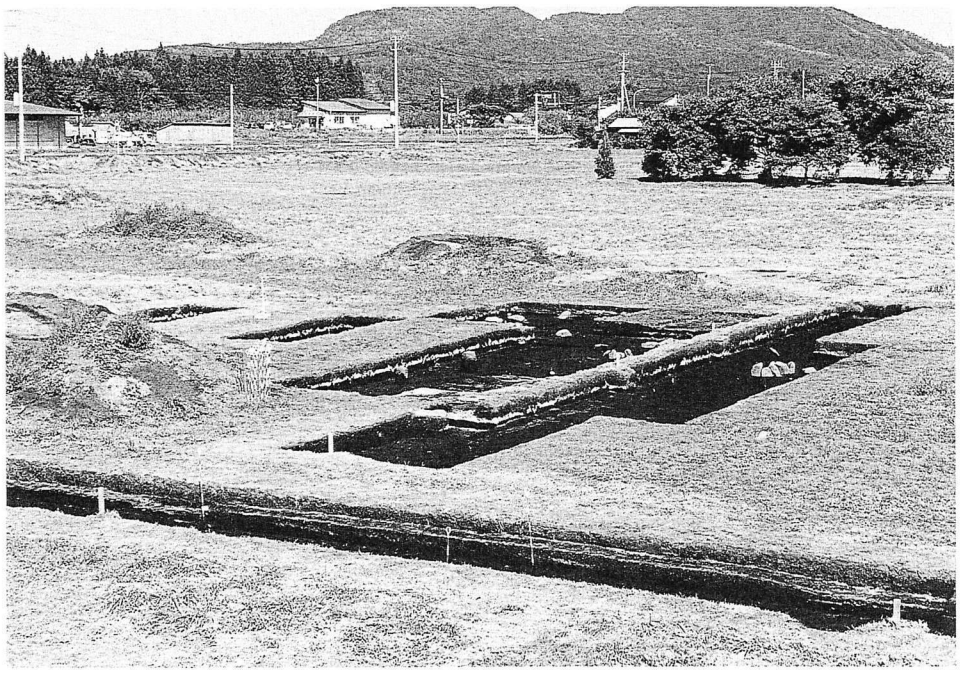


第７トレンチ・調査ｃ地点

PL4　調 査 区 近 景 (2)



調査ａ地点



調査ａ地点・第２トレンチ

PL5　調 査 区 近 景 (3)

調査ａ地点近景

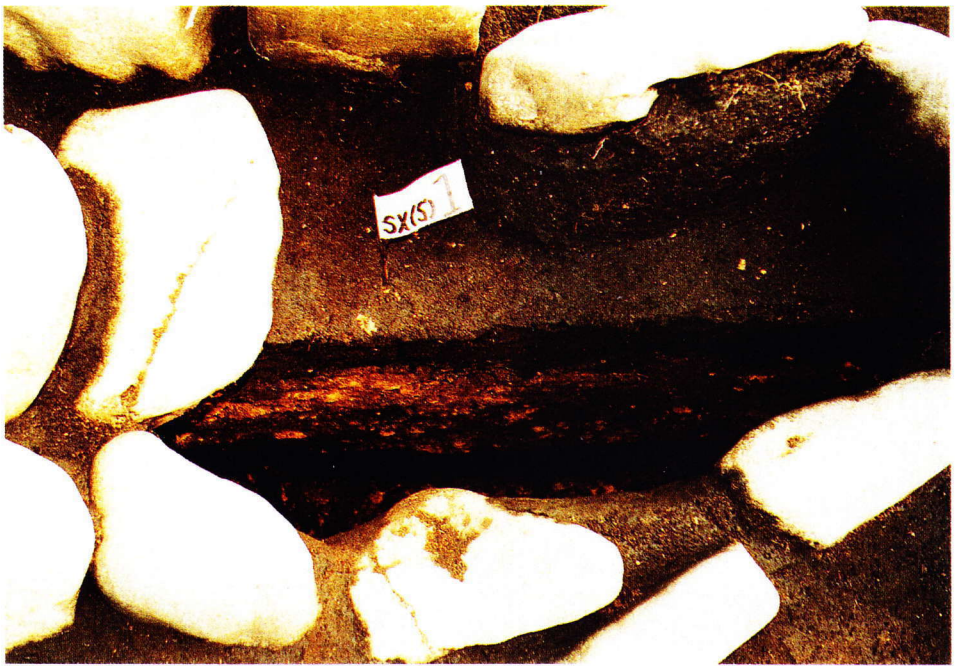
調査ｂ地点

PL6　調 査 区 近 景 (4)

SX(S)01

SX(S)01

PL7　配　石　遺　構(1)



SX(S)01

SX(S)02

PL8　配　石　遺　構(2)

SX(S)03

SX(S)10

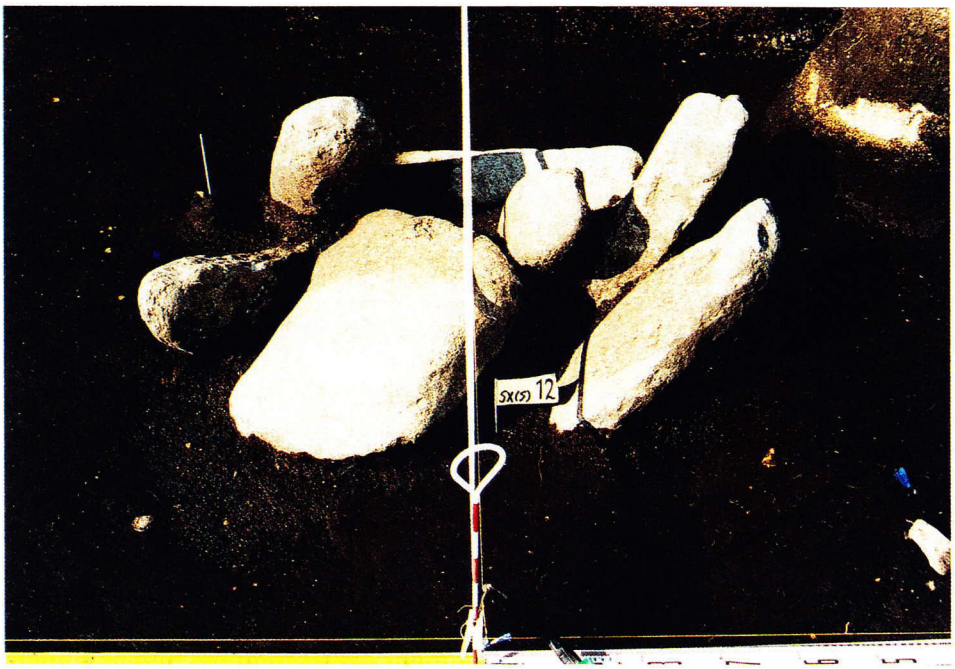
PL9　配　石　遺　構(3)

SX(S)10

SX(S)10

PL10　配　石　遺　構(4)

SX(S)11



SX(S)12

PL11　配　石　遺　構(5)

SX(S)12

SX(S)13

PL12　配　石　遺　構(6)

SX(S)13

SX(S)14

PL13　配　石　遺　構(7)

SX(S)14

SX(S)15

PL14　配　石　遺　構(8)

SX(S)15

SX(S)16

PL15　配　石　遺　構(9)

SX(S)16

SX(S)16

PL16 配 石 遺 構(10)

SX(S)15・16

SX(S)17

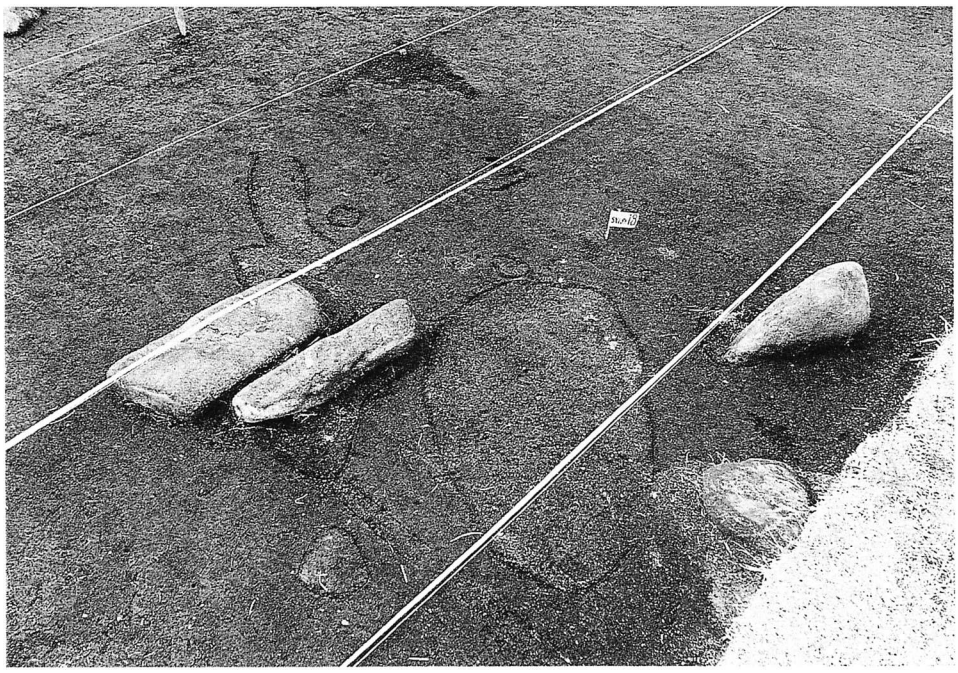
PL17　配　石　遺　構(11)

SX(S)17

SX(S)18

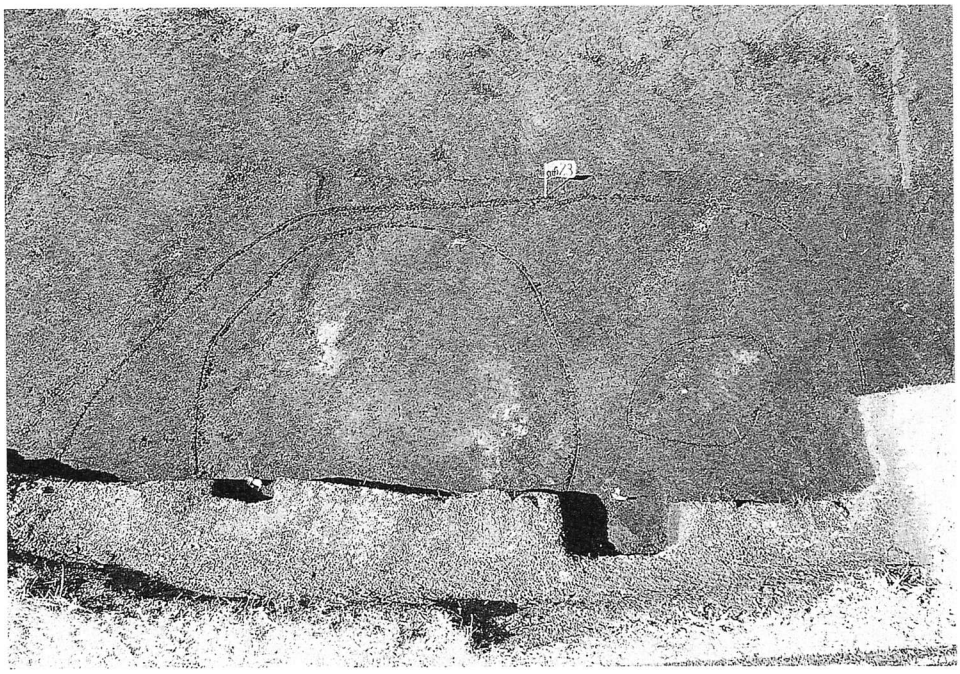
PL18　配　石　遺　構(12)

SK01

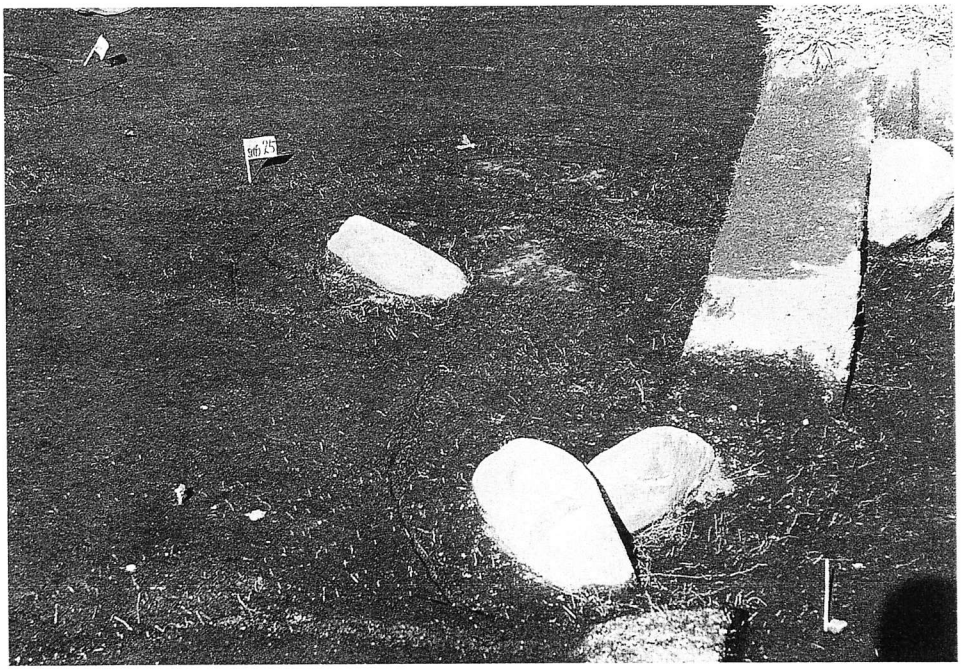


SX(f)18

PL19　土坑・焼土遺構(1)



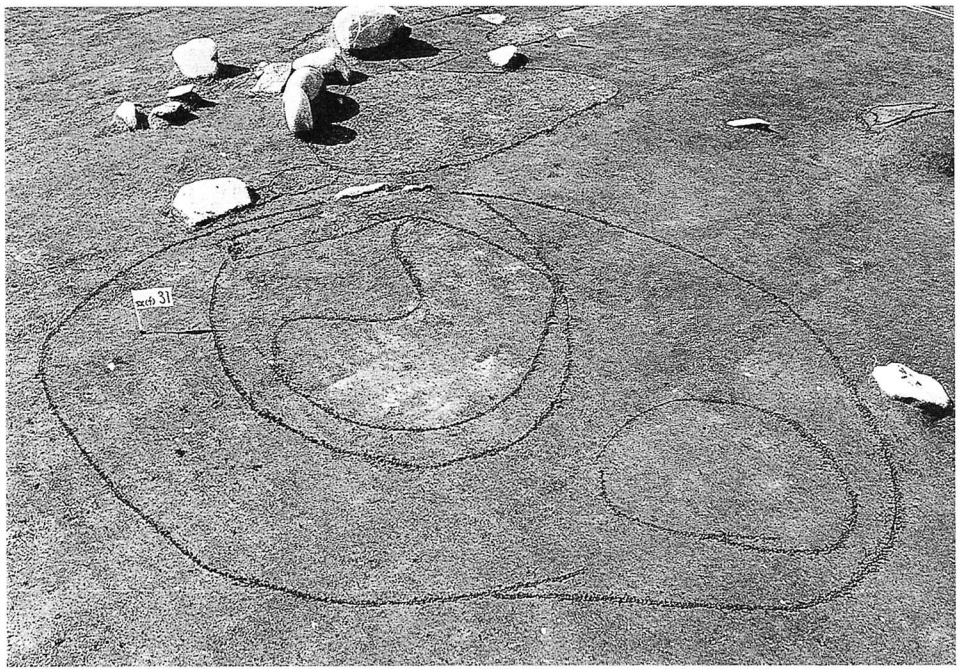
SX(f)23



SX(f)24

PL20　焼　土　遺　構(2)

SX(f)26



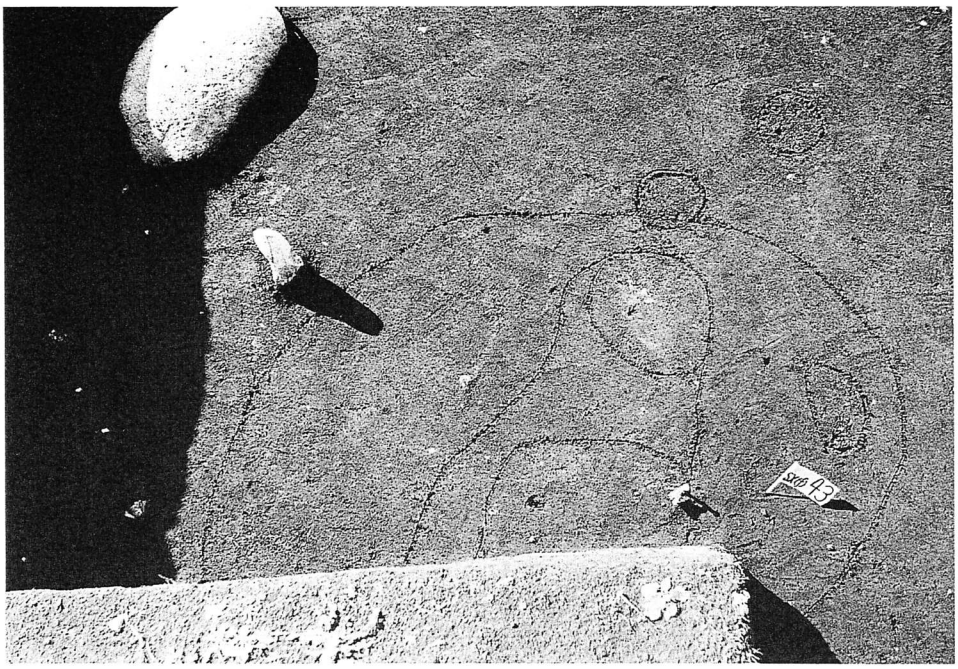
SX(f)31

PL21　焼　土　遺　構(3)

SX(f)32

SX(f)33

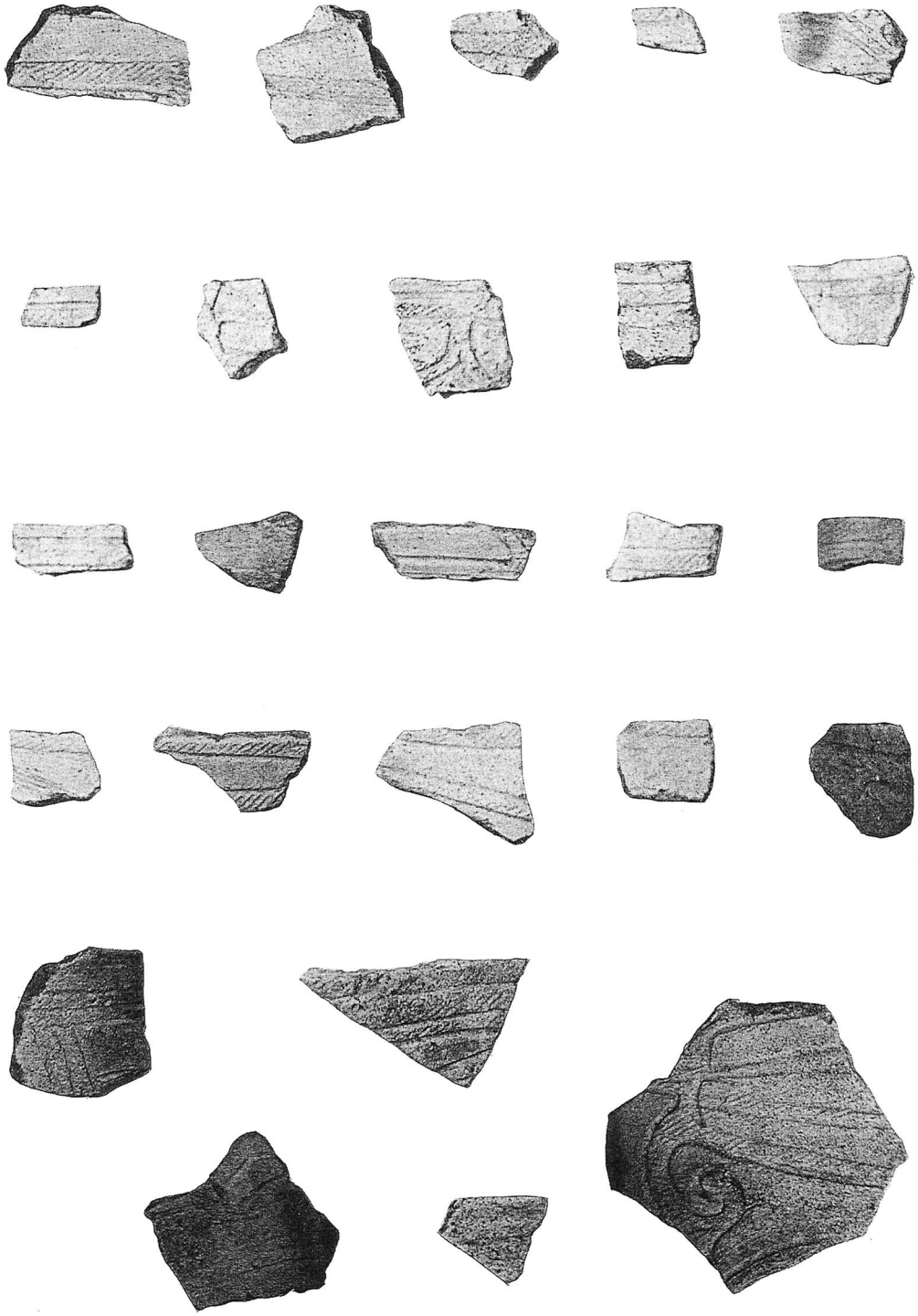
PL22　焼　土　遺　構(4)



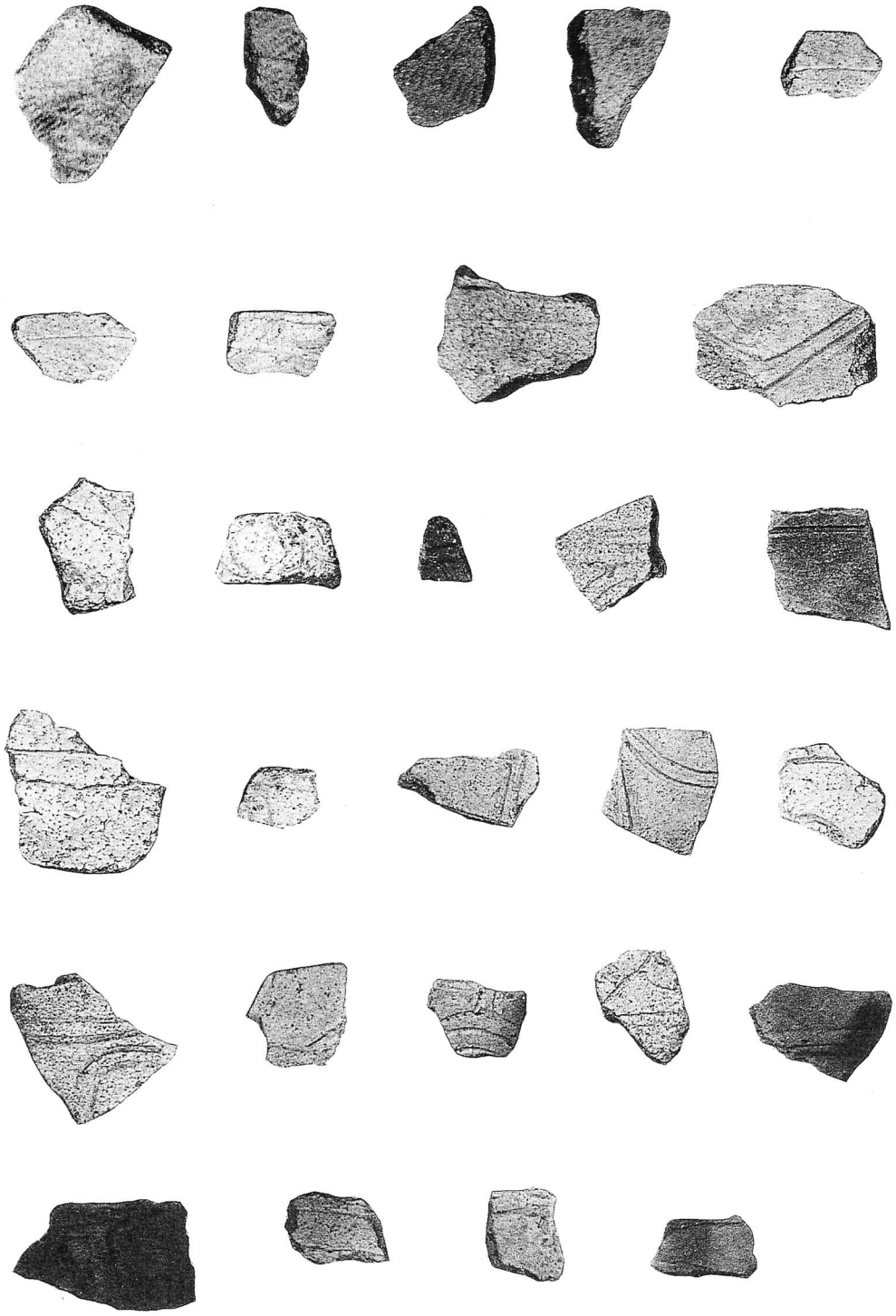
SX(f)43

SM01

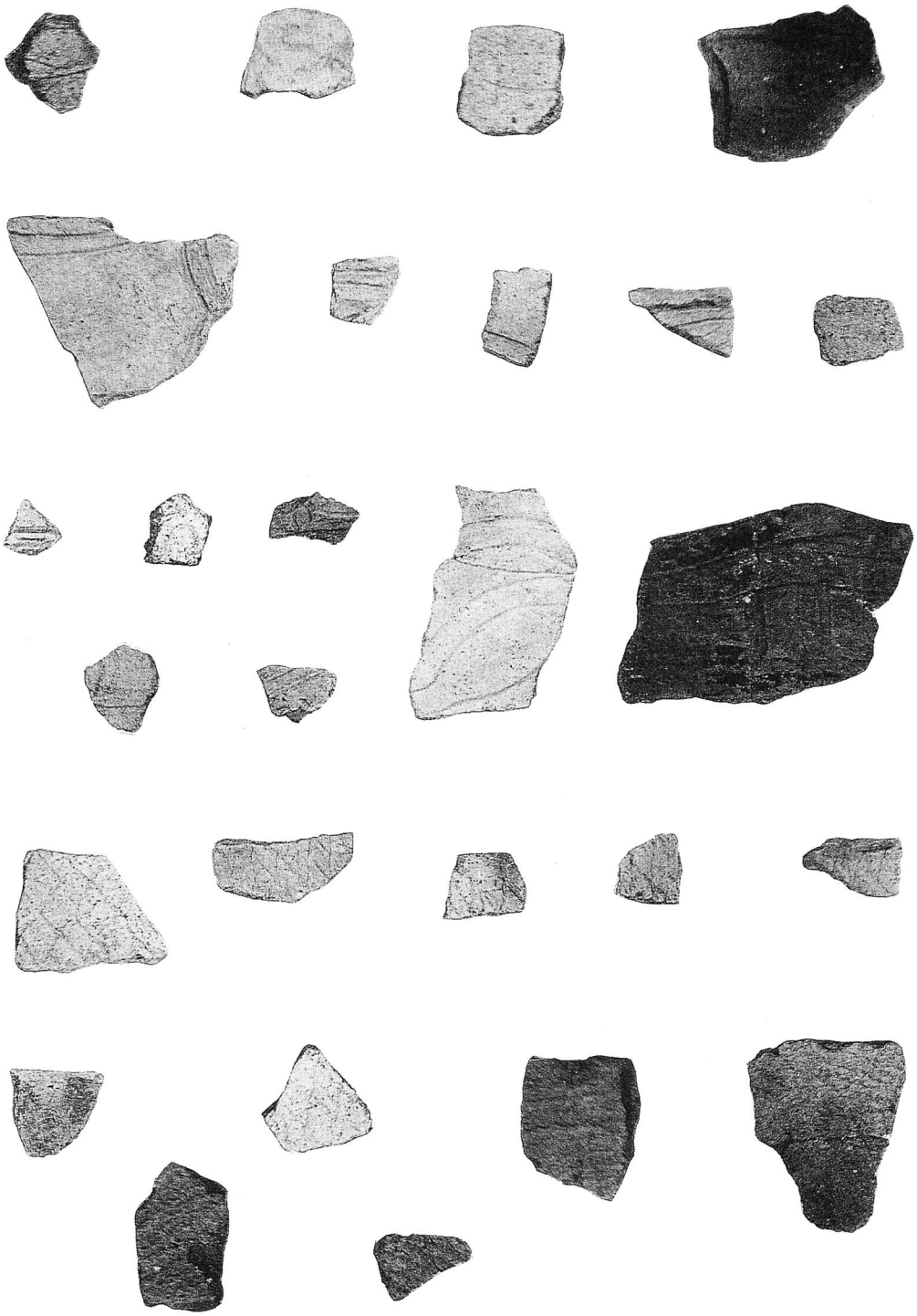
PL23　焼土遺構(5)・道路状遺構(1)



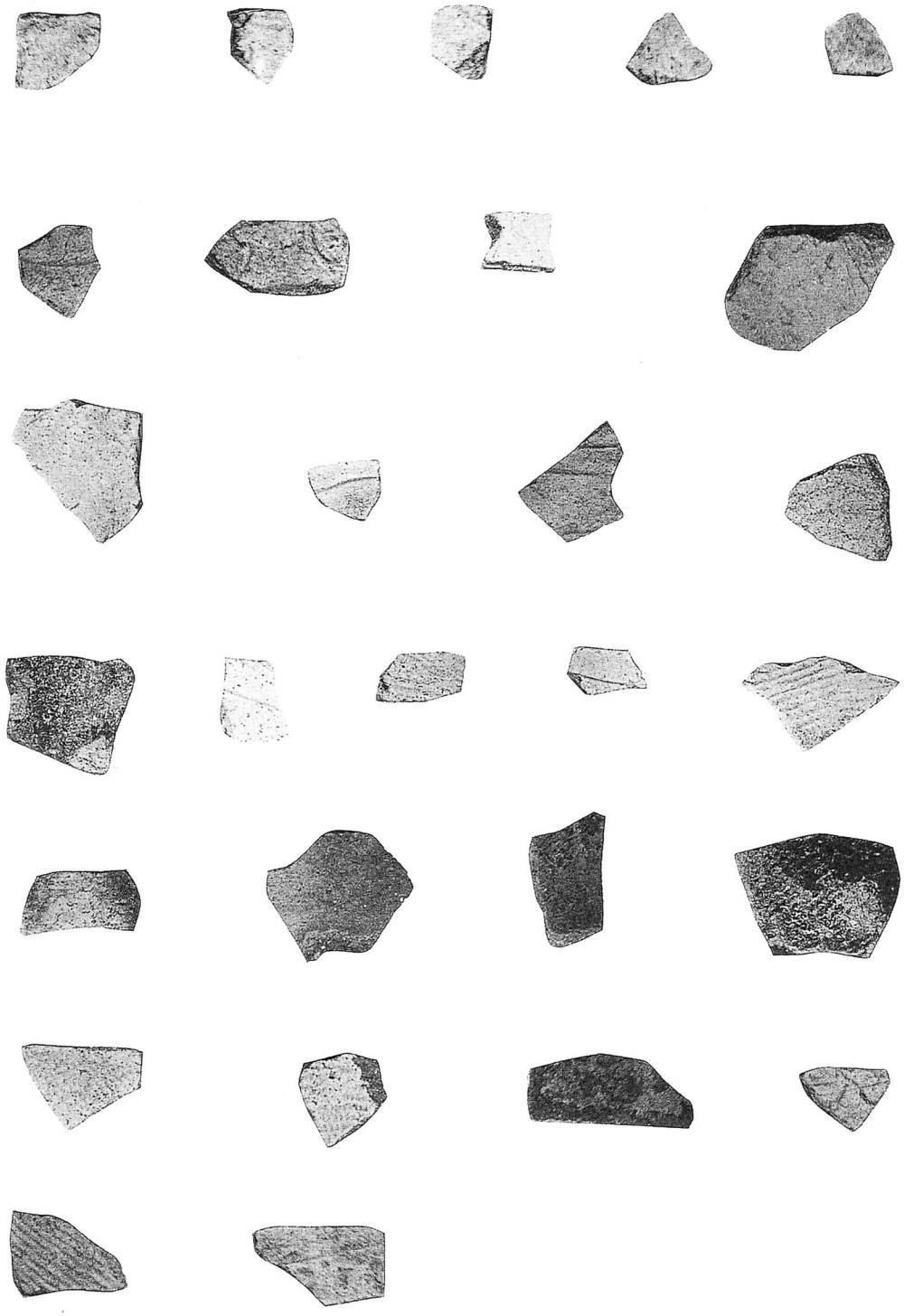
PL24　出　土　土　器(1)



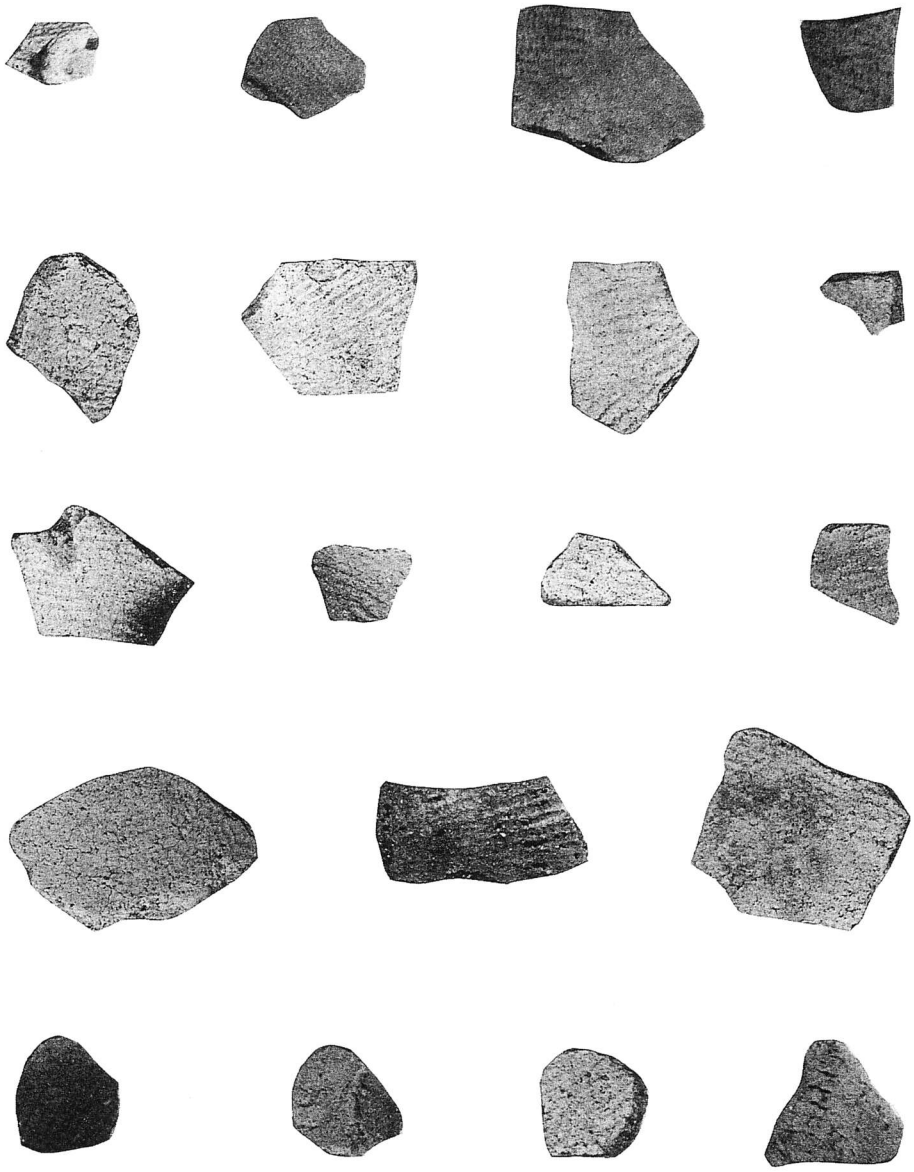
PL25 出 土 土 器(2)



PL26　出　土　土　器(3)

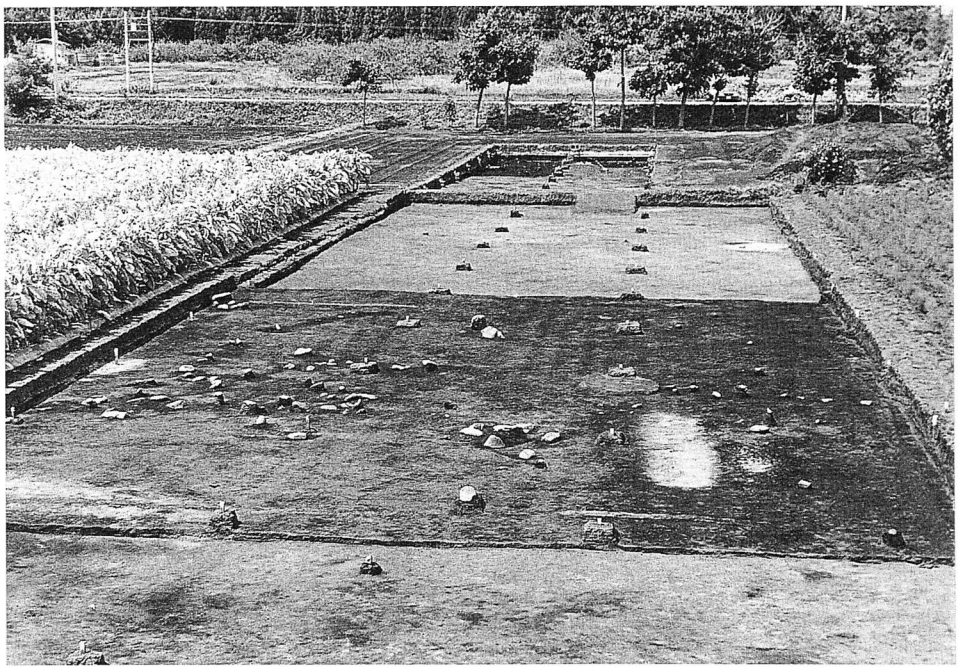


PL27　出　土　土　器(4)

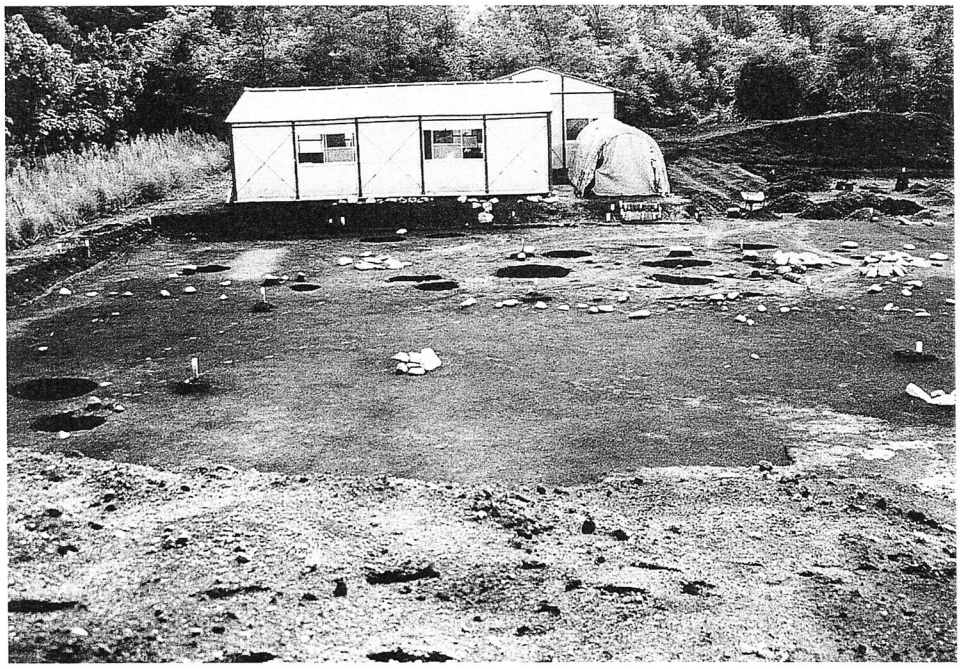


PL28　出土土器(5)・土製品

PL29 出 土 土 器



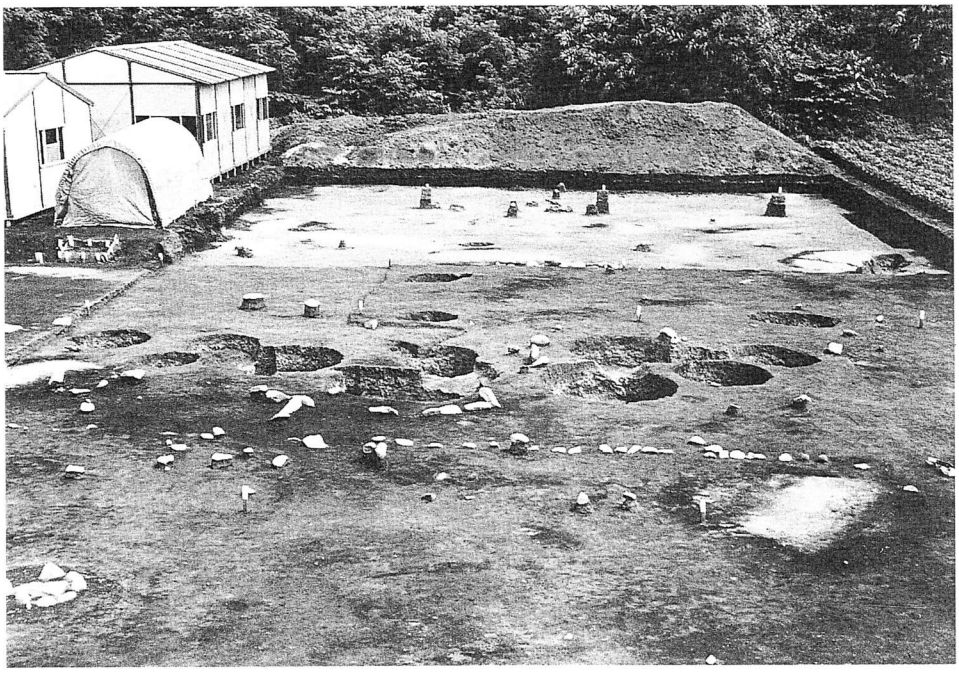
Ａ１区配石遺構分布状況



Ａ１区配石遺構分布状況

PL30　昭和59年度調査区（Ａ１区）

Ａ２区配石遺構分布状況



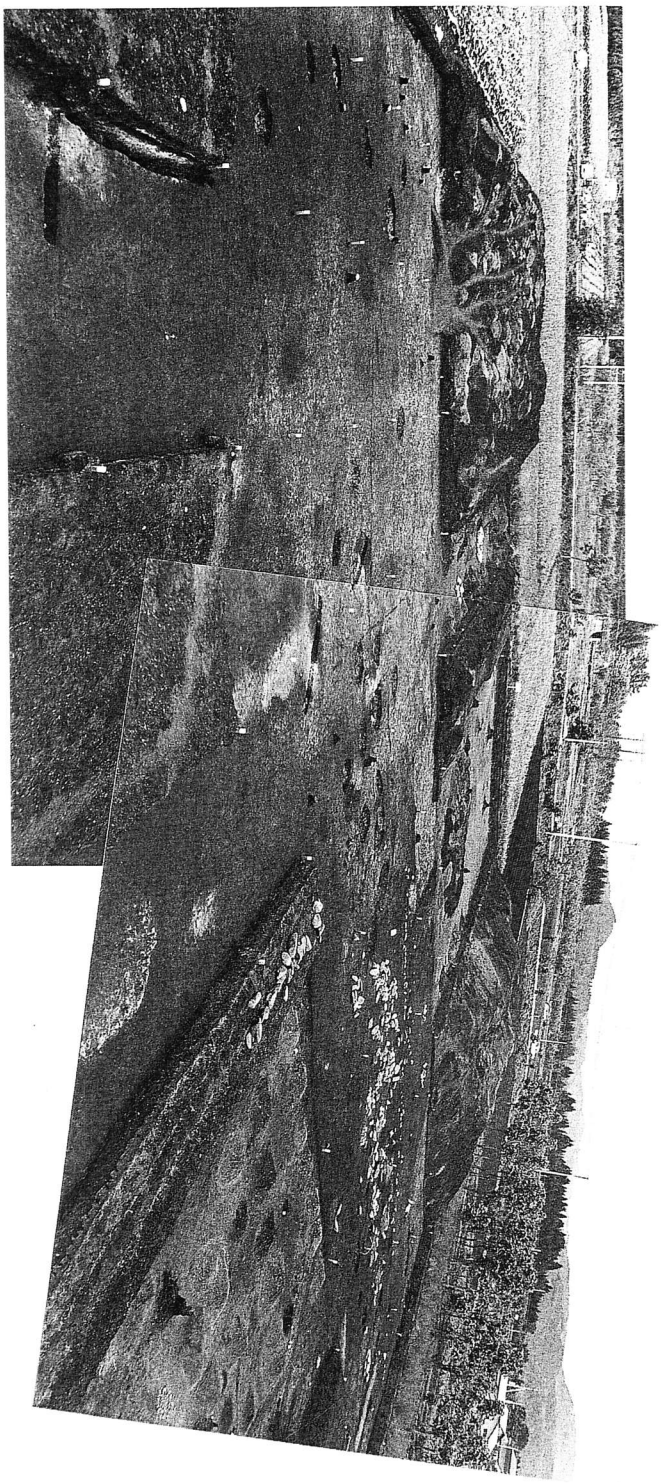
Ａ２区配石遺構の下部土坑

PL31　昭和60年度調査区（Ａ２区）

Ａ２区・３区配石遺構分布状況

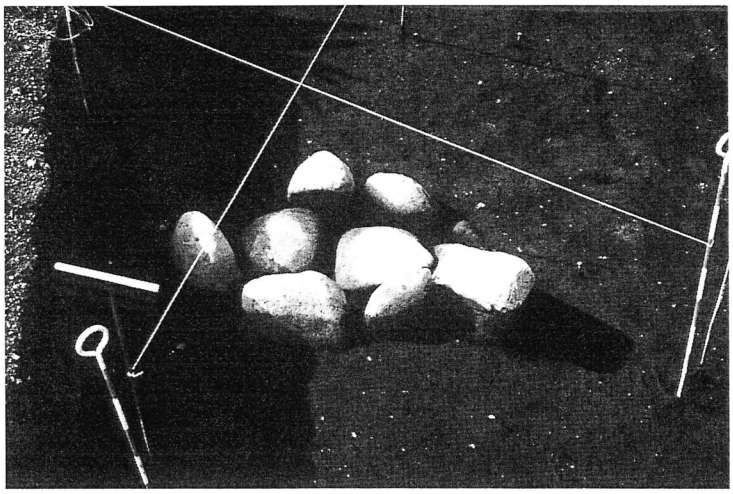
Ａ２区・３区配石遺構分布状況

PL32　昭和60年・61年度調査区(Ａ２区・３区)

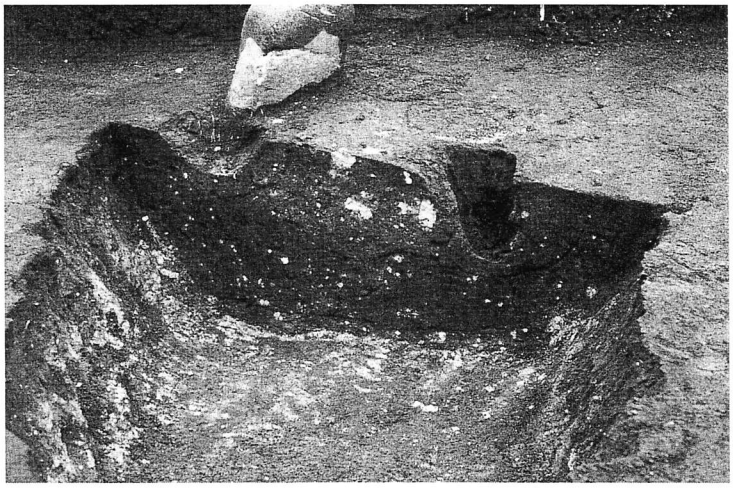


PL33　一本木後口配石遺構群(1)

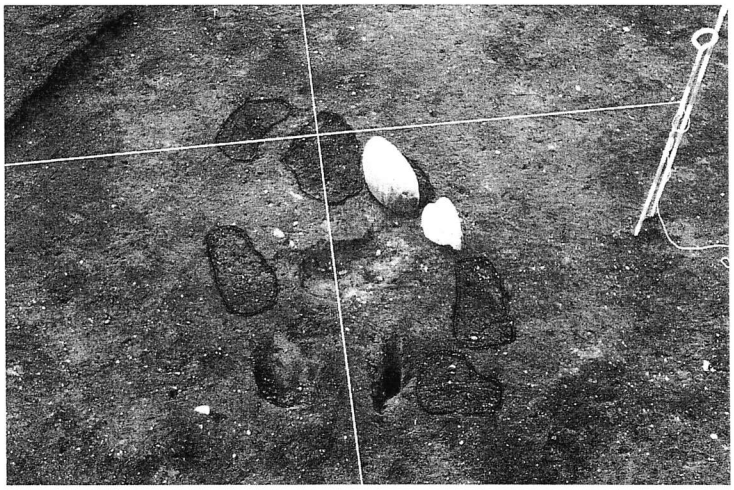
SX(S)01



SX(S)01

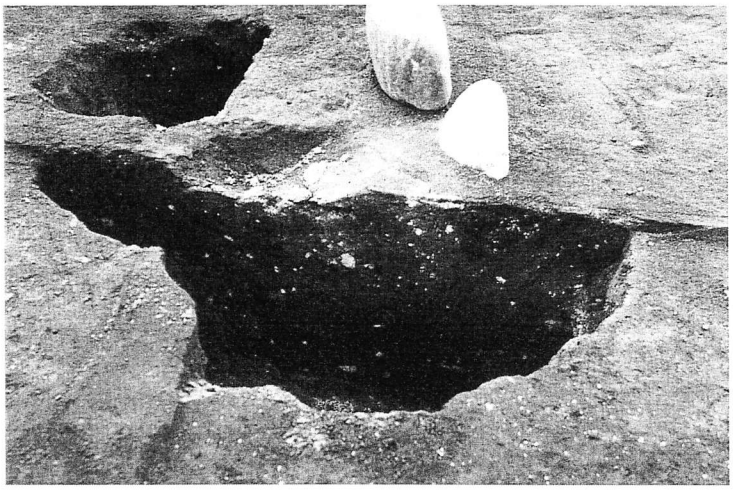


SX(S)02



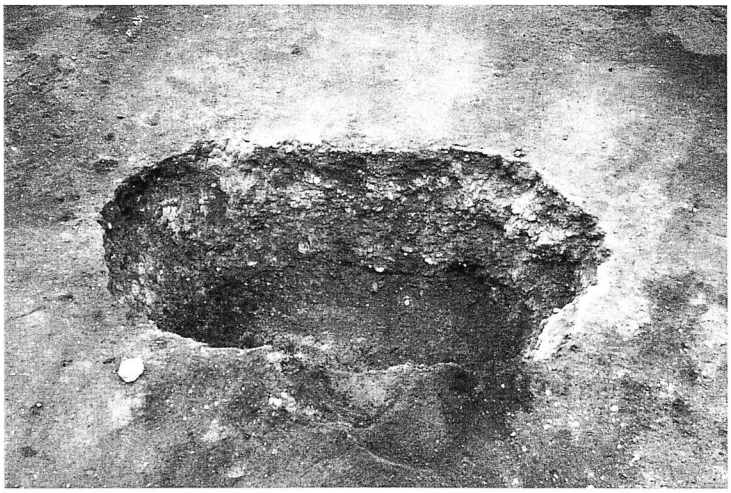
PL34　一本木後口配石遺構群(2)

SX(S)02



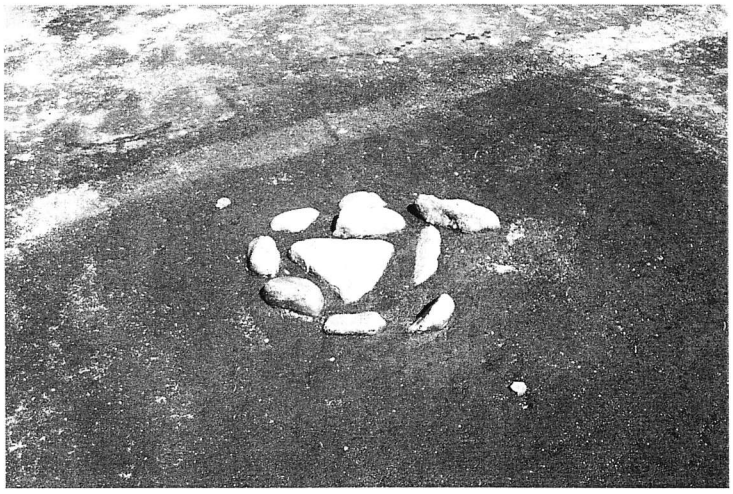
SX(S)03

SX(S)03

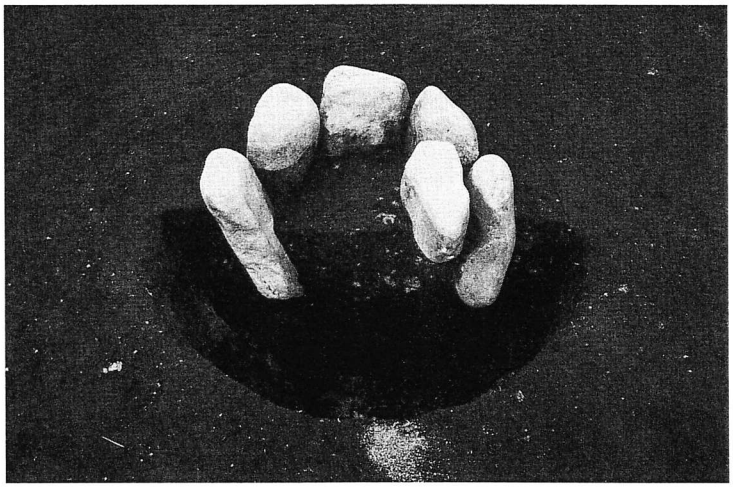


PL35　一本木後口配石遺構群(3)

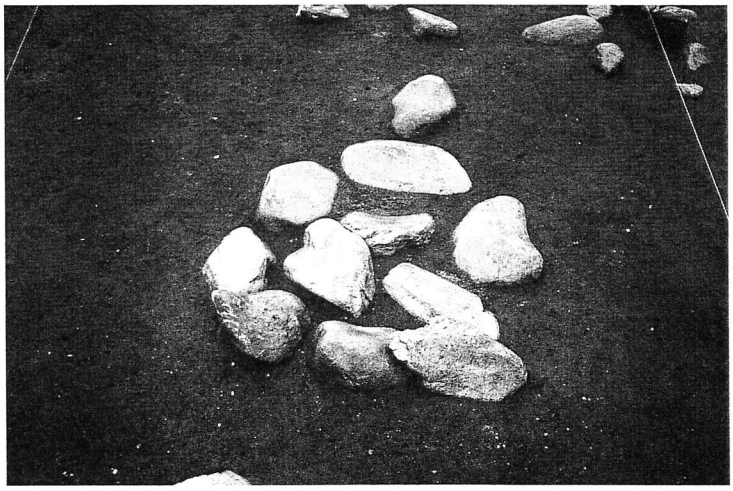
SX(S)10



SX(S)10

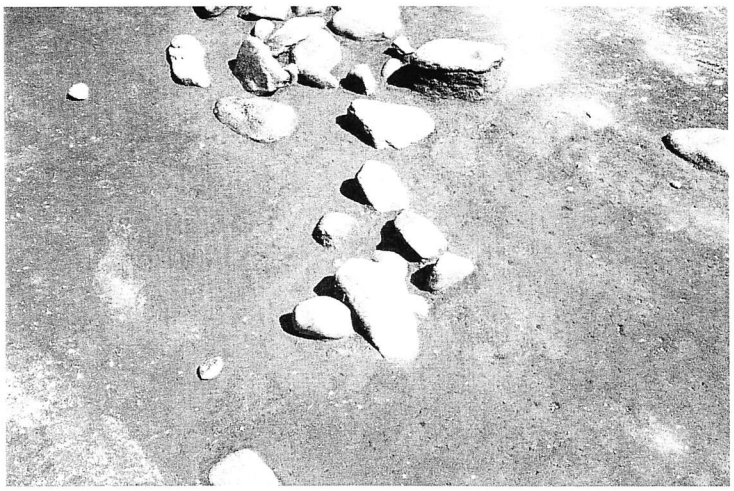


SX(S)11



PL36　一本木後口配石遺構群(4)

SX(S)12

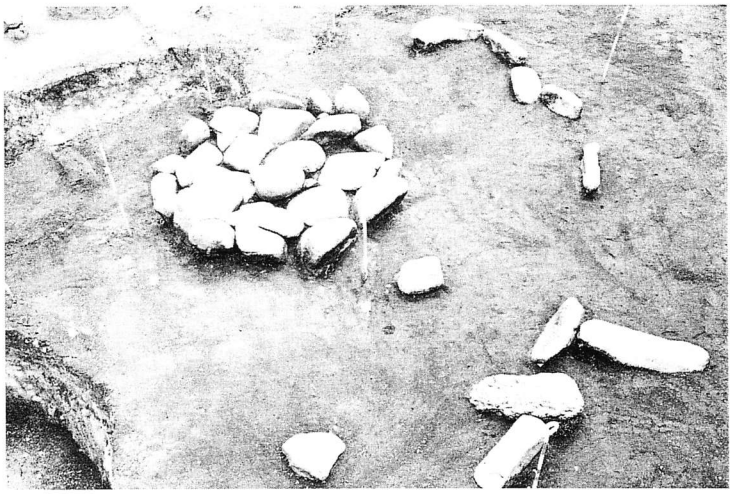


SX(S)12

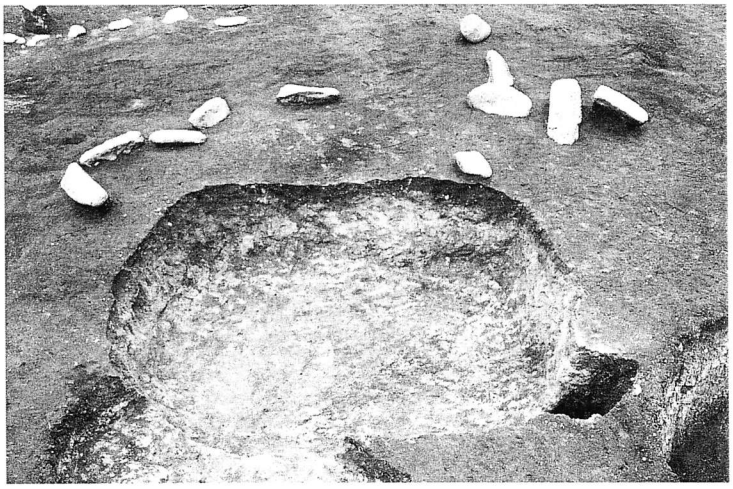
SX(S)12

PL37　一本木後口配石遺構群(5)

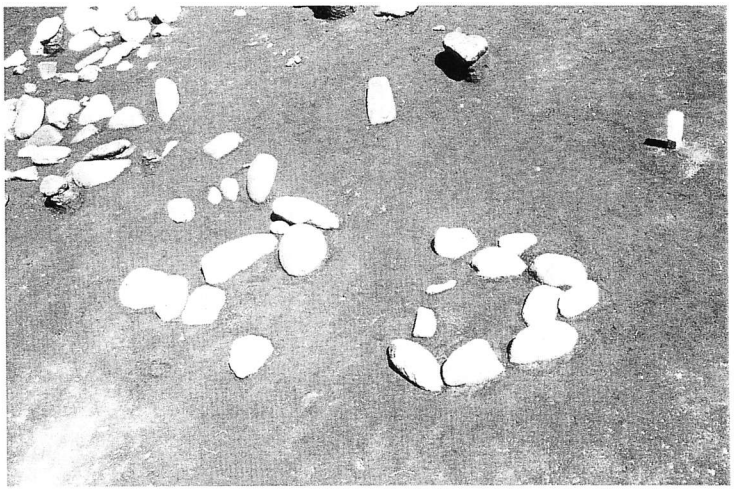
SX(S)14



SX(S)14



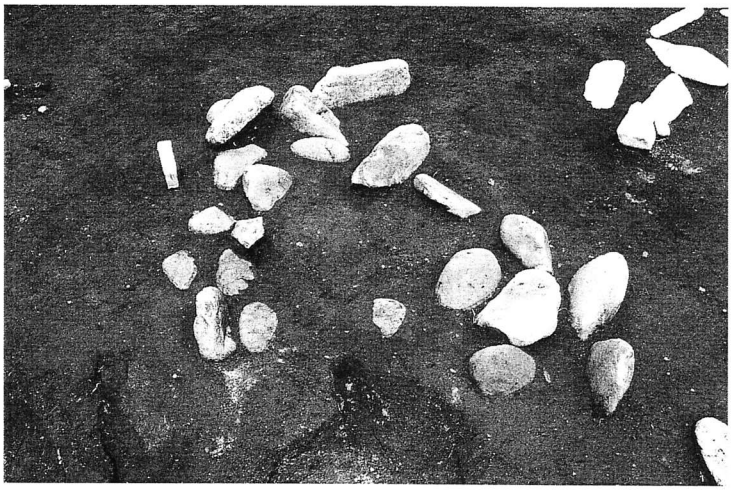
SX(S)16



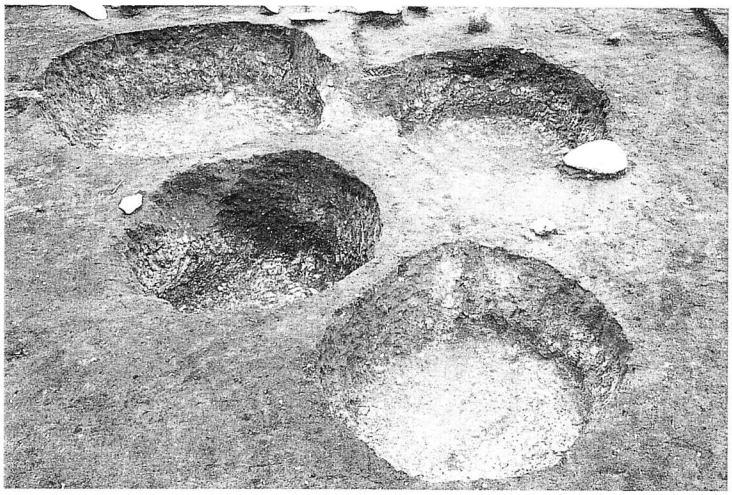
PL38　一本木後口配石遺構群(6)

SX(S)16

SX(S)17

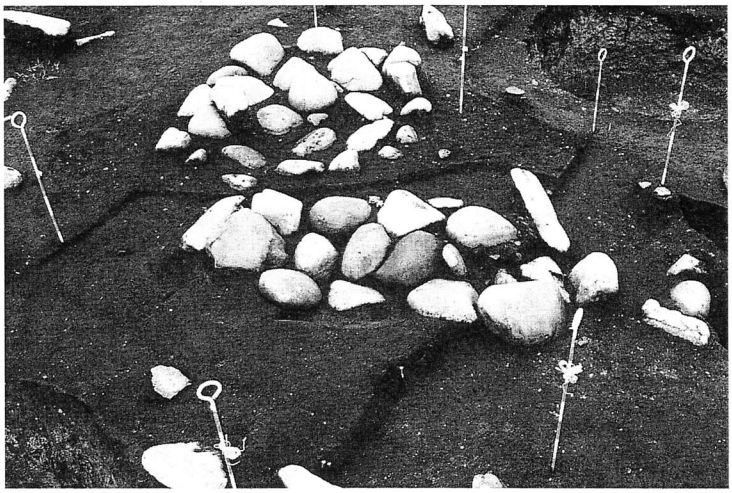


SX(S)17・20・21・25
下部土坑

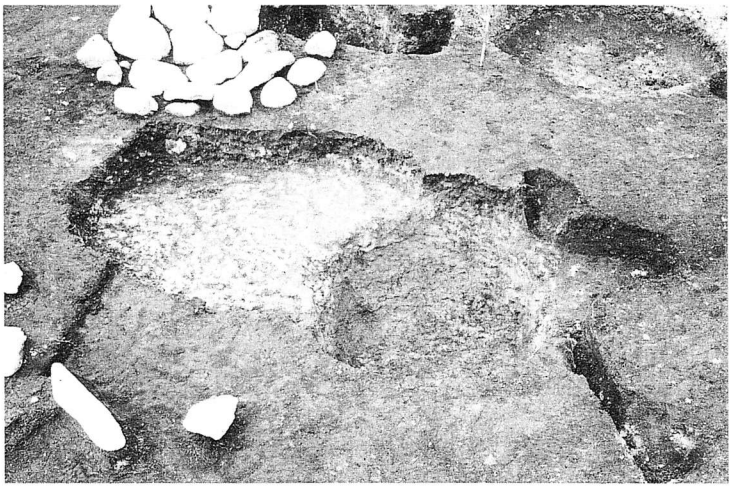


PL39　一本木後口配石遺構群(7)

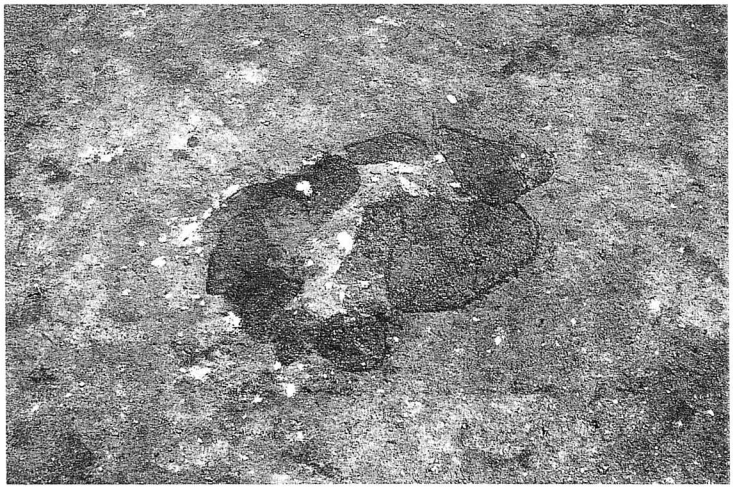
SX(S)14・18



SX(S)18

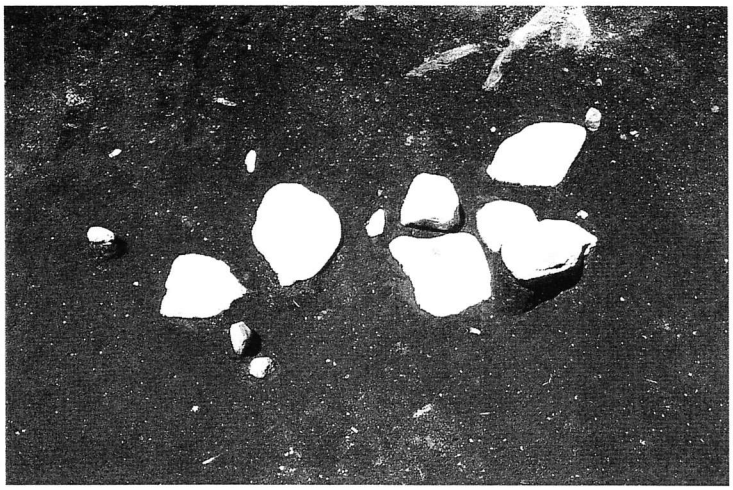


SX(S)35

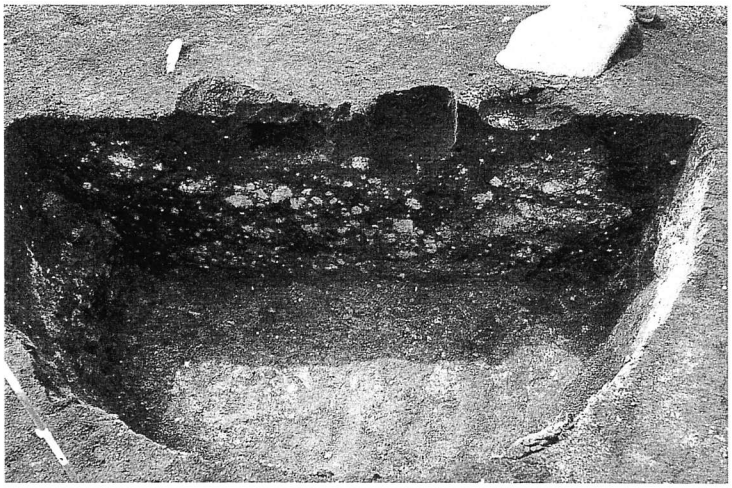


PL40　一本木後口配石遺構群(8)

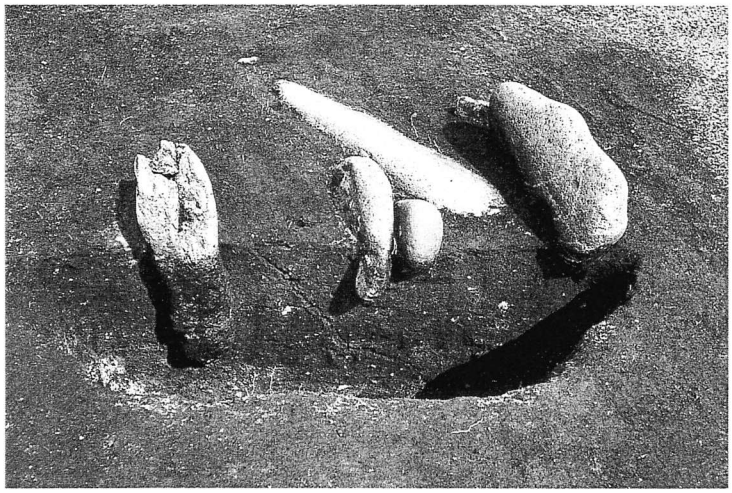
SX(S)41



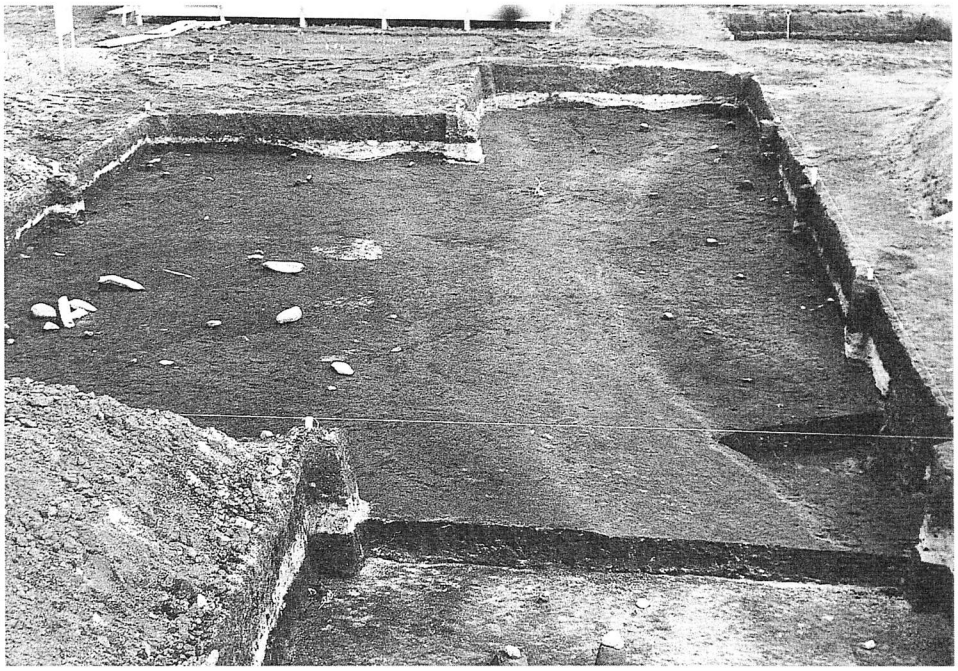
SX(S)41



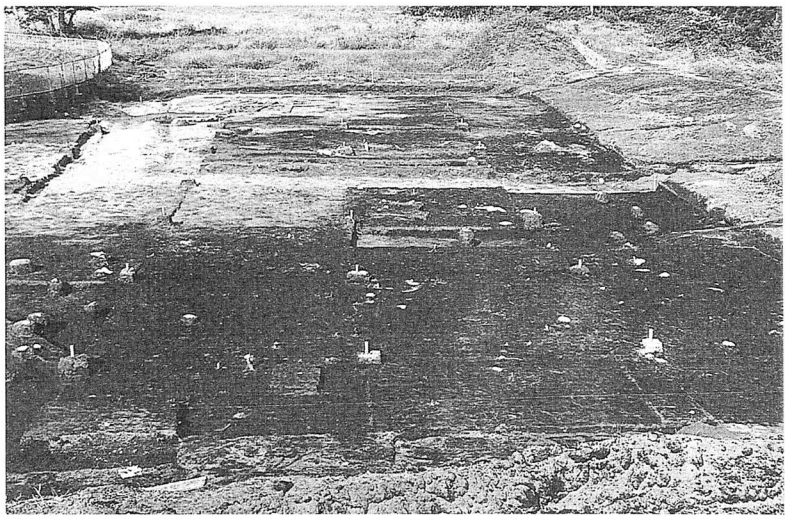
SX(S)43



PL41　一本木後口配石遺構群(9)



Ａ１区の道路状遺構



Ｂ２区の道路状遺構
野中堂環状列石の南東側に２本の「ワダチ」がみえる。

第42図　道路状遺構(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせき　おおゆかんじょうれっせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	特別史跡　大湯環状列石　発掘調査報告書(22)
副書名	
巻次	
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料
シリーズ番号	85
編著者名	鹿角市教育委員会（生涯学習課）
編集機関	鹿角市教育委員会（生涯学習課）
所在地	〒018-5292　秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
発行年月日	西暦2006年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市十和田大湯字万座字野中堂字一本木後ロ	05209	123	40度 16分 21秒	140度 48分 50秒	2005 8.10 ～ 2005 11.14	合計 1,546.79㎡	環境整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代後期	縄文時代 配石遺構 焼土遺構 土坑 歴史時代 道路状遺構	縄文土器(後期) 石器	万座・野中堂環状列石を中心に広がったマツリと祈りの場。 平成10年度より環境整備が行われ、縄文時代の精神文化を感じることができる。併設されている大湯ストーンサークル館では史跡の解説のほか、体験学習や講座が行われている。

大湯ストーンサークル館　E-Mail oyusc@ink.or.Jp　URL http://www.ink.or.jp/~oyusc/

鹿角市文化財調査資料85

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(22)

発行年月日　平成18年３月31日
発　行　者　鹿角市教育委員会
〒018-5292
秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
電話　0186-30-0293(生涯学習課直通)
印　刷　所　株式会社　米代新報社